
Tales of memories

yamato-Y

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Tales of memories

【Nコード】

N6370I

【作者名】

yamato-y

【あらすじ】

大不況から立ち直った世界『アレテイヤ』。帝都グロリアで何不自由なく育ったヤスが記憶を失ったサラの為、そして自分の為に出る。

『真実を知るRPG』

プロローグ（前書き）

初投稿です。

未熟者ですが、読んでいただけると嬉しいです。

プロローグ

毎日同じ繰り返し、同じ光景を眺め、同じ道を歩いてきた俺だが、

『やべえ、寝坊したっ』

今日の朝はそんなことを考えている余裕は無かった。

『夜中まで練習し過ぎたか』

練習とは剣術のことである。

俺は毎日道場に通い、終わった後も自宅で練習を欠かさずやって来た。

寝坊はよくあることだけど、今日は遅れるわけには行かなかった。

『認定試験の日に限って何でこんなギリギリにっ』

いつもの寝坊とは違い「大」が付くほど試験開始時間ギリギリに起きたのだ。

認定試験は下の一段から上の十段まであり、俺は丁度中間の五段を受けるのだが……、

『幸先悪いぜ』

愚痴りながら全力疾走の俺に、

『あらヤス、寝坊かい？懲りないわね』

いつも良くしてもらってる近所のおばさんだ。

てか、余計な御世話だ。

『ってヤス危ない！前前！』

『え？』

俺は横転した。

誰かとぶつかってしまったのだ。

『いった〜い！何すんのよ！』

目の前には見知らぬ俺より2、3才ぐらい年下に見える女の子が倒れていた。

『ごめん、大丈夫？』

『ったくもう、ちゃんと前見なさいよ！』

そう言っただけで彼女は早々と去っていった。

『今日は厄日か何かか？本当ついてない……………って、あれ？』

『どうしたんだい？大丈夫かいヤス？』

俺はおばさんの言葉なんか聴こえない程頭が真っ白になった。

『母さんの形見が無い！……………まさか』

俺はさっきの女の子がすぐ頭に浮かんだ。

俺は試験なんて頭に無かった。

母の形見だけが頭にあった。
唯一の母の形見だけあって思い入れは強かった。

『ちよっと！道場行くんじゃないのかい?!』

俺はもう女の子が行った方に走っていた。

『くそっ！あつちは!』

俺は女の子をすぐ見つけた。

女の子は帝都の外に出ようとしていた。

『その女っ！待てっ!』

女の子はびっくりした顔をしてすぐさま帝都を出てった。

そして俺は帝都の出入口の前まで来た。

『帝都の外……』

帝都の外。俺は父に帝都の外は危ないから絶対に出てはいけないと言われていた。

けど俺は………、

『……、父さんごめんっ』

俺は帝都の門をくぐり、外へ走ってった。

初めて帝都の外に出た俺。

そこには俺の知らない真実があることもまだ知る余地もなかった。

《第一部》 1、帝都の外へ

『はてさて、勢い良く飛び出したは良いものの……』

俺は走っていたが足を止めた。

女を見失ってしまったのだ。

因みに持ち物は竹刀と少しの金だけ。

もちろん外に出たのは初めてなので道も分からない。

『どこ行きやがった、あの女』

『がさがさ』

『なっ、何だ?!』

俺は草むらの方を見た。

草むらの中に何かいるようだった。

『まさか、あの女か?』

俺は叫んだ。

『おい、大人しく出てこい!』

その時、草むらから茶色い毛の小動物が出てきた。
ん、何だこの動物?

『ぐー』

その動物はそう鳴いた。
ん、ビー？

『なるほど、こいつがビバッチか』

本で読んだことがあることを思い出した。えっと、何だっけな「ビバッチの3日間」って名前の本だっけか。
あれは面白かったな、確か……………、

『ビー！』

『うわっ?!』

俺が本の内容を思い出そうとした時、ビバッチは俺に飛びかかってきた。

俺はとっさに竹刀でビバッチを打ち払った。

『ビッ?!』

ビバッチは地面に叩きつけられた。

『危ねえ、ここは帝都の外だった』

俺は気を引き閉めた。

にしてもあの女、どこ行きやがった。

早く見つけて大事な母さんの形見を取り返さなくてわ。

俺が道を進もうとしたその時、

『ビッ、ビッ、ビー！』

ビバッチは起き上がって俺めがけて走ってきた。

『うわっ！何だよコイツ！』

俺は急いで逃げる。しかしビバッチはずっと追ってくるのだ。

何だよコイツ！尻尾振って走ってくるとか気持ち悪いぜ。

とりあえず、いつまでもついてくるので俺は森の中に入り、振りきろうと思った。追って来れるもんなら追ってみてんだ。

しかし、森の中に入ってもしつこく追っかけてくる。

何なんだよ。

俺、そんな気はないぜ？

俺は森を抜けようとしていた。

しかし、ビバッチはまだ追ってくる。

『くそっ！こんなことしてる場合じゃないのに！』

俺は森を抜けた。

『?!』

その時だった。

俺の身体は宙に浮いていたのだった。

『マジかよ?!』

俺はそのまま落ちた。

バツシャーン!!!

俺は一瞬何が起きたのか分からなかった。

『うわっ!川か?!』

『ビュー!!--!』

上からビバッチが川に落ちてくるのが見えた。

そして川にダイブ。

『ビュー!!--ビツ!--ビュー!!--!』

するとビバッチは手足をばたつかせながら川を流れていった。
どうやら泳げないみたいだ。

そして俺は何とか岸に上がった。

『ふう、まさか川があるとはな。まあお陰様で助かったぜ』

そう一息つき、周りを見ると川岸に何か流れ着いているのが見えた。何だあれは。

俺は近づいてみた。

『ちよつと待て！人じゃないか！』

川岸には意識の無い一人の女が流れ着いていた。着ている服、いやドレスか？

とにかく見てすぐわかるお金持ちのお嬢様って感じの女だった。

しかしなんでこんな所にそんなお嬢様が。

『って今はそんなこと考えてる場合じゃねえ！』

俺はまた周りを見渡した。

『あれは?!』

近くに村があるのが見えた。

俺はすぐ彼女を抱き抱え村に急いだ。

2、騎士は何を

俺は彼女を抱き抱え村までやって来た。

そろそろ日が沈む頃だろうか。

俺はいろいろな事があり疲れていたが、ほんの一時疲れを忘れさせられた。

その村は草木が恵まれていて俺は初めての光景で見とれていたからだ。

しかし、すぐさま1つ気になった事があった。

それはピリピリした雰囲気だ。

村の人は何かに縛られているように感じた。

考えすぎかなと思い、徐々に疲れを思い出しながら、とりあえず俺は宿屋を探し始めた。

早く彼女を休ませなくては。

その時、町の中を進んでいくと、何やら見たことがある団体が目に入った。

帝都の騎士だ。

帝都の騎士は今、各街の豊かな街作りや治安維持などの手助けをしていると聞く。

なるほど、この村にもちゃんといるんだな。

その騎士達は集まって会議をしているみたいだった。その時、その騎士団の所に村の人々が集まって来た。そして騎士団含め村の人々は村の外へ出ていった。

一体何処に行くんだ、あいつら。

不思議に思いながらも俺は村の宿屋に歩きついた。

『いらつしゃい、……ってあなた達ぼろぼろじゃないか?!大丈夫かい?!』

宿屋のおばさんだ。

『とりあえず、この娘にベッドを用意してくれないか!』

俺は近くの川で流れ着いていたことを話した。

『分かったわ、彼女は私に任して。あなたはそこの部屋を使いなさい』

そう言っておばさんは彼女と共に奥に消えていった。

彼女、大丈夫だろうか。

とりあえず、俺も部屋に入りシャワーを浴びた。

俺はシャワーを浴びながら、いろいろ頭の中で整理していた。

さっきの騎士団のこととか今後どうするかとかね。

……てか、試験の存在忘れてたぜ。

まあ別に良いんだけど迷惑かけてなきゃ良いんだが。

あとは母さんの形見を盗んだ女。

もう遠くへ行ってしまったんだろうか。

つたく、あのビバッチのやろう。

俺は風呂から上がり、外の空気を吸いに行こうとフロントまでやって来た。

『あ、待ってください！』

俺は呼び止められた。

声のする方を向くと、一人の俺と同年ぐらいに見える男が立っていた。

『彼女の連れの方ですよね？』

『ああ、まあそうなるかな』

『安心してください。今はぐっすり眠ってます。』

打ち身などの軽い傷ぐらいだったらしい。
良かった。

『あ、そういえば聞きたいことがあるんだが』

俺はさっきの出来事が心に引っ掛かっていたので聞いてみた。

『ここに来る途中、騎士達と村の人達が村から出るの見たんだが、
いったい何処に行くんだ？』

俺がそう言つと、男は黙つた。
ん？俺変なこと言つたか？

『近くの鉾山です』

彼は喋り出した。

『騎士の奴等は俺達村の人々を利用してるんだ』

俺はびっくりした。

『利用?!それっていつたい……』

『あいつらは村の人々を交代で利用して鉾山で採掘させて自分たち
帝都の利益にするんだ、俺達にはほとんど利益は無いよ』

まさか、騎士団がそんなことを……。
俺は混乱していた。

『すまない、変なこと聞いて……』

俺はそう言つて自分の部屋に戻つた。

俺はまだ言われたことを受け止めることが出来なかった。

3、記憶喪失、そしてサラ

この世界『アレテイヤ』は過去に大不況に陥った。世界の人々は一致団結し大不況と戦い、豊かな暮らしを実現した。拠点となった街グロリアは後に帝都グロリアとなり、

『今もなおグロリアを中心とし世界の安定を築き上げてる……か』

俺は溜め息。

宿屋に来てから次の日の朝のこと。

俺は昔帝都で勉強した、この世界の歴史のとある一部を思い出していた。そう、世界の在り方が変わった時期とでも言っところか。

帝都に居た時はこんな風になってるなんて聞いたこと無いぜ。

いや、まさかな。

その時、宿屋の男がノックして入ってきた。

『彼女、目を覚ましたよ!』

『本当か!』

俺は男に連れられて彼女が居る部屋に移動した。そこにはベッドに座った彼女が居た。

『良かった、元気そうだな』

『…えつと……』

『あつ、君が川に流れ着いていたのを見つけて俺がここまで連れてきたんだ』

しかし、彼女はとても不安そうな顔をしていた。

『えつと、大丈夫か？』

『あの、大丈夫じゃないかも……』

…えつと、何処か痛いのかな？
少し間が空き、彼女は言った。

『今までの記憶が思い出せないの』

彼女はさらつと言った。

ん？記憶が思い出せない？

『記憶喪失……』

その場が凍りついた。

『あ、でも名前だけは覚えてるみたい』

彼女はそう言って立ち上った。

『私の名前はサラ』

そう言った時の彼女の顔には不安そうな表情は無かった。

その時だ、宿屋に誰かが入ってきた。

『誰かいないか?! 大変なんだ!』

村の人が駆けつけてきたのだ。

宿屋の男はすぐさま対応しに行った。

『どうしたんですか?!』

『グレンか! 大変なんだ! 鉾山でいきなり魔物が襲ってきて怪我人が! 今怪我人はこっちに向かっているから宿屋に入れてくれないか!』

あ、あいつグレンって名前なのか。てか魔物が襲ってきただと?!

『なんだって……』

グレンの顔が青ざめていた。

『おい、どうしたんだよ?』

俺は聞くとグレンは慌てて言った。

『今の時間帯は俺の母さんが!母さんが働かされてる時間帯なんだ
!』

『なんだって?!』

次から次へと問題続出。

昨日に続き今日も厄日になりそうだ。

『俺行ってくる!』

グレンは今にも飛び出そうとしていた。

『まて!俺も行く』

『いや、でも』

『1人じゃ危ないだろ。それにおばさんには世話になったしな』

『ありがとう!』

グレンは村の人に宿屋を解放してあげ、俺達は鉱山に行こうとした。

『待って!私も...』

サラが俺の腕を掴んできた。

『いや、サラはまだ起きたばかりだからやめた方が良く。だから残って怪我した村の人達を見ててくれないか』

俺がそう言つとサラはしぶしぶ承諾した。

俺達は帰ってくる村の怪我人の中にグレンの母さんがいないか確認しながら鉱山に向かった。

しかし母さんの姿は無く、鉱山の入り口までやって来た。

『母さん.....』

『大丈夫だよ、騎士団もいるんだ』

俺達は鉱山に入っていった。

すると奥から人が走ってきた。

『おい、冗談だろ』

走ってきたのは騎士だった。

『おい、奥にもう人はいないのか？奥はどうなってるんだ！』

俺は騎士に聞いた。

『知るか！自分の命の方が大事だ！』

………糞野郎が。

見る限り新米騎士か？

だとしてもこれは無いだろ。

『急ぐぞ！』

俺達は奥へと進んでいった。

4、心の変化

足音が響き渡る。

水滴が落ちる音が聴こえるほど、鉱山の中は静まり返っていた。

本当に魔物が暴れてるのか疑うぐらいだ。

『もしかして、もう……』

グレンは心が折れそうだった。

つたく、どこにいるんだ。

鉱山の中は松明の明かりだけで薄暗いところも多々ある。

これじゃあ、いつ魔物に襲われるか分からないな。

『気を引き閉めていくぞ』

『……ん？あ、ああ、冷静かつ迅速にだね……』

おいおい、大丈夫か？

グレンに冷静さを感じられなかった。

まあ無理も無いけどな。

その時だった、奥から話し声が聞こえた。

『母さん?!』

『おいっ、ちよっ！待てっ！』

声のする方にグレンは走り出した。
俺も慌てて追う。

すると、騎士団がそこには居た。
しかし、村の人は見当たらなかった。

『おい、村の人は！母さんは！』

グレンは騎士の両肩を掴んで揺らし、叫んだ。

『うるさい！触るな！分をわきまえる！』

グレンは突き飛ばされた。

『おい、大丈夫かよ』

『……くそっ！』

グレンは小声で言った。
俺は騎士に聞いた。

『村の人はもうこの中にはいないんだろっな』

『村の人？ああそれがまだいるんだよ』

『いるって……、何処に！』

『それがどっかに行っちゃまって。こっちはこっちで魔物との応戦で怪我人が出たんで一旦体勢整え中だ、……ってなんだお前ら？』

『……もういい、行くぞ』

俺はグレンの腕を引っ張り奥に進んだ。

この時、俺は騎士、いや騎士団長への尊敬の気持ちが疑問に変わっていた。

『まったく何やってんだよ』

騎士団の話はよく聞いていたが、本当はこんな腐ってたとはな。

まだまだ知らなくてはいけないと俺は思った。

何処までが本当で、何処までが嘘かね。

『キヤー！』

『！……！』

その時、奥から女性の叫び声が聞こえた。

『この声…、今度こそ母さん!』

『魔物か?!くそ!』

俺達は急いだ。そして進むと村の人 と思われる人計三人と騎士二人、そして物凄く大きいクマ型の魔物がいた。

『く、くそお!』

『グオー!』

騎士は斬りかかったが魔物は騎士の剣を屈み払った。

『母さん!』

その時、グレンはその隙に村の人達の方へ駆け寄った。おばさん、グレンの母さんもそこにいた。

『う!うわ!』

その時、騎士二人が逃げていった。またか、それでも騎士かよ。

すると魔物はグレンをターゲットに腕を振り上げた。

『あぶない!』

『え?』

その瞬間、グレンは 魔物の攻撃を受け、壁に叩きつけられた。村の人達は一斉に叫んだ。おばさんはグレンが目の前でやられ、気を失いそうになっていた。

『くそ!』

俺は竹刀で斬り、いや打ちかかったがさすがに僅かなダメージしか与えられない。

『くそ! どうすれっ!?!』

その瞬間、俺も魔物の攻撃を受け壁に叩きつけられた。

イテッ!

こりゃキツいぜ。

そして俺は近くに落ちてた騎士の剣を拾った。

へへ、良いもんがあんじゃねえか。
これが実物の剣か、初めて握るぜ。

『おい! 生きてるか!』

俺はグレンに呼び掛けた。

『ああ、何とかな』

俺は何か策を考えた。

ただ突っ込むだけではまた返り討ちだ。

少しの間……、いや完全に隙を作れば。

今魔物は俺とグレンに挟まれ道の真ん中、……………真ん中？

『そうか！』

俺は思い付いた。

一か八か、やってみる価値はあると思う。

『松明だ！松明を落としてくれ！』

俺はグレンにそう呼び掛けた。

松明は幸いにも道の真ん中に吊るされてあったのだ。

『分かった！』

グレンは松明に自分の剣を投げた。

その剣は上手く松明に命中した。

そして、松明は魔物の頭に落ちた。

『グオー！？』

『今だっ！』

俺は松明の火が体毛に移り気をとられている魔物目掛けてもうダッシュ。

そして、

『うおおおおお！！！』

魔物の胸に鋭く剣を突き刺した。

魔物は奇声をあげた後、地面へと崩れ落ちた。

5、記憶は自分の中に

『た、倒したか』

魔物に息はなかった。

俺は緊張の糸が切れ、その場に腰から崩れ落ちた。

な、なんだ、余裕じゃねえか、は、ははは。

ああ体が痛い。

『母さん大丈夫?!良かった、本当良かった』

グレンの方も大丈夫みたいだな。

これでとりあえず一件落着だな。

『ありがとうございます。何の関係のない私たちを助けてくれて
グレンの母さんが話しかけてきた。』

『いや、当然のことをしたまですよ。宿屋ではお世話になりました』

たし』

その後、俺達は鉾山の外に出た。

日差しが眩しい。

『お〜い!』

その時、村の方からサラが走ってきた。

『サラ! どうしてここへ』

『ごめん、心配で来ちゃった』

『村の人達は大丈夫なのか?』

『うん、大丈夫だよ。みんな軽い怪我だけだし。強い人達だよ村の人!』

サラは満面の笑顔でそう言った。

この笑顔を見た俺は、思うと無責任なことをしてしまったと罪悪感があった。

『……サラも十分強い、いや、強すぎだよ』

『うん？』

『あ、いやその、記憶を失ってしまったって間もなく、まだ自分の中で整理がついてないだろうという中でいろいろ押し付けちゃったなあって……』

『そんなのどうってことないよ！私だけ何もしないのは私が許さないし。それに……』

『それに？』

『記憶を失ってるって感じがしないの。何と云うか、霧がかかっていると云うか……』

サラは腕を組み、考えている。

『とにかく！記憶は私の中にあるような気がするの』

サラは真剣な顔をして言った。

『って、怪我してるよっ！』

『あ、大丈夫だった！』

真剣な顔から一変。

いきなりサラが俺の身体をさわりだした。

くすぐつたい。

『つて、イテッ！』

俺は思わず大声で言い、その場にしゃがんだ。

やべえ、横腹の痛みが増してきやがった。

その時だった。

俺はいきなり温かい光に包まれた。

『何だ？これは……』

『サラ！君は！』

グレンの驚いている声が聞こえた。

俺はその声を聞きサラの方を見上げた。

するとサラは祈るようにして立っていた。

よく見ると地面には魔方陣が光によって浮かび上がっていた。

『治療術か!』

グレンがそう言った。

なるほど、道理で痛みが和らいでいくわけだ。

俺の身体の傷は、みるみるうちに良くなっていた。

すると、いきなりサラが倒れた。

俺はとっさに抱える。

魔方阵も倒れたのと同時に消えていた。

『おい!大丈夫か?!』

『今、私治療術を?』

サラは驚いていた。

『私、無意識の内に……』

『サラ?』

『あ、ああ!大丈夫大丈夫!ちょっと目眩がしたただけだから!』

と言い、サラはスツと立ち上がった。

『ありがとう。サラのお陰で良くなったよ!』

『少し霧が晴れた?』

『え？』

サラが意味深な顔でそう言った。

『いや、やっぱり気のせい？でも私が治癒術を使えることが分かった…！』

サラは何かを決心したような顔をしていた。

『あの、とりあえず村へ帰らない？』

グレンが言う。

『ん？ああ、そうだな』

大賛成だ。

俺達は村へ着いた。

ついさっきいた場所なのに懐かしいな。

しかし宿屋に向かう途中であることに気づいた。

『騎士団がないな』

見渡す限り、騎士団の姿は確認出来なかった。

そして宿屋に着き、怪我人の治療など終えてその夜のこと。

『サラ、お疲れ。あんなに治療術使って身体は大丈夫なのか？』

『うん！大丈夫だよ。さっきはいきなりだし驚いちゃっただけだよ』

…サラ、どう見たって疲れてるのが分かるぞ。

サラは汗を流して少し息をきらしていた。

『そう言えば、名前』

名前？

『名前聞いてないよ？』

ああ、そう言えば。

『俺はヤス。よろしくな』

『ヤス……？あ、うん！よろしくね！』

『どうした？』

『いや、何故だかヤスって聞いて懐かしいなって感じたから』

サラはニコツと笑った。

『まあとりあえず今日は休もう。おばさんには許可は貰ってるから』

そう、正直言ってくれたただ。

『うん、そうだね。……じゃあまた明日、お休み!』

『ああ、お休み』

そして俺は自分の部屋に戻っていった。

明日のことは明日決めよう。

俺はベットに入り、すぐに眠りに着いた。

6・旅（前書き）

今回の話から会話文を『』から「」に変更します。
ご了承ください。

6・旅

「ふうわあ〜……」

窓のカーテンの隙間から朝日が溢れている。
俺は背伸びをし、深呼吸。

「よし!」

サラの治癒術のお陰か今日はいつもより好調な感じがした。

受付に移動するとサラが椅子に座っていた。

「あ、おはよう!」

笑顔で挨拶をするサラ。

サラの笑顔を見るとこっちまで笑顔になりそうだ。
元気を与えてくれるとはこの事だな。

「おはよう、調子はどう?」

「大丈夫だって!心配しすぎだよ」

サラと会話をしているとグレンとおばさんが受付裏から出てきた。

「やあ、お二人さん元気かい？」

「おはよう、二人とも」

グレンもおばさんも元気そうので何よりだ。

「そう言えば、村にいた騎士団の連中は帝都へ戻ったみたいだねえ。何だか昨日の騒ぎで負傷者がかなり出たんだとか」

なるほど、だから騎士の姿が見えなかったのか。にしてもだらしねえ。

まあ新米騎士も居たみたいだし、ここの騎士団は全体的にも下級クラスってところか。

「ところで、あんた達はどうするんだい？」

「ああ、そう言えばそうだな。サラはどうするんだ？」

「私？私は…旅に出ます」

「旅って、一人でかい?!」

おばさんは驚いていた。

「はい。私思ってたんです。旅に出ているんなことを経験すれば記憶も思い出すんじゃないかって。何もしなかったら何も得られません

し」

サラは真面目な顔でそう言った。

「でも危ないわよ……」

おばさんは心配そうな顔をする。
やれやれ。

「あのおばさん、俺を忘れてませんか？」

「ヤス？」

俺はサラと目があつた。

俺はニコツと笑う。

「サラは一人じゃないですよ、俺もいますし」

「ヤス?!……いやでも……悪いよ」

「じゃあ一緒に行ってくれないかな? まあ、俺も旅に出るつもりだつたし。ほら、俺一人だと危ないじゃん? だからさ」

俺がそう言うとサラはクスツと笑った。

「…ありがとう!」

「決まりだな。まあそういう訳だ、おばさん」

「まああなたが一緒に行くなら安心だわ」

おばさんは胸を撫で下ろした。

その瞬間、おばさんは何か思い付いたようだった。

「グレン！あんたもついていきなさい！」

「お、俺?!」

グレンは意表を突かれ驚いている。

「グレンにはこの村の人達を助けてもらった代表としてついていきなさい！」

「代表つて、おばさん一体」

俺は問う。

するとおばさんは胸を張っていた。

「それでも村の長なんだよ」

グレンがそう言い溜め息を一回。

てかおばさん村長だったとはな、驚いたぜ。

「でも村が心配だ」

「大丈夫！村のことは心配しないで！当分騎士団も帰ってこないだろうし……多分」

おいおい、ちょっと心配だな。

グレン、こんなんで良いの…、

「分かった、俺行ってくる！」

って良いのかい！

「二人とも、俺も一緒に言っても良いか？」

「もちろん！」

もちろん俺も良いけどな。

「ありがとう！あ、そう言えば今さらだけど自己紹介してなかったね。俺はグレン、よろしく」

「ヤスだ、よろしくな」

俺とグレンは固い握手を交わす。

「良いねえ、これぞ男同士の青春だね！」

そう言われると何か恥ずかしいな。

「サラもよろしく」

「うん、よろしくね！」

サラとグレンも握手を交わした。

「そつだ！サラちゃん、ちょっとおばさんについておいで！」

おばさんはいきなりそう言つと、サラの手を掴んで宿屋の奥へと連れ込まれた。

…ついておいで？

とまあ十分ぐらゐしてサラとおばさんは戻ってきた。

「えへへ、似合つかな？」

サラはドレス姿から、何て言つんだらう？

動きやすそうな女性ものの服に襜袂のミニスカートにスパッツとでも言つのか？

まあそんな感じの服に着替えていた。言葉で説明するつて難しいな。

んで髪は下ろしていたのがポニーテールになっていた。

「あ、ああ！似合つてるよ！」

俺は見とれていて返事が遅れた。

「それつて姉さんの服か」

グレンが言う。

姉さんが居たのか。

「娘は嫁に行ったのよ。んで服を置いてっちゃったからね。その服はサラちゃんにあげるわ。あとコレ」

おばさんはサラに魔術師が使う杖を渡した。

「これは？」

「昔、治癒術師を目指しててね。その時使ってたものよ。結局私にはセンスが無かったみたいだね。んで今はもう使わないからあげるわ」

「あ、ありがとうございます！」

サラは大事そうに杖を抱き抱えている。

「さあ、私ができるのはここまで。あんたたち、頑張んなさいよ！」

「ああ、泊めてくれてありがとう、おばさん。さあ、そろそろ行こう」
「！」

俺たちは宿屋を出た。

サラの記憶を戻すため。

今世界はどうなっているのかを見るため。

あと母さんの形見のことも忘れちゃいけないぜ。

今ここから旅が始まる。

7・いざ港町へ

「ここは何なんだ」

「何って街道だけだ」

俺の独り言にグレンが突っ込む。

「いや、そうじゃなくて…」

俺たちは村を出て、次の町に向かう街道を歩いていた。
なんでもグレンが言うに、その町は港町らしく、俺は話でしか聞いたことのない港町にテンションが上がっていたのだが、今俺はイライラしていた。

何故かって？

「何でこんなにビバッチがいんだよ」

「ビッ！」

俺は鉱山で拾った騎士団の剣の鞘でビバッチを払っていた。

「でもビバッチは魔物だけど人にはあまり襲ってこないから大丈夫だよ」

グレンはご丁寧にビバッチを跨ぐ。
つか、それって魔物って言うのか？

「この動物可愛いね！」

「ビッ、ビー！」

サラはビバッチを抱き抱えていた。
よっぽど強く抱き締められてるのか。

……ビバッチが嫌がってる。

「サラ、仮にも魔物だ。いつ襲われるか分からないから放しとけよ」

「ええ、こんなに可愛いのに」

……ごめん、俺には可愛いとは思えない。
前に追いかけて回されたしな。

「大丈夫だよ。巣を荒らしたり食料を取られたりしない限り襲って
きたりしないから」

あのなあ、グレンそんなこと言うなよ。

俺はな、実は何故か苦しんでるビバッチのためを思ってたなあ……。

「あ」

「あ？どうしたんだヤス？」

「レベルが上がった」

「おめでとう」

「ありがとう」

ビバッチを払ってたら経験値を貰ってたみたいだ。
って、なんという話をしてるんだ俺は。

「にして凄いやねビバッチは。木も登れるし、川も泳げるし」

「ん？川も泳げるのか？」

「ああ、水掻きがあるしね」

.....。
じゃああの時のビバッチは一体何なんだったんだ？

「ビバッチ」

「あ、待って何処行くの？」

「くらくら」。

村を出発し、ビバッチ街道（自称）を進んだ俺たちは港町に着いた。

「うわー、凄い活気だな」

港町は祭りのように盛り上がっていた。

いろんな出店があったりして聞いてた以上の光景に俺はまたも見とれていた。

「やっぱりここに来ると自分までテンション上がったちゃうなあ」

「そうか、グレンは来たことあるんだもんな。」

「ああ、ここリマーニは港町だけあっていろんな品物が揃ってるんだ」

なるほど、となると情報量も多そうだな。

あの盗賊女も見ただやっががいるかもしれない。

「とりあえず、船のチケットを買いに行こう。港町を見て回るのそれからだ」

「ああ、…ってサラは？」

「ああ、サラならあそこだよ」

俺はグレンが指差す方を見た。

サラは人だかりのところで何かを見ていた。

「サラ、何見てるんだ？」

「あ、ヤス！何かの見せ物みたいだよ」

俺も覗いてみた。

えっと、見せ物って、ただ舞台の上で人が少し前屈みになって腿上げしてるだけじゃないか、しかもビバッチ似の奴が。

「えっと、船のチケットを買いに行くから行くぞ？」

「そうか、残念」

サラ、何が残念なんだ…。

とまあ、俺たちは港の方を目指して歩いてた。

「そつえば、船に乗って何処に行くんだ？」

「えっと、隣の大陸に渡って、その大陸で一番でかい街に行こうと思ってる。俺も行ったことは無いんだけど、何でも一年中、木が紅葉してて綺麗な場所みたいだ」

へえ、そりゃ楽しみだな。

出来れば何の問題も無いときに行きたかったが。

そんな話をしてるうちに港にやって来た。

しかし、何だか人が集まってて慌ただしかった。

「何かあったのかな？」

「おいおい、また厄介事じゃあないだろうな」

サラは少し心配そうな表情をしている。
俺は嫌な予感がした。

「とりあえず、行ってみよう」

俺たちはその場所に急いだ。
一体どうしたのだろうか。

8・船を求めて

港に来た俺たちだったが、何だか様子がおかしかった。町での活気はこちらでは感じられなかった。そして、そこには人ばかり。俺たちは人だかりに近づき話を聞いてみた。

「あの、どうかしたんですか？」

サラが真っ先に一人のおじさんに聞いた。

「ん？ああ、何でか船が無くなっちまってね」

「船が無くなった?!」

船が無くなるとはどういうことだ？波にでも拐われたとかじゃないだろうな。

「聞く話によると、船員が皆町に出掛けてたときに女の子が乗ってたとか…」

「はあ？見張りはいなかったのかよ？」

「居たみたいだけど眠ってて、いや、正確には眠らされたのかもしれない」

何だよそれ、眠らされたのかもしれないって、……ん？かもしれない？

「かもしれないって、どういうことだ？」

「いや、その見張りのやつのもそこそこだけの記憶がなくなっ

記憶がないだと？」

記憶を消されたとでも言うのか？」

もしかして、サラの記憶喪失と何か関係が？」

さらに女の子だと？」

もしかしたらあの盗賊女かもしれないな。

何だかすんなり情報ゲットしちゃったな。

「早く追いかけてよう！」

「でも船が乗ってかれちゃって、今は他に無いみたいだよ」

「え…、マジかよ…」

グレンの言葉に俺は肩を落とした。

くそっ、せっかく情報をゲットしたというのに。

「何か、他に海をわたる方法は無いのか？」

「あるっちゃあるよ、少年」

すると俺にいきなり知らないじいさんが話しかけてきた。

「本当かじいさん！どんな方法なんだ！」

「それはのう、わしについてくれば教えてやるう」

そう言うおじいさんは歩き出した。

「行くぞ！二人とも」

「あ、ヤス待って！」

「どつするんだろっ？」

その時グレンは他の人々が不安そうな顔をしているのに気付いていた。

俺たちはおじいさんについていくと、港町の外れにある小屋に連れてこられた。

どうやらこのおじいさんの家らしい。

俺たちは小屋に入った。

「まあ座んなされ」

「は、はあ……」

俺たちは座った。

おじいさんはお茶を入れている。

おい、お茶なんて良いから早く教えてくれよ。

「あ、あの。海を渡る方法って何なんですか？」

「ん？ああ、それはのう、わしの船で渡るのじゃ」

「じいさん！船を持つてるのか?!」

「ああ、持っているとも」

じいさん、あんたって人は何て良い人なんだ。

「これで何とか海は渡れそうだね!……ってグレン？」

サラの言葉を聞きグレンを見ると、不安そうな顔をしていた。

「あの、貸してくれるんですか？」

グレンがじいさんにそう尋ねた。

「ああ、貸してやる」

「グレン、何て顔してんだよ。じいさんの好意ありがたく貰って
「うぜ」

「あ、ああそうだね」

グレンは笑ってそう言った。
しかし、すぐに表情が戻る。
グレン、どうしたんだ？

「じゃあじいさん、船は何処にあるんだ？」

「まあそう慌てない。こつちじゃ」

そう言うときいさんは小屋を出ていく。
俺たちも続いていった。

じいさんについて行くと小屋の裏には小さな船着き場があった。
しかし、俺は目を疑った。

「あ、あのう。あれは何ですか……」

「何って船に決まっておろう」

「どこをどう見れば船に見えるんですかっ!」

そう、俺たちの目の前にあったのはぼろぼろになった船、いや、水
に浮かぶ屍とでも言っところか。

「じいさん、一体どういことだよ」

「わしゃあ嘘はつかんぞ。その船を直したら使ってよいぞ」

「それって……」

そくだよな、上手い話なんかそうそう無いよな。
しかし、騙された感があるよな。
もしかして、さっきのグレンの表情、薄々感じてたって訳か。

俺はサラとグレンを見た。

サラはヤル気満々、グレンも笑っている。

「仕方ない。分かったよ、俺たちが直すよ」

「そうかそうか。じゃあ早速だが材料調達からよろしくな」

そして俺たちは船の修理を始めた。

9・造船計画

港町リマーニでは港町だけあって多くの品物が手に入る。
ここでしか買えないものも多々あるそうだ。

そんなリマーニで俺たちは今船を直すための材料を買いに来ている。

「釘、ベニヤ板、丸棒……結構あるな」

まあ船を修理するって言っても最初から造るみたいなものだから仕方ないか。

「まあ良いじゃないか、金はじいさんが出してくれたんだし」

「そうだよね、私たちも使おうとしてるのに全額払ってもらっちゃうなんて何か悪いなあって思っちゃうぐらいだよ」

サラはやさしいな。

まあそうなんだろうけど。

「とりあえず、さっさと買って早く戻ろうぜ」

買い物を終えた俺たちは大量の荷物を抱え、じいさんの小屋に戻ってきた。

ふう、結構重かったな。

持ってくるだけでも疲れたぜ。

サラも腕が疲れたみたいでぶらぶらさせている。

グレン………は、いつもと変わらない。

疲れてないのか？

「こづいづいのは慣れてるからね」

そうかい。

俺もいつも竹刀振ってたはずなのにな。

「おう、やっと戻ったか、遅いぞい」

すると小屋の中からじいさんが出てきた。

じいさんはニヤニヤしていた。

何笑ってるんだ？

「ほれほれ、買ってきたんならそんなとこ突っ立ってないで船の修理に取り掛かるのじゃ」

「あの、俺たちは素人だからはっきり言って修理の仕方が分からないんですが……」

グレンがそう言うと、じいさんはまた小屋の中に入った。

そして何やら紙を持ってきた。

「そうだと思ってるのう、ほれ、これを見てやるのじゃ」

そしてグレンはその紙を渡された。

グレンはその紙を見てびっくりしている。

「素人の俺にもちゃんと分かる風に書かれてる」

俺も覗いてみると、設計図とはかけ離れているが、読み手の脳内にスツと入ってくるような不思議な内容となっていた。びっくりだな。

こんな資料何故持つてるんだらう。

「よし！じゃあこの紙に書いてある通りにやろっか！」

サラは材料を持ち、船着き場に向かった。

「そんじゃあ、やりますか」

そして俺たちは修理作業に入った。

船の修理は順調に進み、日が暮れてきた辺りで大体半分は修理出来た。

「ふう、暗くなってきたな」

「よし、今日はそこまでじゃ」

すると小屋からじいさんが出てきて話しかけてきた。

「どうだ、じいさん。上手く出来てるだろ！」

俺は誇らしげに言ってみた。

しかし、ポカッと一回殴られた。

「調子に乗るでない。海に飲み込まれるぞい」

そう言つと、船を点検し始めた。

イテテ、にしても叩かなくても良いじゃないか。

「うむ、まあまあじゃの。じゃあ今日はもう戻りなさい。港町の宿屋にでも泊まってまた明日じゃ」

そう言つてじいさんはまた小屋に戻つてつた。

とまあ、俺も二人ももうくたくただ。

「じゃあ、宿屋に行きますか」

そして、俺たちは宿屋に向かった。

明日で修理を済ませて何としても隣の大陸に行かなければ。俺は宿屋に向かう間、頭の中でそう強く思っていた。

宿屋に着き夕飯を済ませて、その後部屋を借りた。

そして言つまでもない。

俺はベットに雪崩れるように倒れ、そのまま眠りについた。

そして次の日の朝。

俺たちは支度を済ませじいさんの小屋に向かった。

「じいさん？」

しかし小屋の中には誰もいなかった。

不思議に思いながら、俺たちは船着き場に向った。
するとどうだろう。

じいさんは立派な船の中でいびきをかいて寝ていた。

「って！船が出来上がってるじゃないかっ！」

俺たちは目を疑った。

マジかよ、じいさんもしかして一晩かけて造ってくれたのか。

「…ん？何だお前たちか…！」

じいさんは起き上がった。
そして背伸びをしていた。

「うむ、今日もいい天気じゃ！」

確かにいい天気…、じゃなくて。

「じいさん、あんた何者なんだ」

「何って造船技術者だが？」

俺の問いにそう答えた。

なるほど、あの紙といい、船を造る技術といい、そういつ訳か。
「ん？じゃあ何で俺たちに船を直させたんだよ。自分で出来るじゃないか」

「ん？だって材料調達がめんどくさかったしのう。あと暇だったから」

暇だったからって。
まあ良いか。

「これで海を渡れるね！」

「ああ、そうだな！」

俺とサラはハイタッチ。
グレンも嬉しそうだった。

「まあ、最後は我慢できなくて造ってしまったが、約束通り船を貸してやるう。ちゃんと準備してから出港するんじゃぞ」

「ああ、分かってる！ありがとな、じいさん。よし、港町に買い出しに行くぞ！」

「あ、待ってヤス。買い出しは君とサラに任せた。俺はじいさんに船の操縦の仕方を教わるよ。前から興味あったし」

そうか、操縦出来なかったら意味ないもんな。

俺は操縦の方はグレンに任せ、サラと買い出しに出掛けた。

今はもう盗賊女のことしか頭になかった。
情報を頼りに絶対見つけ出してやる。

10・いざ、隣大陸へ

海に出る時、必需品と言えばなんだろうか。

飲み水や食料品なんかはもちろんのこと、紫外線対策に帽子やサングラスなどもあったら良いだろうと思う。

しかし！

もっと大事なのは！

「ロマンだっ！いや、ロマンさえあれば他に何も要らないぞ！ハッハッハ！」

「……………」

そう、俺たちは海に出るため必要な物を買いにリマーニの市場に行るところだ。

「海、それは男のロマンで……………」

「あ、もういいです……………」

「ん？何だ、せつかく今から良いところだったのにな」

とまあ必需品は何かと市場のおっさんに聞いてたわけだが、どうやら聞く相手を間違えたみたいだな。

「まあ、長く乗ってる訳じゃないし、飲み水と食料ぐらいで良いかなあ、サラ……………って」

さつきまで一緒にいたはずのサラが少し離れた人だかりの所にいた。人だかりの向こうを見ると……。

「またか」

この顔を見るとまたあの事を思い出してしまうな。

そう、またビバッチ似の奴が前屈みで腿上げ。

これは何なんだ。

芸なのか？

しかも、見てる人はみんな腹抱えて笑ってるし。

ここの人たちにとってはこれがツボなのか？

「おゝい、サラ、行くぞ」

棒読みで呼ぶ俺。

サラが気がつき帰ってくる。

「ごめんごめん！」

全く、アレのどこが面白いんだか。

とりあえず、飲み水と軽い食料品を買った俺たちはじいさんの小屋へと戻った。

「おゝい、帰ったぞ」

「……………」

俺は小屋の前にいるグレンに言ったが反応がなかった。
グレンは俺の声が聞こえてないほどに何かの紙に見入っていた。

「グレン？なに見てるのかな？」

俺とサラはグレンの後ろから紙を覗く。

舵の取り方……、どうやら船の操縦法が書かれた紙みたいだ。
これもじいさんが書いたのか？

やっぱり分かりやすく書かれてるな。

そう思いながら眺めると、やっとグレンが気付いた。

「あ、二人ともお帰り」

「どうだ、船の操縦は出来そうか？」

「ああ、ゲンさんのお陰で何とかかなりそうだよ。」

ん？ゲンさん？誰だ？

するとグレンは察したのか慌てて言った。

「あ、ゲンさんってのはあのおじいさんの名前だよ」

なるほどね。

にしてもゲンか、よくある名前だな。

「今頭の中でわしの名前のことで変なこと想像してたじゃろ」

うわっと。

じいさんが小屋裏の船着き場から戻ってきた。

「まあよい。それと船はもういつでも出せるぞい」

よし、全て準備が整ったようだな。

しかし、俺はここに来て緊張していた。

感情が交差していたのだ。

簡単に言えば期待と不安で胸がいっぱいであった。

「どうしたのヤス？」

サラが俺の顔を覗く。

「船楽しみだね！」

そう言ってニツコリ笑うサラ。

俺はサラの笑顔を見て少し緊張がほどけた。

ありがとな、サラ。

「よし、それじゃあ行きますか！隣の大陸へ！」

「おー！」

「うん！」

そして、俺たちは船に乗った。

するとじいさんが見送りに来た。

「今までありがとな、じいさん。船借りてくぜ」

「ああ、返すのはいつでも良いからの」

「え、良いのか？」

「ああ良いとも。別にわしは使わないからの。じゃあ気を付けての」
そう言つて、じいさんは小屋に戻つてつた。
何だかんだ言つて良いじいさんだつたな。

そして俺たちは海に出た。

船初体験で表には出さないがやっぱりテンションが上がる俺。
海を眺めるサラ。操縦するグレン。
潮風を感じながら海を進み良い出だしだつた。

しかし

ガンッ！

船は何かにぶつかった。
というより何かがぶつかってきた。

まさかまた厄介事か？
旅に危険は付き物というが、少しはゆっくりさせてくれってんだよ。
俺は恐る恐る船の下を見ると海面から背ビレが見えた。

サメ型モンスターだつた。

「マジかよ」

その瞬間船がグラツと揺れた。

「くそっ！」

するとグレンは舵を一気に違う方向にきった。

「おい、グレン大丈夫か?!」

「このまま進むと船が壊される。仕方ないけどルート変更だ！」

隣の大陸の港町に行く予定を変えざる得ないか。

まあここで死ぬのは元も子もないからな。

そして俺たちは船の上で棒などで応戦しつつ一番近い停留場を目指した。

11・塞翁が馬？

優雅なクルージングを楽しむって訳でもないが、のどかな船旅をしたかったな。

などと、そんな悠長なこと思ってる場合ではなかった。

「しつこいなっ！」

俺は船にびったりついてくるサメ型の魔物と交戦中。

「ヤス！舵切るよ！」

うわっ！

グレンはそう言ってすぐに舵を切った。

あぶねえ、下手して海に落ちたら冗談じゃすまないな。

「あっ！ねえ、あそこ！」

サラが指を指していた。

指差す方を見ると砂浜が見えた。

つまり隣の大陸までついに来たのだった。

「よし！あの砂浜に船を停めるぞ！」

「分かった！こっちは任せろ！」

魔物が横から攻めてくる。

それを俺が棒で追い返す。

最初はどうかと思ったが案外相手に効くもんだな。砂浜まであともう少し、もうひと踏ん張りだ。

その時、魔物が離れていった。

何故だと思った瞬間だった。

「おつとお?!」

船が激しく揺れた。

しかも何か引きずるような音もした。

「どうやら浅瀬に入ったみたいだ」

浅瀬、だから魔物が追いかけてこなかったのか？

「って船大丈夫か？速度は落とさないのか？」

グレンにそう問いかける。

するとグレンは苦笑いしながらこう言った。

「ブレーキが効かない」

はは、なるほどね。

因みに砂浜までもうすぐのところだ。

となると……………。

「みんな!どっかに掴まれっ!」

俺たちは咄嗟に船に掴まる。

次の瞬間、船は勢いよく砂浜に乗り上げた。

そして船は先程と比べ物にならないほどひどく揺れた。数十メートル砂浜を進みようやく止まった。

んで俺はと言つと…。

「ヤス！だ、大丈夫？」

「あ、ああ。何とかな…」

船から放り投げ出されて砂浜に落ちていた。

はは、情けねえな。

「どこも怪我してない?!」

サラが慌て降りてきて俺の身体を心配そうに見る。

「ありがとな。本当に大丈夫だから」

俺は立ち上がって笑った。

サラは安心した顔をした。

そしてグレンも降りてきた。

「みんな無事みたいだね」

「ああ、でもここはどこだ？これからどうするっ…」

「あそこに洞窟があるよ？」

サラはそう言った。

辺りを見渡すと確かに洞窟があった。

洞窟か。

入っていけばどっかに出れるかもな。

「仕方ない。とりあえず入ってみますか」

そして、船を一旦砂浜に置いて洞窟の中を進むことにした。

洞窟に入った俺たちは何事もなく進んでいた。

「そっぴゃ。なあグレン、今向かってる街って何て言うんだ？」

「あれ？言ってなかったか。グラティアって街だよ」

グラティアか。

一年中紅葉してる街なんてあったんだな。

全然知らなかったぜ。

そんな事を考えながら進んでいると分かれ道に辿り着いた。

「どっちかな？」

さてどっちだろうか。

どっちか進んで行き止まりとかは嫌だぞ。

その時、片方の道の奥から魔物の喚き声が聞こえた。

騒がしいな、仲間割れでもしてんのか？
と思ったその瞬間。

「ん？今何か……」

魔物の喚き声と一緒に微かに人の声も聴こえたのだった。
何故こんなところに人が？
てかもし襲われてたとしたら大変だ。

「よし、声のする方に行ってみよう」

俺たちは走り出した。

魔物の喚き声も大きくなってきた。

一体何が起きてるのだろう。

その時、目の前にいきなり閃光が走った。

それと共に魔物の声が止んだ。

何がどうなっただやがる。

そして俺たちはその場へ辿り着いた。

そこには一人の女の子が立っていた。

横には魔物が倒れている。

それも結構大きいイノシシ型の魔物だった。

「誰だ?!」

その女の子はこちらを向いた。

「あ、いやその、人の声が聴こえたから来たんだけど……って」

俺は目を疑った。

そしてもう一度目を凝らして見た。

その女の子はどっかであった感じがしたからだ。

「お、お前は！」

「ん？何あんた？」

「何って……、お前、忘れたとは言わせないぜ」

サラとグレンは何がなんだか分からないという顔をしていた。

そりゃそうだ、だってこいつは。

「帝都で盗んだ俺の大切な物、返せこの盗賊女！！」

そう、帝都で俺の母さんの形見を盗んだ盗賊女だった。

ようやく見つけたぜ。

返してもらっただけでは収まりきれそうにないこの気持ちをどっつ落とし前つけてくれるんだ？

そして俺と盗賊女は睨みあっていた。

12・洞窟の主

時が止まったのかと思うくらい静かな時が流れている。
セミロングのブラウンの髪に緑眼の瞳。

やっと見つけた盗賊女と睨みあっているのだ。

そして盗賊女の表情が変わった。

何だか考えているようだ。

「おい」

「あ、ごめん。えっと、あんた誰？」

俺はこの言葉を聴きイラツとした。

「帝都でぶつかってきて、その時にネックレスを奪ってたのはお前
だろ！」

そう俺が言つとまた間が空く。

ネックレス、母さんの形見のことだ。

ネックレスと言つたが、それは指輪をチェーンに通した物であり、
まあ指輪が形見の本体である。

「ああ、そういうばそんなことがあつたような無かつたような」

盗賊女は覚えていないのかあやふやに答えた。

が、盗賊女の表情からして本当に記憶が曖昧みたいだつた。
尚更むかつくぜ。

「ごめんねえ？私そういうの覚えてらんないの。つか覚えてたら

きりないし……」

盗賊女のその言葉を聞いた瞬間だった。

「「ヤス！」」

はっ！

俺はサラとグレンに両腕を掴まれていた。

そして俺は右手に剣を持っていた。

無意識のうちに剣を抜いていたのだった。

「ご、ごめん。熱くなりすぎた」

「……………なるほど、そのくらい思い入れのある物だったことか」

「ああ、母さんの唯一の形見なんだ」

しかし、盗賊女の顔は険しかった。

「ねえ、何で私があんたから物を奪ったと思う？」

「え？」

俺はいきなり質問をされた。

俺を狙った理由だと？

「それは、あんたが帝都の人間だからよ」

「俺が帝都の人間だから？それは一体……」

「帝都の奴らは、私たちよそ者のことを陥れ、利用し、そして……」

そして？

盗賊女の口が止まった。

その時だった。

「ヤス！」

「え？」

サラが叫んだ。

俺は後ろを振り向くとサラとグレンの奥にはかでかい魔物がいた。そいつは龍みみたいな姿をしていた。

「まずい、ここの洞窟の主、ヒドラ！」

盗賊女の顔がひきつっていた。

主って、ヤバイんじゃないか？！

「逃げた方が良いよな」

「当たり前でしょ！よりもよって主と出会うなんて、もう最悪！」

俺たちは走り出した。

もちろんヒドラも雄叫びをあげて追ってくる。

はは、いきなりあげられるとびっくりするぜ。

逃げる俺たちだがヒドラもしつこく追っかけてくる。
しかも悪いことに距離が縮まってきた。

こりゃ結構ヤバイぞ。

そして走り続けると少し広い間に辿り着いた。

そこで俺は足を止めた。

「ヤス?! どうしたの?!」

サラが叫んだ。

「サラたちは逃げる! ここは俺に任せる!」

「何言ってるんのあんた! 相手は主よ? 死ぬわよ?!」

知ってるよそんなの、でも全滅するわけにはいかねえだろ。

俺は剣を抜いた、そして主に構える。

「かかってこい!」

ヒドラは俺の目の前で止まった。

改めて見ると結構気持ち悪いやつだな。

「俺が相手だ!」

そう言って俺は斬りかかった。

しかし、軽々触角みたいな物で受け止められた。

「うつ！？」

そしてもう片方の触角のような物ではたき飛ばされた。

「へへ、イテエ」

それでも俺は立ち上がり再び斬りかかった。

「ぐはっ！」

しかし次は地面に叩きつけられた。

くそっ、さすがにこれを何回も食らったら死ぬぜこりゃ。

その時だった。

「罪犯しき哀れな者、神々の怒りに触れるもの」

なんだ？

どこからか声が聞こえた。

それは詠唱のようだった。

「我が呼び声より目覚めし無慈悲な審判を下す奈落の王の処罰を受けよ！」

するとヒドラの下に魔方陣が描かれていて、毒ガスと思わせるような煙が噴き出し、頭上に集まっていた。

「パニツシユメントー！！！」

その瞬間、煙がヒドラを縄のように縛り上げ、地面から無数の黒い

剣がヒドラの身体を突き刺し、最後に頭上に溜まった煙から黒い稲妻が轟音と共に落ちた。

そしてヒドラはその場に倒れた。

俺はすぐさまその声が出た方を見た。
すると一人の男が立っていた。

13・形見の行方

肩に襟足の先が付くぐらい髪の毛の長さの二十代後半ぐらいに見える男が立っていた。

そう、ヒドヲを術で一発で仕留めた張本人だ。

その魔力は術を知らない俺でも分かるくらい凄まじい威力だった。

その男は俺のところまで歩いてきた。

「良い根性をしていますね。けれど、命を粗末にするのはいけませんよ」

そう言つて俺に微笑むと、洞窟の奥へと一人で行ってしまった。

誰だったんだろう。

でもとりあえず助かったぜ…。

「ヤス！」

お、おい?!

サラが俺に抱きついてきた。

「無茶しないでよ!物凄く心配したんだから…」

サラは涙目でそう言った。

「ごめんな、心配かけて」

「うん。あ、今治療術かけてあげるね」

温かい光に包まれる。

そしてヒドラにやられた傷は瞬く間にきれいさっぱり無くなった。やっぱりサラの治療術は凄いな。

「なかなかやるじゃない、見直したわ」

その時だった。

なんと盗賊女からそんな言葉が飛び出したのだ。

「なんからしくないな」

「私、少し勘違いしてたみたい。これで全てがそう思えるようになったとは到底言えないけど…、そうよね」

そう意味深に言った盗賊女は何か気がついたのか、顔を赤らめた。

「あ、いやその。何でも無いわ」

変な奴だな。

「分かったわ。ついてきなさい。あんたの物を返してあげるわ」

そして盗賊女は洞窟を進んでいった。

どういう心の変化か知らないが返してもらえるならそれで良いか。その時、グレンが話しかけてきた。

「俺は今では、いや前からヤスの事は信用出来るから」

「…グレン？」

「さあ、早く追わないとはぐれちゃうよ」

「あ、ああそうだった」

グレン？

更なる意味深な発言に疑問を持ちながら、俺たちは盗賊女を追いかけた。

俺たちは盗賊女に案内されやっとならぬ窟を出た。

「何とか窟を出られたなあ」

外に出るとそこは林道だった。

さてと、ここからどこに行くんだ？

「じつちよ」

見ると盗賊女は道ではなく林の中を進んでいった。
よく見ると獣道になっている。

「そういえば、何で窟なんかに住んだ？」

「ん？そんなことどうでも良いでしょ？気分よ気分」

ふん、気分ね。

てか一体何処に行くつもりなんだ。

「もう、いいから黙ってついてくる」

へいへい。

そのままついていくと一軒の小屋に辿り着いた。

「私の家よ。入って」

家ねえ。

盗賊が住みそうな場所だな。

小屋に入るとそこは何の変哲もない普通の空間だった。

まあ本が沢山あるぐらいかな。

「本がいっぱいあるんだね」

「ああ、ここは元々父さんの別荘だったから。ほら、ここ静かじゃん？だからよくここに来て本を読んだのよ」

サラの言葉に盗賊女はそう答えた。

「じゃあ前はどっかに住んでたってことか」

俺がポロッとそう呟くと盗賊女の表情が変わった。気に障ることだったかな？

「あれ？」

そしてまた盗賊女の表情が変わった。忙しい奴だな。

「無い」

「ん？何が？」

「あんたの大切な物」

俺は固まった。

無い？

そりゃどういいう冗談だ。

「お前！どついう事だよ！」

盗賊女は考えていた。

「どつかに落としたかな？それとも…」

「それとも何だよ」

「売っちゃったかも」

は？マジかよ？

いやマジで冗談じゃねえぞ。

「いや、ここに帰る途中で売ってほしいっていう人がいて、その時に何個かまとめて売った中に入ったたのかも」

「何で売るんだよ！」

「仕方ないでしょ！生きてくためにはお金は必要なの！それに結構高く買い取ってくれたし」

はは、不幸だ。
やっと盗賊女から取り替えせると思ったら今度は知らない人の手の中かよ。

「結構富裕層な奴だったわ。もしかするとグラティアの人間かも」

「何だつて？グラティアだと？」

俺の声にびっくりする盗賊女。

「丁度良い、すぐグラティアに向かおう！」

「待って、そいつの事は分かるの？」

うっ、そうだった。

そうか、じゃあ一体どうすれば…。

「仕方ない、私も行くわ」

「はあ?!何で盗賊女と一緒に」

「そいつの顔知ってるのは私しかいないでしょ?!わ、私だって本当だったらこんな事しないわよ!ただ…」

「ただ何だよ？」

「あんたの事をもうちょっと観察したいだけよ」

「観察?!なんだそれ気持ち悪い」

そう言つと赤くなる盗賊女。

「も、もうどうでも良いでしょ?!」

とまあこうして俺たち三人に盗賊女が加わり四人でグラティアに向かうことになった。

14・紅の都グラティア

林道を歩いていくと徐々に葉の色が紅葉に変わってきた。
グラティアに近づいている証拠かな？

とても優美な光景だ。

そう思いながら歩いていた俺は重要な事を思い出した。

「そっぴゃ盗賊女。リマーニで船奪ったのお前だろ」

「ん？ああそうよ？だから？」

だからって…、突っ込みたいことが山ほどあるがとりあえず置いて…。

「そんな時に見張りのおっさんを眠らしたのもお前か？」

「そうだけど、それがどうしたのよ」

「そのおっさん、その時の記憶が無くなっていたんだが、お前何を
した」

そう言うとサラが俺の方を向いた。

ハツとした表情をしていた。

「別に大したことはしてないわ。とある薬草と薬品を混ぜて作った
睡眠薬よ。刺激が強いから記憶が飛んだのかもね」

「ということは今までの記憶が全部消えるってことはあるのか?!」

俺は反射的に高々と声を上げて問った。
声が大きすぎたか。
皆びっくりしていた。

「今までの記憶つてのが曖昧でよく分からないけど、いくら刺激が強いからと言っても消えてせいぜい一日分つてとこじゃないかな」
そうか。

じゃあ、サラの記憶喪失とはたいして関係無いかもな。

「それに！」

次は盗賊女が声を高々と上げた。

「私は盗賊女じゃない！カエデって名前がちゃんとあるんだからいきなりの自己紹介だな。
カエデね。」

「分かったよ、盗賊女」

「全然分かってないっ！」

俺とカエデは睨み合う。

「二人とも落ち着いて！」

サラが俺とカエデの中に入った。
そして、カエデに体を向けた。

「私はサラ、よろしくね！」

サラはカエデに手を出した。

「よ、よろしく」

二人は握手を交わした。

そしてグレンも近寄ってきた。

「俺はグレン、よろしく」

グレンとも握手を交わした。

そしてサラが俺の元にやってきた。
なんだ？

「そして、彼がヤスです！」

「お、おい！」

自己紹介ぐらい一人で出来るって。

そんなこんなで自己紹介を済ませた俺たちは再びグラティアへと向かった。

午前にリマーニから出港し、いろいろあって夕方。
やっとグラティアに俺たちは着いた。

「うわぁ〜」

サラが目を輝かせていた。
いや、皆と言った方が良さだろうか。
暗くなっていたお陰で、街は電灯でライトアップ。
そこに街全体の紅葉した木が光に照らされていて、風流な光景がそこにあった。

「これは想像してた以上だな」

「ああそうだね」

グレンと一緒に感動していた俺だがカエデの表情が少し暗くなっていたのに気がついた。

「盗賊女、どうした？」

「別に、どうもしないわよ」

あれ？

盗賊女って言っても怒んないな。

何かあったのか？

……仕方ない。

「よし、とりあえず今日は宿屋に行きますか」

「あれ？あんた、お母さんの形見は良いの？」

「もう暗くなってきたし、何より朝からいろいろあって疲れたからな。それに腹減ったし」

「何それ、まあ良いわ」

やれやれ、俺もらしくないな。

そして俺たちは宿屋に向かった。

夕飯を済ませ、俺たちは明日のために眠りにつく。

その夜中である。

皆と同室で寝ていた俺はドアの開け閉めの音で目が覚めた。
見渡してみると、サラ、グレンはいて……。

カエデの姿が無いのに気がついた。

俺はベットから体を起こした。

そして、俺も部屋から出た。

宿屋の外に行くときカエデが宿屋の前の広場で空を見上げ立っていた。

何故か寂しげな様子だった。

「こんな時間に何してるんだ？」

「誰?!……って、あんたか」

カエデに声をかけた俺は宿屋の壁に寄りかかった。

「ただ昔の事を思い出してただけよ」

「昔の事を？」

「……私、昔はグラティアに住んでいたの。父と一緒にね」

カエデが寂しげな口調でしゃべった。

しかし、昔はこんな綺麗な場所、グラティアに住んでいたのか。

しかし、何で今はあんな小屋に住んでんだ？
俺は質問してみることにした。

「なあ、何で今はあんなところに父さんと住んでんだ？」

そう言うとカエデとの間に少し間が空いた。

そして、背を向けて立っていたカエデは俺の方に体を向けた。

「父はもう死んだわ」

その瞬間、風により紅葉した葉が宙に舞った。

15・カエデの過去

真夜中のグラティアの広場。

月の光がグラティアの街全体を照らし、また俺とカエデをも照らす。風により宙に舞った紅葉した葉が落ちてくる。

その葉が地面に着いたとき、カエデは語りだした。

「七年前ぐらいかな、私がまだ八歳の頃父とここで暮らしていたの。でもある日ここグラティアに帝都グロリアの人間がやってきた。グラティアのトップにグロリアの人間が座ろうとしたの」

七年前。

俺はまだ十歳の時だな。

「そいつはグロリアとグラティアで力を合わせてこの世界をもっと豊かな世界にしようとか言って当時の支持は高かったわ。そしてその時、私の父はそいつを支持し、配下についたの」

グロリアとグラティアの協力なんて初耳だな。

「最初は新しい試みで、実現するまで楽しみだった。しかしある時、そいつは裏で実はグラティアを乗っ取るうと計画してたことを父が知ってしまったの。それを父が皆に危険だと知らせようと考えた。でも……」

二人の間にまた間が空く。
カエデが黙ってしまった。

「でも……何だよ」

「その事がグロリア側にバレて、証拠隠滅のために父は殺された…」

「何だつて?!」

まさか、父の死にそんな理由があったとは…。
そしてグロリアの隠された裏事情。
てかグロリアは一体どうなってるんだ。

実際俺はまだ信じられなかった。
自分の住む街がこんな事を企んでいたなんて。

「私は毎日泣いていたわ。けど、泣いてばかりじゃ何も変わらない。死んだ父に怒られちゃうと思って私が父のやるうとしてたことをしたの」

「グラティアの危機を街のみんなに知らせることが」

カエデは無言で頷く。

「でも私がまだ子供だったせいかな、誰も信じてくれる人はいなかった。だけどもめげずに私は頑張った。でもこの事をグロリア側に伝える奴が出てきて私は捕まる前にグラティアを出たの」

「そして、あの小屋か」

「そう。わざわざ人に気づかれないように父が造ってくれていたのが幸いだっただわ。そして何とか今日まで生きていくことが出来た。故郷を代償にしてね」

なるほどな。
だから帝都の人間が嫌いなんだな。
気持ち分からはくない。

「はあ。今さら何言ってるんだろう私。しかも、こんなバカに」

「ちょっと、バカって何だよバカって！」

「つたく、何なんだこの女は。」

「はあ、じゃあ俺は先に戻ってるから」

俺は宿屋の中に戻った。

そしてドアにもたれ掛かった。

「ここもか。何なんだよ、本当に」

俺は深い溜め息をつき、部屋に戻った。

朝になり、俺たちは食事などを済ませ、早速形見探しをすることに
した。

「さてと、何処から探そうか」

俺は辺りを見回した。

朝のグラティアには騎士の姿を少し見ることが出来た。

カエデの話によると、グラティアの人間はグロリアの人間が入って

きたせいでいろいろグロリアの都合の良い風に変えられ、住みづらくなつたみたいだ。

それと、グラティアの中を歩いていても大丈夫なのかとカエデに聞いてみたところもう結構昔のことだし、当時の奴らはほとんど残ってないから大丈夫だろうと言っていた。

「しかし、本当にグロリアがやってんだな……」

「ん？どうしたのヤス？」

「あ、何でもないよサラ」

俺はなんとなく誤魔化した。

何かあつたらカエデが説明するだろうと思つたしな。

「とりあえず、買い取つていった人は結構な富裕層な人なんでしょう？ だったら、この街で金持ちの人を当たつていけば良いんじゃない？」

まあグレンの言う通りだよな。

「それじゃあ、聞き込みと開始と行きますか。みんな、すまないな。手伝つてくれてありがとう」

「良いって！これがヤスの旅の目的だもんね」

「……今はこれだけじゃないけど……」

「ヤス？」

サラが不安そうな表情で見えてきた。
俺そんなに酷い顔してるか？
今にも死にそうみたいだ。

「あ、サラちょっと良い？」

「ん？何？」

「今までに何か思い出したことがあるか？些細なこととかでもさ」

「ううん。まだ何も…」

「そうか。早く戻れるように俺も頑張るから」

ありがとう、とサラは微笑んで俺に返した。

そして、俺たちは聞き込みを始めた。

16・御屋敷へ

暑くもなく寒くもない。

とても過ごしやすい気候のグラティア。

街が穏やかなせいか街の人たちも皆人当たりが良く、俺たちの話に答えてくれた。

あと、街を回ってみたけど、グレンの村みたいに強制労働とかは無
いみたいだな。

こつちの大陸の拠点とかだった？

とまあ、皆で手分けして聞き込みをした結果、情報が手に入った。

「え、ヤスもその人?!」

「なんだ、みんなも同じ野郎か」

集めてきた情報は、皆同じだった。

なんでもグラティア一番の金持ちは『ダバス』という奴でグロリア
出身らしい。

グロリア出身、ね。

俺たちは早速ダバスの家、いや『屋敷』に向かった。

これまた立派な御屋敷だそうですね。すぐに分かるそうだ。

「買い取ってつた人だと良いね」

「ああ、そうだな」

そうグレンの言葉に答え、歩いていた俺はとある建物に目が止まった。

「こ、これは！」

懐かしく感じた。

そこには俺が毎日通っていた同じ道場があった。

「俺が通ってる道場だ！ここにもあるんだな」

「ああ、やっぱり」

グレンが納得した顔をしていた。

え？何だよ一体。

「ヤスの剣術を見ていて大体予想はついてたけどね」

だから何なんだよ。

俺の剣術が何だった？

「ヤスは神彩流という剣術を習ってるでしょ？」

「シンサイリユウ？……ああ、そついやそんな名前だったか」

俺はそんな名前だったという微かな記憶を頭の隅から引っ張り出した。

「名前ぐらいちゃんと覚えとこうよ……。神彩流はこの道場で教える流派なんだよ」

そうなのか。

いや、実はなんとか流とかそういうの気にしてやってなかったんだよな。

こたわりとか特に無かったしな。

「型がぐちゃぐちゃだったから分かりづらかったよ」

「ああ、それは俺が勝手に変えてるからだな」

そう、いわゆる我流ってやつだな。

だから、型をやる時には我流の癖が出ちゃって先生に結構叱られてたな。

「なるほどね。面倒事が片付いたらここに来てみようかな」

「良いんじゃない？確かここにはまだ若いけど強い女性の先生もいるみたいだし。何でも神彩流の後継者でもあるらしいよ」

知識が豊富だな。

一体グレンはそんな情報どっから入手してくるんだ？

そんなこんなで道場を後にし一軒の御屋敷が見えてきた。

「で、でっけえ……」

今までに見たことのない大きさの御屋敷だった。

グロリアでもこんなでっかい御屋敷は無かったぞ。

まあグロリアは土地面積がグラティアに比べて狭いつてのはあるん

だろっけど。
どっだけ金持ちなんだ。

「あ、噴水まであるよ!」

「てか、都の中にまた都がある風に見えるよ」

「いけ好かないわ」

サラ、グレン、カエデがそう言った。
皆考えることがバラバラだな。

「じゃあお邪魔させていただくか」

俺が門に手をかけた瞬間だった。

『おい、何やってるお前』

何処からか声がした。

「何だ?!」

『何だじゃないだろ。予約はされているのか?』

辺りを見回すと門の近くにスピーカーと監視カメラがあった。
なるほど警備員か。

「いや、していないが」

『じゃあ、ダバス様に会わせるわけにはいかない』

そう言って通信が切れた。

ダバスって奴の御屋敷で間違いはなかったみたいだが。

「どうしよう。このままじゃ会えないぞ」

俺が何か良い案を考えようとした時、カエデが門を登りだした。

「おい、何やってんだよ！」

『こら！その小娘！捕まえるぞ！』

「お、出た出た」

何するかと思ったら、どうやら警備員を誘き出す為の行為だったみたいだ。

カエデは門から降りて警備員と会話をし始めた。

「あんた、どうしたら会わせてくれるのかしら？」

『はぁ？何だ一体』

「だから、どうしたらダバスに会わせてくれるのかしらって言うのよ」

『お、お前！今ダバス様を呼び捨……！』

その瞬間、警備員の言葉がいきなり切れた。

どうしたんだと思った瞬間、違う男の声がスピーカーから聴こえた。

『騒がしいと思ったら、何だ、お前か』

「お、その声。私からお宝買い取ってくれた人ね」

どうやらダバス本人が声だけのご登場のようだった。
はてさて、カエデはどうするのだろうか。

17・ゲーム

何だろう。

とても面倒な事が起こりそうな予感がするのは俺だけだろうか。

ダバスの御屋敷の門の前にいる俺たち。

カエデの強引な行動によりダバスを呼び出すことに成功し、今まさに交渉に入るという訳だ。

「ねえ。前にあんたが買ってしまった中に指輪が通されているネックレスが混じってなかった？」

『ネックレス？はて、そんなもんあったかな？しかし、何故だ？』

「別に、大した理由は無いかど返してほしいのよ。その分の金は返すからさ」

カエデの奴、大した理由は無いつて…。

まあこの際どうでも良いか。

とりあえず、どんな理由であれ俺のもとに帰ってくればそれで良いんだからな。

『待つてる、探してきてやろう』

そう言って一旦通信が途絶えた。

「あると良いね」

「そう願うばかりだ」

サラの言葉に答える俺。

今は望みに掛けるしかないな。

少しの間が空き、ダバスが帰ってきた。

『指輪が通されたネックレスだよな。あつたぞ』

おおー！！

やっと見つけたぞ、母さんの形見！

俺は嬉しさのあまりガッツポーズが出してしまった。

はあ、ここまで長かったぜ。

「じゃあ、どれくらいの金で……」

『金は要らん』

はい？

金は要らないだと？！

まさか、タダで返してくれるのか？

俺たちは驚いていた。

何だ、さすが金持ちは違うな〜！

御屋敷の土地面積と同じくらいの心の広……、

『ちょうど暇だったんだのだ！ワシのゲームをクリア出来たら返してやるわけではないか』

前言撤回。

何だ、結局面倒事になってしまうのか。

最近多いなと思いつながら、俺はため息が漏れる。

「あのお、俺たちそんな暇は無いんですけど……」

『ワシは暇なのである』

…ダメだ、話にならない。
まったく、めんどくさいぜ。

でも母さんの形見をここで諦めるわけにはいかない。

「ゲームって何をすれば良いんだよ？」

『おお！その様子だとやるんじゃないな。内容は……、グラティア裏の滝の近くの森にいるオオトカゲの鱗を取ってくるのじゃ』

「オオトカゲ？」

どうやら魔物のようだ。

要するにオオトカゲを倒せば良いんだな。

「分かった、取ってこよう」

『あ、因みに制限時間は夕方五時までだからの。過ぎたらダメだからな』

夕方五時か…。

只今の時間は昼前。
まあ余裕だな。

「分かった」

『よし、じゃあ楽しみに待っとるからの。まあ死なないように頑張りなさい、ククク』

そう言っつて通信が切れた。

今、最後に死なないようにとか言っつてなかったか？

何？そんな危ないのか？

まさかな…。

「まったく。御屋敷忍び込んで取っつた方が早くない？」

おいおいカエデ、泥棒になるのは勘弁だぜ？

どうせ、後々面倒な事になるんだからな。

「オオトカゲかぁ。どうなんだろううな」

「確か、全長三メートルぐらいのトカゲだつて聞いたことあるよう
な」

「はあ?!全長三メートル?!」

何だそのチート。

トカゲでそれつて大きすぎだろ。

「大丈夫だよ!何とかなるつて!」

何処にそんな根拠があるんだよ、サラ。

そんな巨大なトカゲなんて倒したこと、いや見たことすら無いのに。

「まあ、仕方ない。ごめん勝手に決めちゃつて。みんな、俺に協力
してくれ」

三人ともが頷いてくれた。

よし、ちゃちゃっと終わらせて、母さんの形見を返してもらおうぜ。

そして、俺たちはよろず屋で準備をしてグラティアを出発した。
ダバスの言う通りにグラティアの裏の森を進んでいくと徐々に水が
地面に打ち付けられる音が聴こえてきた。

「そろそろ滝に着きそうだな」

んで、その滝の近くの森に例のオオトカゲが居る訳か。

「相手はただ大きなトカゲでしょ？楽勝よ」

自信満々にカエデが言う。

「仮にも魔物なんだから気は抜くなよな」

「言われなくても分かっているわよそんなの。承知の上よ」

はいはい。

とまあ、もうすぐだな。

水しぶきの音が凄く聴こえるぜ。

「お、見えてきたね」

何て言ったんだグレン。

滝の音が大きすぎてよく聴こえない。

そして俺たちはそのまま進んでいくと一旦森を抜け、目の前にとつ
とう現れた。

「おお！これはまた風流な光景だな」

俺たちの目の前に大きな滝のご登場だ。
物凄い高さから水が落ちてくる。
こりゃ凄いや。

「ん、アレは……！？」

その時、俺の目にとある光景が飛び込んできた。

18・神彩流後継者

俺の目がおかしいのか？

俺は幻覚を見ているかのように思った。

グラティアの裏にある滝に來た俺たちだが、どういうことだろう。滝壺の所に一人の人間が立っているのが見えた。

「お、おい！あそこに人が！？」

「ん？ああ、あれは滝行だね。ヤス、知らないの？滝行は滝に打たれることにより精神統一をする有名な修行の一つだよ」

説明するグレン。

いや、知ってるけどな。

しかし、何でこんなところで一人で。

何かあったら大変じゃないか。

「しかも、女性だし」

「本当だ。こんな時に魔物に襲われたら大変だね」

そう、サラの言う通りだな。

大丈夫なのか？

「ねえねえ、ほら見てアレ」

その時、カエデが何だか楽しそうに俺の服を引っ張りながら語りかけてきた。

いきなり何だよ。

俺は力エデの目線の先を見てみた。

「っな!？」

そこには狼の魔物の姿があった。

何なんだよ、現実になっちまったじゃないか!

その狼は口からよだれがだらだら垂れていた。
腹でも透かしてんじゃないだろうな。

てか、あれは獲物を狙う眼だな、間違いない。

ああもう!そんなことより!

「おいつ!危ないぞ!」

俺は叫んだが女性は気づいてくれなかった。

くそ、滝の音がうるさいからなのか、それとも精神集中し過ぎてて
聞こえないのか。

狼も我を忘れて女性に目が一直線だ。

そして最悪の事態が起きてしまった。

狼が女性目掛けて襲いかかったのだ。

「まずい!どうにかならないのか?!」

しかし、時もう遅し。

女性はもうダメだと思った。

しかし、その時だった。

襲いかかっていた狼の体が何らかの抗力が加わったのか物凄い勢いで森の方に吹っ飛んでいった。

「何だ?!何が起こったんだ?!」

そして、俺は気づいた。

滝に打たれていた女性がこつちを見ていた。

そして、その女性は滝壺から陸に上がってきた。

すかさず俺たちは女性の元に近づいた。

大体二十代半ばだろうか。

長い髪を髪留めで頭の後ろでまとめた、着物が似合いそうな綺麗な女性であった。

「あの、大丈夫ですか?」

「大丈夫よ。心配してくれてありがとう」

笑って答える女性。

何処にも怪我は無さそうだな。

「でもちよつと寒いわね。近くに小屋があるの。寄ってかない?」

「え?あ、ちよつと!」

女性は森の中に入ってた。

俺たちは突然の事で少し戸惑ったがついていくことにした。

ついていくとすぐ小屋に着き、中に入らせてもらった。

「ちよつと待っててね、着替えちやうから」

「は、はい」

女性は奥の部屋へ入っていった。
何かノリでついてきちゃったけど良かったのか？

「いやあゝ、間近で見るとやっぱ凄いわ」

「ん？あの人誰だか知ってるのか？」

さっきからニコニコしてるカエデに聞いてみた。

「誰って、彼女は神彩流後継者のセツナさんじゃん！この地域じゃ有名人よ」

「え！？あの人が後継者の！？」

俺もそうだがグレンもまた同じくらい驚いていた。
てか、こんなところで会えるなんてな。

「おまけに魔法まで扱うことが出来る人よ。いわゆる魔法剣士ね」

魔法剣士かあ、かつこいいな。

ん？じゃあさっきの狼が吹っ飛んでいったのはセツナさんの魔法だったのかな？

だとしたら凄いな。

滝に打たれている中で魔物に気づいて攻撃だなんて、よっぽどじゃないと出来ない技だぞ。

「おまたせ」

すると、セツナさんが着替え終わって戻ってきた。
確かに、言われてみれば雰囲気は凄い。

とにかく凄い。

「一人で修行ですか？」

「そうよ。ここは集中して修行出来る良い場所なの」

集中。さすがセツナさん。

「あなたたちはこんな所に何しに来たのかしら？」

「俺たちはオオトカゲの鱗を取りに来たんです」

「オオトカゲ？」

「え？ご存じないですか？」

「…あ、アレのことかな？でも危ないわよ？」

アレ？オオトカゲじゃないのか？

俺は何か引っ掛かっていた。

「どうしても必要なんです」

俺がそういうとセツナさんは何か感じたのか真面目な表情になった。

「じゃあ、私も手伝って良いかしら？」

「ええええ！？」

セツナさんから思いもよらぬ言葉が返ってきた。

19・異様な状況

「あなたが一緒に!？」

「ちょうど体を動かしたかったし。良いかな？」

神彩流後継者で魔法剣士であるセツナさん。

そんな凄い人が俺たちを手伝ってくれるというのだ。

「俺は大歓迎です！」

皆も賛成のようだ。

「あら、大歓迎だなんて。じゃあついていくわね。私のことは知ってるみたいだけど一応自己紹介を。私はセツナ、よろしく」

セツナさんはそう言った後、カエデ見てニコツと笑った。さっきの話聞こえてたのかな？

「よろしくお願いいたします、セツナさん！」

「セツナで良いわ。さん付けは慣れないの。それと敬語じゃなくて良いわ」

え、それはちよつと抵抗感が……。

「稽古の時以外は堅苦しいのは流石に疲れるのよね」

不思議な人だな。

てか呼び捨てか…。
まあすぐ慣れるだろう。

「分かった、じゃあよろしく！」

こうしてセツナが仲間に加わり、俺たちは再度オオトカゲの鱗を取りため出發した。

とりあえず滝に戻ってきた俺たちだが俺は考えていた。

「滝の近くの森って言ってもここら辺全体が森だよな。どう探せば良いんだ？」

「とりあえず、森をくまなく探索するしかないんじゃないかな？」

確かにサラの言う通り、詳しい情報が無いからそうなっちゃうよな。

「仕方ない、とりあえず回ってみるか」

只今の時間午後一時。

「はあっ！たあっ！てえりゃっ！」

俺は狼型の魔物を尻ぎ払い、そして斬り裂く。

「お、光閃牙。なるほど、ヤスも神彩流剣士か」

そう言いながら魔物と交戦するセツナ。
光閃牙は神彩流で習う一つの技である。

「しかし見るところ我流かな？神彩流の型ではないね」

セツナの鋭い刀が魔物を一刀両断する。

「おう、セツナの言う通り我流だ」

セツナに負けじと俺も他の魔物に素早く斬りかかる。

「そんなことよりさあ」

「何だよ、っと」

カエデが話しかけてきた。

「何なのよ、この状況！」

「何って、魔物の大群に襲われてんだろ」

説明が遅れたが、そう、俺たちは今魔物の大群の真ん中にあるのだ。
何故だか知らないけどな。

「とりあえず、倒さないかね」

「回復や補助は私に任せて！」

グレンもサラも気合い十分だ。

「まったくもう、さっさと片付けるわよ！」

「分かってるって。早くオオトカゲも見つけないといけないしな」

カエデも俺も気合いを入れ直した。

「はっ！」

セツナは華麗な動きで魔物を一気に倒している。こりゃ、セツナがついてきてくれて良かったな。でも、俺も負けちゃあいられないぜ。

「待ってるよ、オオトカゲ！」

只今の時間午後二時。

「おいおいこりゃ、きりがないぞ」あれから結構戦っているが少しずつしか数が減らない。

どうなってんだ？

流石に異常だろこれ。

「この魔物がこんなに団結して襲ってくるなんて今までなかったのに」

冷静に状況を判断するセツナ。

この状況は運が悪いからなのか、それとも何か原因があるのか。

「とりあえず、このままじゃ俺たちの方が先にやられてしまつぜ。
どうにかなんないのか」

魔物を尻ぎ払いながら言う俺。
しかしその時だった。

「ぐあつ！」

俺は狼に腕を噛まれた。

「ヤス！？」

「つく、くつそお！」

俺は痛みを堪えながら腕を噛んでいる狼を剣で刺し離し、地面に叩きつけた。

「ヤス！大丈夫？！」

サラが俺の所に近づいてきた。
くそ、ヤバイなこりゃ。

「…仕方ない」

その時、セツナがそう言った。
そしてその瞬間だった。

セツナは前に走り出し、魔物を踏み台にして高くジャンプした。

「くらえ！」

空中で一回転したセツナはそのまま落下し、剣を地面に突き刺した。すると地面から桃色の風が鋭く周囲に吹き荒れ、周りにいた魔物を切り刻んだ。

しかし、それは神彩流の型から離れた技であった。

只今の時間午後二時半……。

20・桜花の如く

「今のは一体……」

いきなりのセツナの大技。

俺たちの前にはセツナのその技により道が出来ていた。

「今のうちに！こっちへ！」

「お、おう！みんな！セツナに続くぞ！」

俺たちはセツナのお陰で魔物の大群から脱出し逃れることが出来た。そして近くにあつた洞穴に身を隠した。それにしても、本当危なかったぜ。

「ヤス、今治療術で治してあげるからね」

「おう、頼むよサラ」

サラに治療術をかけてもらう俺。

今日もサラの治療術は絶好調で、狼にやられた傷がみるみるうちに治っていく。

「ふう。にしてもセツナ。さっきの技って……」

俺はさっきの技をセツナに聞いてみた。

「ん？ああ、あれは私が編み出した技よ」

「でも、神彩流の技ではないよね。型が全然違っただし」
グレンがそう言った。
それは俺も思ったことだった。

「だって神彩流ではないもの。あの型は桜華流っていつて私独自の考えた流派よ。まあ言ってしまうえば我流なんだけどね」

桜華流。

それは神彩流とは違い、まるで桜花が舞っているかのようだった。

「魔法と剣術を合わせて使う桜華流。でも、実はまだ未完成なの」

「え？あれでまだ未完成なのか?!」

「ええ。まだまだ改良や加える点が沢山あると思うの」

しかし、あたらしい流派かあ。

神彩流後継者でもあり、やっぱり凄い人だと改めてそう思った。

「はい、治療完了!」

「ありがとう、サラ」

よし!腕の調子もバッチリだ。

「治療終わった?じゃあ早くオトカゲ探しに行こうよ。でないと時間になっちゃうわよ?」

「そうだったな」

俺は腕を組んで言うカエデにそう答えた。

「ん？時間って？」

するとセツナが話しかけてきた。

「ああえっと、午後五時までにオオトカゲの鱗を取ってグラティアに帰らなくちゃいけないんだ、どうしても」

俺は簡単にそう説明した。

「午後五時までかぁ。じゃあちよつと急いだ方が良いわね」

魔物の大群に襲われて時間食ってしまったからな。
全く、良い迷惑だ。

するとその時、セツナが何か気付いたかのような顔をした。

「ん？どうしたんだ、セツナ」

「私、オオトカゲの居場所に心当たりがあるの」

「何だって?!」

「でも危険よ？大丈夫？」

真面目な顔で言うセツナ。

また危険か。

でもそれを承知で来てるんだから答えは一つだ。

「大丈夫だ、案内よろしくなセツナ」

セツナは頷いた。

さてと、これでなんとかかなりそうだな。

「じゃあこつちよ、ついてきて」

俺たちはセツナに託しついていった。

現在の時刻午後三時。

そろそろ焦ってきたぜ。

セツナに案内されてもう三十分経つだろうか。

「まだかセツナ？」

「もうすぐよ」

しかし何故だろ。

俺たちは森ではなく近くにあった洞窟を進んでいた。

しかも結構整備されているような感じがする坑道であった。

「ここで何か発掘でもしてたのかな？」

「ああ、そうみたいだよ。でもずいぶん昔中止したんだ」

何でだろう。

もしかしてまた魔物が暴れて大変だったとかだったりしてな。

「それは進めば分かるさ」

進めば分かる？

途中に魔物と戦った激しい痕跡のあとでも残ってるのか？

俺たちは歩いていくと、洞窟の出口が見えた。

そして外へ出ると、そこは草木で囲まれ天井はすっぽり穴が開いている幻想的な広い空間がそこにあった。

「うわあゝ 凄い綺麗だね！」

「そうだな…。自然の力って本当に凄いな…」

俺とサラで見とれていた。

するといきなりグレンが話しかけてきた。

「しっ！何か近づいてくるよ」

「何だつて？」

俺たちは周りに気を集中させた。

すると確かに、微かに地響きがするのを感じとることができた。

しかも徐々に大きくなってきているのが分かった。

「まさか、オオトカゲか？」

「私の記憶が正しければ、ヤス達が求めている物はここにあるわ」

ということはおオトカゲだな。

時間もあと約一時間半ぐらいってか。

帰るのに二十分はかかるだろうけど大丈夫だろう。

「さあ、出てこいオトカゲ！」

俺たちは戦闘の準備をして、いつ襲われても良いように待ち構えていた。

そしてとうとう現れた。

21・似てるか？

「あのさあ……。俺たちはオオトカゲを倒しに来たんだよな？」

「そつだよ？」

セツナに案内され、森の中の大広間に連れてこられた俺たちは、とうとうオオトカゲとご対面！……の筈だったんだが。

俺はサラに疑問を問いかけていた。

何故かって？

「オオトカゲって…三メートルじゃ…なかったっけ？」

「噂ではね」

「こいつは三メートルか？」

「いや、十メートルは越えてるね」

笑って答えるグレン。

おいおい、よく笑ってられるな。

三メートルでもでかいのに、十数メートルの魔物が俺たちの前に居るんだぞ？

俺は足が震えそうだぜ…。

そして、俺はまた疑問を問いかけた。

「あとな…、オオトカゲって…炎を吐くのか？」

「吐くわけっ…ある…の…かな？」

カエデに質問した側で空に向かって炎を吐ている魔物。
ははは、炎を見ているからかな？
額から汗が滝のように流れてきたぜ。

「最後に良いか？オオトカゲって角が生えてて、鋭く大きい爪があつて、翼が生えてるのか?!」

「絶対無いと思うわ」

冷静に答えるセツナ。

つてセツナ、あんたがここにオオトカゲがいるからって案内したんだろ?!

何言つてんだよ?!

なあ、この魔物は一体何なんだ!

あ。あれか。

この魔物じゃなくてまだ奥に進んだところにオオトカゲが……。

「そもそも、この森にオオトカゲという魔物は見たことない。というか居ないわ」

「……………は?」

「だから、オオトカゲに似た魔物と言えはこいつしかいないかなっと思つて連れてきたんだけど…。ほら、鱗もあるし」

鱗、ね。

だけど、この魔物どこからどう見ても……。

「ドラゴン…だよな」

『ゲウオオオ!』

って、言っている側で今度は雄叫びを上げるドラゴン。
俺のセリフに被らせるとは何と言うやつだ。

「何ぶつぶつ言ってるのよ」

「いや何でもない」

さてと、ぶつぶつ言っているとカエデがうるさいからこれぐらいにしてっ
と。

はてさて、どうしよう。ダバスは『オオトカゲの鱗』を取ってこい
って言ってたけど、実際にはオオトカゲは居なく代わりにドラゴン
と来たもんだ。

ここは一旦戻った方が良いのか…。
でも、何も取らずに戻っても形見は返してくれないし、下手したら
もう形見を返してくれないかもしれない。

……………、オオトカゲではなくドラゴンの鱗かあ……………よし。

「あの魔物の、…ドラゴンの鱗を取ろう」

その言葉を言った瞬間、皆驚いていた。

しかし、それは一瞬のことだった。

「まあそうだと思ったわ。全く、面倒なんだから」

「何だかわくわくしてきたよ」

「一度手合わせしてみたかったのよね」

「頑張ろうね！ヤス！」

カエデ、グレン、セツナ、サラの順に俺に向かってそう言った。
みんな…、ありがとう！

「よし！じゃあグレンはドラゴンの後ろへ。カエデは右、セツナは左。サラは回復と補助で皆の援護。俺は正面から行く！」

俺の作戦に皆は頷いた。

さあ、相手はドラゴンだ、気を引き締めないとな。

「相手はドラゴンだ。鱗を取ったら無駄な戦いは避け、すぐに逃げるぞ！」

「それと、鱗を取ると考えずに倒す勢いでいかないとやられるわよ！
！なんとってドラゴンだしね」

セツナの言う通りだ。

よし！出だしから全力全開だ！

「みんな！行くぞ！」

「「「「「おー！」「」「」」」」

そして、俺たちは一斉に自分たちの持ち場へダッシュした。

タイムリミットまであと一時間二十分……。

22・力合わせて

大広間の真ん中にどっしりと構えるドラゴン。その正面に俺が剣を構えて立っている。

「よし、行くぞ！」

そして俺はドラゴンに向かって走った。

ドラゴンに何の動きも見られなかったからの判断だ。

だが、俺が動きを見せると、ドラゴンは炎を吐くつもりなのか、溜めの体勢に入った。

しかし、俺は冷静だった。

大体こうなると予想は出来てたからな。

ちゃんと策は練ってあるぜ。

「サラ！頼む！」

「うん！」

走っている俺の後ろに隠れていたサラが止まり、杖を構えた。

「堅強の防壁、彼の者を護り給え！ プロテクション！」

サラがそう言ったその瞬間、俺の体の周りがピカッと光り、一瞬にして透明の壁に包まれていた。そう、サラの補助魔術だ。

そして予想通り、ドラゴンから炎が吐かれた。

しかし壁、要するにバリアーを纏った俺は迷わず炎に中にそのまま突っ込んでいった。

サラの補助のお陰で俺へのダメージはほぼ0だが…、さすがドラゴ

ン。
他の魔物とは桁外れの威力でプロテクションの効果が悪化されそうだった。

「くそっ！負けてたまるかつ！」

そして、なんとかプロテクションの効果は持ち堪え炎から出た俺は、目の前にいるドラゴンの頭に斬りかかった…のだが。

「な?!固い！」

そのドラゴンは鱗で覆われていて予想以上の物凄い防御力だった。そしてその瞬間、俺はドラゴンに前足で攻撃された。

しかし、咄嗟に剣でガードしたお陰で、吹っ飛ばされたが直接のダメージは免れた。

そして何とか起き上がった俺だが、ドラゴンと目が合っているのに気付いた。

やべえ、ドラゴン俺に釘付けじゃねか。

「こっちだ！」

その時、目標を俺に絞っていたドラゴンだったが急に後ろを向いた。後ろ、そしてこの声はグレンだった。

グレンはドラゴンの尻尾に斬りかかっていたのだ。

「なるほどね。そう簡単には取れないのか」

グレンがバックステップで一旦後ろへ下がった、しかし一瞬の出来事だった。

「うわっ!?!」

ドラゴンは尻尾を振り、グレンを攻撃したのだ。

「グレンっ!!」

「っく、大丈夫だ!俺のことは良いから集中だ!」

何とも無かったかのように起き上がったグレン。

逆に心配させちゃったかな?

グレンらしいぜ。

そして俺たちとドラゴンとの激しい戦いが始まった。

どうにか剣や刀で鱗を剥ぎ取ろうとしていた俺たちだったが取れそうが取れなく時間だけが過ぎていった。

「物理攻撃は効かないか…、なら!」

するとカエデはドラゴンから少し距離をとり、目をつぶり何か唱え始めた。

聞き取る間も無く次に腕を振り上げ、目を開けた。

「食らえ!!!」

そしてカエデは叫ぶと共に上げた腕を振り下げた。

その瞬間、どこからともなくドラゴンに勢い良く雷が落ちた。

カエデ曰くこれは忍術という魔法みたいなものらしい。
ヒドラがいた洞窟で発せられた閃光も忍術だったわけだ。

「グウオオオオ!!!」

雷撃を食らったドラゴンは唸り声を上げた。

するとどうだろう、鱗に傷が付いているのが見えたのだ。
何で早く気づかなかったのだろうか俺は。

「魔法だったら鱗を剥がすことが出来るんじゃないか?!」

俺はカエデに問いかけた。

「でも私の忍術じゃちよつと威力が足りないみたい…」

そうなのか…。

じゃあカエデが駄目となると…。

「セツナ！出来ないか?!」

「分かった、やってみるわ!」

そしてセツナは早速詠唱に入った。

「吹き荒れる疾風、切り裂け！ エアカッター!」

セツナはそう唱えると、ドラゴンに無数の鋭い風が吹き荒れた。
するとドラゴンの唸り声と共に体から何かがポロつと落ちたのが見えた。

俺はそれを目を凝らして見てみた。

「あれは…鱗だ！間違いない！」

それは紛れもなくドラゴンの鱗だった。
さすがセツナだ。

剣術だけでなく魔術も優れている。

「ヤス！私が援護するから早く鱗を取って！時間が無いわ！」

詠唱を終えたセツナがそう俺に言った。

そう、何だかんだで時間を食っていたのだ。

「分かった、行くぞ！」

俺はドラゴンの鱗目掛けて走り出した。

しかしドラゴンは俺に気付き炎を吐き出した。

俺はヤバいと思った。しかし。

「プロテクション！」

俺の体にまたプロテクションが張り巡らされた。

さすがサラ。

ドラゴンの行動を読んで俺に補助魔術をかけてくれたのだ。

しかし、今回の炎は何か違っていた。

溜めてもいないのにプロテクションが炎によってもう破壊されようとしていた。

「マジかよ?! さっきの炎より格段に威力が上がってるだ?!」

今度こそヤバいと思ったその時、炎が俺から逸れた。

「はあっ！！！！」

セツナがドラゴンの顔に斬撃を加えていたのだった。

「今よ！」

俺はセツナによりドラゴンがバランスを崩して地面に倒れている隙に落ちた鱗を素早く取った。

「取ったぞ！みんな！」

皆、俺が鱗を取ったことを確認した。

「よし！とりあえず撤退よ！」

そしてセツナの言葉によりドラゴンが起き上がる前に一斉に皆元来た道へ走り出した。

23・別れ、そして呆れ

ドラゴンとの戦いで鱗を手に入れた俺たちは、洞窟の入り口まで全力疾走で戻ってきた。

後ろを振り返ってみたがさすがにドラゴンは追ってこなかった。

「ふう…何とかだったな」

俺は息を調べ、そして洞窟の壁に寄りかかった。とりあえず、生きててよかったぜ…。

「もうドキドキして大変だったよ」

「ドキドキしてもんじゃないわ。もう二度とごめんよ」

そう言葉を交わすサラとカエデ。

だが、笑顔が見え始めてきた。

グレンもセツナも安心した感じだった。

さてと、結局オオトカゲでなくドラゴンの鱗を取った訳だが。

改めて見るとゴツゴツしてて硬く、猛々しさを感じさせるものだった。

しかし、ダバスの野郎。

死なないようにとか言ってたけどまさかこの事か？

オオトカゲの鱗とか言ってる本当はオオトカゲなんかいないってことが分かって言ったら怒るぞ。

「てかさあ、急いだ方が良くない？時間どうなのよ」

「そうだった。こんなところで休んでる場合じゃないな」

俺は時間を確認した。

タイムリミットまであと五十分か。

まあグラティアに帰るのに約三十分だから余裕かな？

「よし！グラティアに戻るぞ」

そして俺たちはグラティアに向かった。

洞窟から滝のところまで戻ってきた俺たち。
するとセツナがいきなり足を止めた。

「ん？どうしたセツナ？」

「私はここでお別れね」

「え？」

俺たちはびっくりした。

「お別れ…そうか」

そうだよな。

セツナは修行の時間を割いてまで、俺たちに付き合ってくれてたんだもん。

「なんかさみしいな」

「ありがとうサラ」

悲しんでいるサラの頭を撫でるセツナ。

その時俺は、一歩前に出た。

「セツナ。落ち着いたらまた会いに行くから、そしたら稽古をお願いしたい」

俺は真面目にセツナに今の意思を伝えた。

すると俺の言葉を聞いたセツナは微笑んだ。

「稽古？もちろん良いわよ。でも私、厳しいわよ？」

「承知の上だ！」

俺も笑って答えた。

するとセツナは俺に近づいてきて手を出してきた。

「ありがとう。良い経験が出来たわ」

「何だよそれ。でも俺もセツナに会えて良かったよ、ありがとう」

そして俺とセツナは固く握手を交わした。

僅かな時間の中で、俺はセツナのお陰で少し強くなれたような気がした。

技術的にもそうなのだが精神的にもだ。

セツナの神彩流そして桜華流の技術を目の当たりにして、俺の中の何かが変わった気がしたのだ。

そう、何かが…ね。

そしてセツナは小屋の方の森に消えていった。

それを見届けた俺たちは再びグラティアを目指し急いだ。

午後五時まであと十分つてところでグラティアの入り口の前までやって来た。

途中現れた魔物のお陰で予定より少し時間がかかってしまったのだ。

「やっと着いたぜ。よし、このまま直でダバスの所に行くぞ！」そして俺たちは走って門をくぐった。しかしその時だった。

「はっ！みんな危ない！」

俺は皆に大きな声でそう叫んだ。

そして皆は意味に気付き、俺たちは咄嗟に避けるようにして左右に転がるように飛び込んだ。

避けるようにはどういふことかと言つと…。

「何なんだ？！あの馬車は？！」

そう物凄い勢いで馬車が走っていったのだ。

こっちも走つて注意してなかったけど、あんな神速とも言えるような速さで走る馬車もどうだろうか。

「何なのよ！あの馬車は！」

カエデの怒りが爆発していた。

「カエデ、今は怒るよりもダバスのお屋敷に行かないと」
グレンがカエデの怒りを何とか静めようとしている。
しかし、俺も今回はカエデと同じ気持ちだ。
全く何なんだか…。

そしてなんだかんだで俺たちは午後五時前までにお屋敷に戻ることが出来た。

「こら！ダバス！出てこい！」

すると早速カエデがお屋敷の門をバンバン叩いた。
すると、門の近くにあるスピーカーからダバスの声が聞こえてきた。

『おお、戻ったか！で、どうじゃった？』

「鱗を取ってきたわ、ドラゴンのね」

『おお！そうかそうか！じゃあそれをワシに渡すの…』
『何がそうかそうかよっ！』

おお、怖い怖い。

カエデがダバスの喋っている途中で怒鳴った。

「私たちがどんだけ大変だったか！」

『だって、そうした方が面白じゃないか』

「……………」

何だろう、もう起こる気すら起きない。

「もう良いわ。じゃあ鱗とネックレスの交換ね」

そうだな、これでやっと母さんの形見を取り戻すことが出来たぜ。

「ん？ネックレス？あああの指輪が通ってるやつか。アレは売っちゃったぞ」

「そうかあ、売っちゃったかあ……………」

「はあ？」

俺たちはダバスの言っている意味が理解出来ず固まってしまった。

24・苦勞の重なり

冗談じゃない。

そう思うことはよくあることだろうと思う。

しかしそれがよりによって……ね。

「売っちゃったって一体どういいうことだよ……」

俺は顔を引きつりながら言った。

『いや、仕方なかったのじゃ。いつも良くしてもらってるお方が来て、どうしても言うから断れなくてのお』

「はあ？何よそれ！私たちの約束は何だったのよ！」

ヤバイ、カエデマジでキレてるぞ。

『正直取ってこれないと思ってたからね。だから売っちゃった』

向こうで『てへっ』とかやってそうな口調で言うダバス。

つか……俺たちの苦勞が水の泡かよ。

しかもカエデからは殺気のようなものが感じられる。

……俺、知らない。

と思ったその時だった。

グレンが前へ出てカエデの肩に手を置いた。

そして二人の顔が合った時、カエデの殺気オーラが和らいだ。

おお、さすがグレン……。

こういう役はグレンだな。
とか思ってるけど今度は、

「それで、いつ誰に売ったんですか？」

グレンがダバスに質問した。

『ついさっき来たこととか、誰かは教えられんよ。』

「そう…ですか」

ダバスの言葉にそう答えたグレン。

そして何か考え始めたみたいだった。

「…ってちよつと待って？ついさっきって口滑ってない？」

「…ということはまだこの街にいるかもしれないってことじゃないのか？！」

「…てかそうだったら、ダバス馬鹿過ぎだろ。とその時、グレンが何か思い付いたみたいだった。

「…そういえば、さっきここに馬車に乗って来ていたあの人が、馬鹿っぽそうなのだったな」

そうグレンが笑いながら言った。

そこで俺は疑問が浮かんだ。

馬車？

何でここに来てたって分かるんだ？

しかも乗ってた人まで…、グレンはいつ見たんだ？

俺は考え始めた、とその時、ダバスが血相を変えたかのような声で言ってきた。

『お、おまえ。あのお方を侮辱するつもりか?!』

尋常ではない声がスピーカーから発せられた。
するとグレンは、

「…あ、すみませんでした。それともうネックレスの件は良いです、
では」

グレン?!

一気に冷たい態度に変わった。

俺はその変わりようにびっくりしていた。

それと、あのダバスの反応…、もしかして？

「さあ、行こうみんな」

そう言うとグレンは御屋敷から離れていった。

『お、おい！鱗は？ドラゴンの鱗〜!』

…非常識な奴め。

ダバスを無視し、俺たちも急いでグレンを追った。

俺たちはグレンに付いていき、御屋敷からだいぶ離れたところまで
やって来た。

するとグレンはクルッと俺たちの方に体を向けた。

「作戦大成功だな」

グレンは満面の笑顔で言った。

しかし、よく馬車が来てたってグレンは分かったな。

「ん？ああ、アレはなんとなくで言ったただけさ。勘だよ、勘」

「え？」

なんとなくって、じゃあ乗ってた人が馬鹿っぽそってのは…。

「そう。見たことなんか一度も無いさ」

グレン、お前結構やるな。

まあ素直に聞いても教えてくれないだろうからな。

「そんなことより、聞いただろ？さっきの馬車に乗っていった奴がヤスの大切な物を買取ってつたみたいだね」

「ああ、間違いなさそうだな」

俺たちがひかれそうになった馬車のことだ。

あんな急いで一体どこに行ったんだか。

「とりあえず、まだ遠くへ行っていないんじゃないかな？」

サラが言う。そして、

「早く追いかけてよ！」

カエデが今にも行ってしまいそうな状態で言った。

しかし、あの馬車は何処に向かったのだろうか。
何か情報が無いかと探しつつ、とりあえず俺たちは出入り口の門に
行くことにした。

門に来た俺たち。

ここに来るまででは馬車について何の情報も得ることができなかつ
た。

すると、グラティアの街が徐々にライトアップされてきた。
もう日が暮れてきたのだ。

「どうしよう、暗くなってきちゃったよ？」

夜になると外の魔物はよりいっそう凶暴になるから危ない。
しかし、今追いかけては逃げられてしまいかもしれない。

「どうしたら良いのか……」

そう考えていると門の電気もライトアップされた。
その時だった。

「あ、………これだ！」

俺はあるものを見つけ大声を上げた。

25・残された跡

馬車の行方は何処なのか。

グラティアの門のところで考えていた俺はライトアップされたことによりあるものを見つけた。

「みんな、ちょっと来て見てくれ！」

俺は皆を呼び地面に指を指した。

何故かと言うと、そこには…。

「あ、馬車が通った跡だ！」

そう、サラの言う通りそこには馬車が通った跡が残されていたのだ。これがその馬車のだとすれば、辿っていけば良い訳だ。

「ヤス。門番の兵士に聞いてきたけど、今日馬車は一台しか通ってないってさ」

仕事早いな、グレン。

そうか、じゃあこれを辿っていけば…。

「行こう！ヤス！」

俺に近づいてきたと思えば、力強くサラがそう言った。

「サラ…」

俺は迷っていた。

ただでさえ、ドラゴンと戦って体力を消耗している中で、休まずに行って良いのか。

これは俺の問題だから、ここまでサラたちを巻き込んで良いのか…。俺は皆の顔を一人一人見た。

皆、やる気に満ちた顔をしていた。

それを見た俺は心を動かされた。

……腹括るぜ。

「行こう！」

暗くなってきた空に俺の声が響く。

空では星が瞬きだした。

まるで、俺たちを見送ってくれているようだった。

俺は大きく深呼吸をし、気を引き締めた。

そして、俺たちはグラティアを背に馬車を追うため夜の街道を歩き出した。

虫の鳴き声と夜鳥のさえずりが響き渡る。

俺たちは馬車の走った跡を辿って進んでいる。

今のところ魔物にも襲われず、怖いぐらい順調な出だしであった。

「ねえ」

と、その時、虫と夜鳥の声にカエデの声が混じった。

俺はその声を拾い、何だ？と返事をした。

「ごめん。全ては私が盗ったばかりに…」

なんだいきなり。

カエデの表情はグラティアの時とは変わり、らしくない言葉が発せられた。

「だつて…」

そして再び虫と夜鳥の鳴き声だけになった。

「…はあ。どういつ心の変化か知らないが…。お前がやったことは普通に考えて、いけないこと。法に照らし罰を受け、償わなければいけないのだろう」

カエデは下げていた頭を上げ、俺を見た。

「だけど、カエデは自らもう罰を受けてるじゃないか。俺に協力して『形見を取り返す』っていうね」

……………、あれ？何だこの間は…。

「……………ナニソレ…意味わかんない」

そして思わず笑うカエデ。

えっと…、性に合わないこと言うんじゃないかな…。

「もういい。まあ…気にすんな」

そう、決して許される行為ではない。

しかし、カエデは取り返すという気持ち、そして行動を俺に見せてくれている。

それにカエデの過去。
それも含め俺は……、

「てか、あんたには言っていないし。私はサラとグレンに謝ってるの」「私?!」

……………。

はあ…、何か自分で何言ってるのか分からなくなったよ。
つか、こんなこと言い出したってことはカエデもいろいろ思うことがあつたんだな。

まあ、期待してるぞ。

そんなこんなで歩き続けてる俺たち。
しかし徐々に皆から疲れが見え始めてきた。今日も朝からドタバタしてたからな。
特にドラゴンは肉体的にも精神的にも疲れたし…。

「みんな、大丈夫か？」

俺は皆にその言った。
するとサラが、

「少し疲れたからかな？お馬さんが見える……」

と、目をしばしばさせて言った。

……つて、ちよつと待て！
今、馬つて言つたよな？！
俺は辺りを見回した。

月光だけが頼りの暗闇の街道。一体、どこだ？！

「ほら、今動いた」

指を指すサラ。

俺は指差す方向を目を凝らした。
するとどうだろう。

馬か分からないが、微かにだが何か動いているのが見えた。
これはもしかしたらもしかするんじゃないか？！

「ちよつ、ちよつとヤス？！」

サラの言葉を聞く前に俺は一人走り出した。
馬車の通った跡の上を気づかず走っていた俺は、とうとう動く何かを認識した。

「間違いない！馬だ！馬車だ！」

喜びのあまり大声を出してしまった。

目の前にはグラティアで見た馬車が街道の脇に止めてあった。

26・俺は猫が好き

形見を探し、馬車を追いかけてきた俺たち。
そしてとうとう見つけた馬車。

近くで見ると、こりやまた豪華な箱馬車だな。
そう、俺たちはその箱馬車の前に立っている。

「……あれ？」

俺は遠慮なく馬車の中を覗いた。

しかし、人は乗っておらず、ましてや馬を操るドライバーもいない。
何処に行ったんだ？

「ねえ、これ見て」

俺はサラが指摘したところ、地面に顔を向けた。
すると、そこには足跡が残っていた。

もちろん俺たちの足跡ではない。
大きさが違う二つの他人の足跡があったのだ。

そして俺は足跡をたどってみる。
すると、足跡は森に続いていた。

「これは……」

足跡をたどり森に近づいた俺の前には獣道があった。
いや、これは……。

「剣で切り刻んだ跡もあるね」

顔に手を当て、神妙な表情で言うグレン。
そう、その道は誰かによって意図的に作られたものだった。
しかし、何故こんなところに道を？
この奥に何かあるんだ？

「とりあえず、行くしかないんじゃない？」

腰に手を当てて言うカエデ。

ここで待ち伏せっていう手もあるが……、まあ俺の性に合わないしな。

この先に何かあるのかも結構気になるし。
ここはカエデの言う通り、行ってみるか。

「じゃあ、先に進むぞ」

そして俺たちは、俺を先頭にし、森に作られた道を進み始めた。

道を進む俺たち。

道は一本道で直線だ。

そして、むやみに作ったって訳では無さそうな感じがするものだった。

「この道を作った人はトレジャーハンターとかだったりして」

俺の後ろを歩いているサラが言った。

トレジャーハンターね…、まあ確かに考えられなくはないけど。

まあ、こんなところに進んでいくなんてトレジャーハンターが何か
疚しいことを企んでいる奴ぐらいしかいないだろうからな。

とまあそんなこんなで十五分ぐらい歩き続けた俺たちはやっと森か
ら抜けることができた。

しかし、抜けて早々俺は目の前の光景に驚いていた。

「ここは……」

俺たちの目の前には神殿のような何かの廃墟があった。
そして何故だか近づいてはいけないような気がした。

「あ、ヤス、これ」

グレンの指差すところには足跡。

しかも廃墟に向かっている。

……うお!?

…背中に悪寒が走った。

「なあ、やっぱり待たないか？何だか嫌な予感がするんだけど……」

「あれえ？何？もしかしてヤス、怖いの？」

いや、そういう訳じゃないんだけど……。

何を言い出すんだかカエデは……って。

カエデがニヤニヤして俺を見ていた。

「大丈夫よ、お化けなんか居ないわよ」

楽しそうだな。

てかそうじゃないし……って、

「うおお?!」

その時、俺に後ろから誰かがくっついてきた。
俺は背後を恐る恐る見た。
するとそこには……、

「お化け?!どどどど何処?!」

怯えているサラが居た。

そうかサラってお化けとか幽霊とか駄目なのか。
意外……でもないかな?

「へ?幽霊?!どどどど何処?!」

……こりゃ相当怖いんだな。
やっぱりここは待った方が……。

「い、いや。わ、私は大丈夫だから……、行こうヤス」

子猫のように、目をうるうるさせながらそう言うサラ。
か、かわ……

「じゃあ行こう!」

つと、カエデがニコニコしながら廃墟に入ってしまった。
おい、サラはお前じゃなくて俺に言ったんだよ。

てか、一人で先行くなよ。
まったく……………。

俺は突っ込みたい気持ちを押さえた。

「ふう。じゃあサラ、行くぞ」

「う、うん」

俺はサラを背中に貼り付かせたまま、グレンとともにカエデを追って
廃墟の中に入った。

……………何だよグレン、ニヤニヤしてこっち見んなよ。

27・探索開始

「ネズミが一匹、ネズミが二匹……」

「……何やつてるんだ？ヤス？」

見て分からないか、グレン。
ネズミを数えてるんだよ。

「いや、そうじゃなくて……」

一人で楽しそうに廃墟に入り込んだカエデを追いかけている俺たち。カエデは嫌な予感がしていた俺を無視して先に行くし、サラはカエデがお化けとか言うから俺の背中にくっついてるし、グレンはその俺を満面の笑顔で見てるし……。
何か幸先悪いぜ。

まあサラが背中にくっついてるってのは悪い気はしないが……。

「で、何で数えてるんだ？」

「別に何でも良いだろ」

まあ実を言うと理由なんてないんだけどな。
そうなんとなくだよ。

「あ！ほらほらこっちこっち！ここから下に行けるみたいよ！」

そんなことを話しているうちに俺たちはカエデを見つけた。

そのカエデは、仁王立ちしてニコニコしながらこつちを見ていた。俺たちはカエデの元に行ってみると、そこには地下へと続く螺旋階段があった。

「この階段怪しくない？絶対この下にあんたの大切な物を持ってっただ奴が居ると思うの」

そう言うカエデだが…、やっぱり楽しんでやがるなこいつ。まあ、確かに見て歩いていたら、人影は無かったからな。居るとしたら…、

「ここしかないか…」

しかし真つ暗だな…、お化けとか居てもおかしく…。

「お、お化け?!」

あ、ああごめんサラ。

とまあ、とりあえず明かりが欲しいな。何か無いのかな？

「明かりならあるわよ、……………ほらっ!」

その瞬間、カエデは雷系の忍術を使った。すると中が明るくなった。

「ほら。中には松明が壁にちゃ〜んと付いてるから、こつやって忍術で点けていけば大丈夫よ」

なるほどな、暗くて見えなかつたぜ。
まあ、これでなんとか進めるな。

「それじゃあ、行ってみるわよ！」

そしてカエデはまた一人で先に階段を降り始めた。
はあ、まったく。

「まあまあ、俺たちも行かないと」

グレンはそう俺をなだめ、カエデの後を追っていった。
…やれやれ、グレンにはかなわないな。

「サラ、大丈夫か？俺たちも追うぞ？」

「う、うん、大丈夫」

…えっと、階段降りづらいから一旦離れてくれないかな…。

階段を降りた俺たちはカエデが壁の前に立っているのを確認した。
いやでも、壁は壁でも、

「これは壁画だな…」

その壁には絵が描かれていた。
えっと、左から黄、赤、緑の鳥が描かれていて、それを女神と思わせるような綺麗な女性が手のひらに乗せている絵であった。

なんだか微笑ましい物である。

「ん？何か書いてあるな」

グレンが壁画の下部に顔を近づけていた。

俺も近づき見てみるとそこには文字が書かれていた。しかし、

「これ…何語だ？」

その文字は見たことない文字で俺には読むことが出来なかった。

見るにグレンも読めないみたいだ。

頭を傾げている。

『順に示せ、さらば開かれん』

その時、俺たちの後ろからそう声がした。

待て、今ここにいるのは隣にいるグレンとカエデ、そして俺にべっ

たり付いてるサラだけだ。

もしかして、本当に幽霊とかじゃないだろうな…。

そして俺は咄嗟に振り返った。

すると…。

「セ、セツナ?!」

「あら、偶然ね」

そう、そこにはグラティアで別れたはずのセツナが居ただ。

「それは古語ね。要するに昔の言葉よ」

セツナは俺たちに近づきそう言った。

古語か…、読めないわけだ。

俺はそんなの勉強してなかったからな。

「てか、何でセツナはここに居るんだ？」

俺は質問した。

まさかこんなところまで散歩とかでは無いだろうからな。

「あなたたちと別れた後、私はまた修行を始めたの。そしたら、怪しい馬車を見つけて追ってたら、ここに来たわけ」

壁画を眺めながらそう俺に答えるセツナ。

じゃあ、やっぱりここに目的の奴等が居るんだな。

「で、そいつらは何処に行ったんだ？」

俺は続けて質問をすると、セツナは俺を見た。
ん？何だその微笑んだ表情は…。

まさか……。

「それが見失っちゃたのよ」

……やっぱりな。

28・三色の鳥の秘密

「それが見失っちゃたのよ」

「やっぱりか…」

微笑みながらそう言ったセツナに対し、俺は軽い溜め息。

見るからに広そうな廃墟の地下に居る俺たち。

しかしまあ、目的の奴等は間違いなくこの廃墟の地下の中に居るってのは確実みたいだから、根気よく探すしかないか。

「あ、因みにここは廃墟だけど神殿よ。もう調査は済んでいて、特に何も残ってなかったみたいだけど…、何の用かしらね？」

へえ、やっぱり神殿か。

やっぱりトレジャーハンターか何かか？

まあどっちにしろ母さんの形見は返してもらわないとな。

「とりあえず、中を回ってみよう」

じゃないと何も始まらないからな。

「じゃあ、私も一緒に行くわ」

来てくれるのか？！

これは心強いな！

「ええ、またよろしくね」

そして、再びセツナが仲間になったところで、俺たちは再び神殿探索を始めた。

「ところで、サラどうしちゃったの？」

あ、ああ、まあ気にするな…。

地下探索を始めた俺たち。

しかし地下は迷路みたいは何個の別れ道、そして行き止まり…。皆混乱し始めていた。

「次は左ね」

「何言ってるのよセツナ。真っ直ぐに決まってるじゃない」

「ガクガク、ぶるぶる」

「賑やかで良い雰囲気だな。そう思わないかヤス？」

「あのなあグレン……」

移動しながら地図でも書いておけばよかったな。

まあ今さら言っても仕方ないけど。はあ…、大丈夫かな？

その後、俺たちは明らかに同じところを回っていたことは言うまでもない…。

かなり迷ってやっとのこと。

俺たちはかなり奥まで進み、他の部屋とは明らかに雰囲気が違う部屋にたどり着いた。

「怪しいわね」

カエデが腕を組み、部屋を見渡す。
なんだろう、壁の色が薄い黄色に見える。

「あ！また何か書いてある！」

カエデがこっちを振り向きながら壁に指差している。
そこにセツナが近づき、文字を読んだ。

「えっと、『意志を示せ』って書いてあるわ」

意志を示せ……か。

一体どういうことなんだろうか。
進みたいって意志とかそんな感じか？

「意志かあ……、ということとは……」

そう言うとカエデは壁から少し下がった。
…何をしようとしてるんだ？

「よし！行くわよー！」

するとカエデは壁に向かって走り出した。
まさか……。

「うりゃ！」

カエデの体が宙に浮いた。
そして……。

ドーン！

壁を蹴った……。

「あれ？何で開かないの?!」

そんなことで開くわけないだろ。

何考えてんだカエデは。

と思っていた矢先、カエデは懲りずに壁を何回も蹴っていた…。

そして少し時間が経ち……。

「ああ！もう！開かないじゃない！」

そりゃそうだ。

ただ壁を殴って蹴ってるだけだからな。

しかし、どうすれば開くんだらうな。

と、その時だった。

カエデから何やら嫌な空気が感じられた。

見てみると下を向いて、握り拳を作り、体をピクピク動かしていた。

「何で。何で開かないのよ!」

はあ、また暴走か?

そして、予想は的中した。

「開きなさいよっ!」

カエデはそう叫ぶと共に壁に雷の忍術を当てた。

まったく…。

俺はグレンにカエデを止めさせようと頼もつとしたが、その瞬間だった。

「うおお?!」

俺たちは足を取られた。

いきなり地面が揺れ始めたのだ。

てか、冗談じゃない、ここは地下だぞ?!

生き埋めなんかはごめんだぞ?!

とその時だ。

「こ、これは?!」

カエデが雷を当てた壁がゆっくりと開き始めたのだった。

どうした?!とつとつ神殿が壊れたか?!

「…そうか!もしかしたら」

その時、グレンが何か思い付いたようだった。

「壁画だよ、壁画！あれがヒントになってるんだよ」

壁画…、確かに示せば開くとかそんなことが書いてあったけど……。

「そして、あの女性の手のひらに乗っていた三色の鳥。あれがヒントだ」

鳥…、確か左から黄、赤、緑だっけか…。

あ、そういえばこの部屋の壁は薄く黄色がかったるな。

そして、カエデの雷系の忍術。

もしかして……。

「俺の考えが正しいと、これは鳥の色と壁の色にあった属性の術を使えば開くんじゃないかな」

なるほど、そうかもしれないな！

となると、この後もまだ赤と緑があるってことか？

赤と緑かあ…、てか何か面倒くさいな。

そして、そんなこと考えているうちに完全に壁が開いた。
とその時、

「要するに、私のおかげね！」

目の前に居るカエデが仁王立ちして言っていた。

…まあ、今回はそうなるな…。

なんだか納得いかないが…。

「よし！この調子で行くわよ！」

そして何度も言うが、カエデは一人で突っ走る。
はあ、調子狂うな……。

そして俺たちは奥へと進み始めた。

こんなんで大丈夫か？本当に…。

探索というものはワクワク、そしてドキドキするものであると思う。未知の場所で新しい発見をしたり、謎を解き明かしたりとかね。

しかし、今の俺にはそんなものを感じられない。

いや、感じる余裕が無いとでも言うっておこづ。

形見のことってのも理由としてあるのだが……。

「次はこつちよー！」

そう、こいつのせいだ。

一人で暴走しているカエデのせいで探索どころか形見のことさえ、なんか調子が狂ってしまうのだ。

「おい、形見のことは分かってるんだろっな？」

「当たり前でしょ？だからさっさと行くわよ！」

ごめん…母さん。

今の俺には自分の理性をちゃんと保つことが出来ない…。目をキラキラ輝かせて動き回っているあの馬鹿のせいで…。

「なあ、そんなに楽しいのか？」

俺はカエデに聞いてみた。

「ん？楽しいというか、こつという場所来たらテンション上がるですよ普通」

まあ、時と場合によってはテンションは上がるかもしれないけど……。
カエデのテンションは上がりすぎだろ。

「まあお化け屋敷とか好きだからね、私は」

お、おいそれ言ったらサラが……。

「だ、大丈夫だよ。慣れてきたから……」

お、サラが強くなった。

そういえば、さっきまで俺の背中にくっつき、目をつぶって歩いていたサラだが、今では背中ではなく俺の腕にしがみつきちゃんと前を見て歩いているからな。

…腕つてのも悪くないな。

「ん？どうしたのヤス？」

なんでもねえよ、セツナ。

……グレンはそんな顔でこっち見んなっ！

最初は黄色だったってことは、壁画の鳥を順に見ると次は赤。
そして今、俺たちは薄く赤みがかかった部屋へとたどり着いていた。

「よし！壁を開けるわよ！」

カエデが片腕をぐるぐる回している。

ヤル気満々だな、こりゃ。

さてと、今回は赤であるが、赤ということはどう考えても『火』や『炎』を連想させる。

つまりそれ系統の術を使えば良さそうだな。

そしてカエデは火属性の忍術も使える。

この前のザコ戦の時なんか魔物を丸焼きにしたからな…。

「じゃあ、行くわよ！それ！」

そして、カエデは壁に忍術を使った。

「……………あれ？開かない？」

壁は開かなかった。

しかし、その理由を俺たちは知っている。

何故かというと…、

「何故炎ではなく、また雷を使うんだ?!」

「へ?」

こいつ、話を聞いてなかったな…。

グレンが言っていただろうが。

するとカエデは平然と、

「あ、そうなの？」

と切り返した。

俺は思わず溜め息が漏れた。

「それじゃあ炎ね。これでどうだっ！」

そしてカエデは壁に向かって炎系の忍術を使った。すると、考えは的中。

さっきと同様、揺れが起こり、壁が開いた。

「よし！」

カエデはガッツポーズを決めていた。

とまあ、これで残りは緑かあ。

緑ってことは……。

「それじゃあ次行くわよ！」

つておい、考えてる途中で先に行くなよカエデ！
まったく……。

でも、次はカエデでは開けられないな。

「ん？何、ヤス？」

いや、なんでもねえよ、セツナ。

さてと、結構時間がかかってしまったな……、最後の部屋に到着だ。
壁の色はもちろん緑。
緑といえば……、

「ここはセツナの出番だな」

「ああなるほどね」

理解が早いなセツナは。

しかし、カエデが前に立ち塞がった。

「何故セツナ？」

怖い顔で俺を睨むカエデ。

仕方ない、皆分かっているだろうが説明しよう。

緑つてことはどう考えても『草』や『風』系統の術だって予想がつくだろう？

つてことは、セツナの魔法しか無いだろ。

カエデは風系統の忍術は持ってないし。

「うっ、確かに…」

肩を落とすカエデ。

するとカエデはセツナの前に立った。

今度は何だ？

「セツナ。今度暇な時で良いから風の魔法を教えて」

そうカエデは言った。

てか魔法つて、カエデは魔法使えないんじゃない？

「理論さえ分かれば、魔法を使えなくても忍術として作り上げるわよ」

カエデの目は本気だった。

てか作り上げるとか…。
とまあ、負けず嫌いなのか、どうなんだか知らないが、早く壁を開けて進もうぜ？

「あ、今開けるわ」

そしてセツナは風の魔法を使い、壁を開いた。
ふう、これで全部かな？

そう考えていたその時、セツナとカエデが何か話していることに気がついた。

見るとカエデは喜んでいる。

魔法の理論を教えてもらう約束でもしたのかな？

「よし！これで障害を全てクリアね」

話が終わり、ご機嫌なカエデがまた先頭に立つ。

約束したんだな、絶対。

「この奥に何かあるんだろう？楽しみだわ」

あのなあ…、形見…。

つか、今さらだけどこんな奥まで形見を持った奴等は来ているのだろうか？

今思うと疑問に思えてきたぞ…。

そして最後の障害（？）を抜けた俺たちはさらに奥に進み始めたのだった。

SE・あけおめ！&キャラ紹介（前書き）

SE＝サブイベント

SEにより前回の話の続きでは無いです。

今回は、会話文だけで構成された文章になっております。

「」の前に付いている文字がキャラの頭文字となります。

ご了承ください。

SE・あけおめ！&キャラ紹介

サ「あけましておめでとう！ヤス！」

ヤ「ん？何だサラ？おめでとう…？」

サ「『あけましておめでとう』だよ！今日から新しい年だね！」

ヤ「そうだったか？全然気にしてなかったぜ…」

サ「もうヤスってば！」

ヤ「ごめんごめん。最近いろいろありすぎて考えられなかったんだよ」

カ「そうそう。その『いろいろ』のせいでいい迷惑よ」

ヤ「いきなり何だよ、盗賊女」

カ「ああもう、その名で呼ばないでよ！私にはカ…」

ヤ「カエデだろ？分かってるよ」

カ「なっ！？…んまあ、分かってるなら良いのよ…」

グ「はは！新年早々仲が良いな！」

ヤ&カ「仲なんて良くない！」

グ「そんな、二人同時に言わなくても…」

ヤ「てか、俺たち神殿の廃墟に居なかったか？」

サ「そんなことは気にしちゃダメだよ」

ヤ「気にしちゃダメって、あんなに怖がってたのにな……」

サ「……………いじわる」

ヤ「…そんで、ここは何処だ？」

サ「ここはね、新年を皆で過ごすための特設ルームです！」

ヤ「皆でって、セツナが居ないじゃないか……」

セ「あら？呼んだかしら？」

ヤ「うわっ！セツナ！後ろに居るなら言ってくれよ……」

セ「ごめんなさい。でもその代わり良いもの貰ってきたわ」

ヤ「手紙？一体誰から……」

セ「知らない男の子から」

カ「知らない男って何か怪しいわね……」

ヤ「とりあえず、中を見てみよっぜ。セツナ、貸してくれ」

カ「いや、ここは私がつ！」

ヤ「お、おい！ったく…！」

カ「では読むわね…」

『皆さん、新年明けましておめでとございます！Yamato-Yです！』

ヤ「yamato-Y？」

『新年早々忙しい人、はたまたマツタリのおんびり過ごしている人、人それぞれでしょう。』

サ「私はのおんびり過ごしたいな」

『そこで！今回はキャラ設定をここで公開しようと思っつ…！』

セ「突然ね」

ヤ「てかキャラ設定って何だ？」

『ではおんびりっ』

ヤス

17歳で右利き、身長175?で体重65?。帝都グロリアで産まれ、何不自由無く育てられた。家族は父だけで、母はヤスを産んで少し経ってから死んだと聞かされている。

剣術を扱い、神彩流を習っているが最終的には我流にたどり着く。意外と負けず嫌いではある。

サラ

17歳で右利き、身長は163?で体重50?。記憶を失った謎のお嬢様。

最初は名前しか覚えていなかったが、体の感覚が残っていたのか反射的に治癒術を使ったりとで、自分は何者なのかと徐々に記憶を取り戻すためにヤスたちと旅に出る。とにかく明るい。

しかし、怖いものは苦手。

グレン

18歳で両利き、身長177?で体重65?。

帝都グロリアの隣の村アペリエの宿屋の息子。鉱山での魔物騒動によりヤスと意気投合。

ヤスたちの旅の手助けとして旅に同行することになる。双剣士としても戦える。

基本真面目な性格である。

カエデ

15歳で左利き、身長148?で体重40?。

昔は父とグラティアに住んでいた。

しかし、とある出来事でグロリアの人間に父が殺されてしまい、帝都の人間が嫌いになる。

今は近くの父の隠れ別荘に住んでいる。

自称くの一。

好きなものにはのめり込むタイプ。

セツナ

25歳で右利き、身長174?で体重?。

神彩流後継者。

そして独自で改良した桜華流の使い手でもある。

対等の存在で居たいという思いから、年下でも年上でも稽古の時以外は自分の名前を呼び捨てにさせる。

天然な一面を見せるときもあるとか。

ヤ「……何だこれ」

サ「私たちの設定だね」

ヤ「いや、それは分かるんだが……」

『因みに、あと二人仲間になるキャラがいるとかいないとか?!』

セ「あら、あと二人も？それは楽しみだね」

ヤ「何だろ、良いのかこれ」

カ「……………。何か疲れたわ。はいサラ、交代」

サ「わ、私?!……………えつと」

『ぐだぐだな文章になってしまい申し訳ありません。最後に一言、
Tales of memoriesをよろしくお願いいたします
』!

ヤ「なあ、本当にこれ良いのか？」

グ「まあ良いんじゃない？」

サ「その後、彼らの行方を知るものは誰も居なかったとさ！めでたしめでたし」

ヤ「……………おい」

SE・あけおめ！&キャラ紹介（後書き）

本当、見づらいつと感じた方々申し訳ありませんでした。

しかも内容もぐだぐだです、すみません（汗

もっと精進しなくてわ。

というわけで、今年もよろしく願いたします！

30・治癒術と女神

さあ、最後の障害を抜けた俺たち。

カエデのペースに飲まれながらもなんとかやってることが出来た。

そして、この先には何かがあるのかと、進んでみたわけだが……。

今、俺たちの目の前には一直線の道が続いていた。

しかも奥が見えないほどの……。

まだ終わりじゃないのかよ……。

「長いわね……、でも神殿なんだからこれぐらい手強くなくちゃね」

手強いつて……。

カエデってたまに何を考えているのか分からなくなるな。

「何よ、その顔？」

いえ、なんでもございませんカエデさん。

「それじゃあ、奥までダッシュで行くわよ！」

お、おい?!

物凄い速さで走り出したカエデ。

【カエデがパーティーから外れました】

……何だよ上の。

先に行ったカエデを追い、長い道を進んでいくとある部屋に行き着いた。

そして、部屋を軽く見回した俺は肩を落とした。

そう、その部屋はどこからどう見ても…、

「同じだ…」

今までくぐり抜けてきた仕掛けのある部屋と同じ造りをしていたのだった。

「何よ？まだあるじゃない？どうなってるのよ」

カエデが騒いでいる横で、俺は部屋を今度はじっくり見渡す。

今までの仕掛けのあった部屋は黄、赤、緑と色が施されていたが、今回の部屋は何も施されていなかった。

それに謎を解く鍵である三色の鳥と女神の壁画。

しかし三色の鳥は全部使った。

一体どうということなのだろうか。

ここは行き止まりなのか？

どっかで道を間違えたか？

と、その時だった。

「ヤス！危ない！」

後ろの方に居たグレンが俺にそう大きな声で言った。

俺は咄嗟に振り返った。

すると、

「ぐうあ?!」

しまった！油断した！

俺はコウモリ型の魔物に腕を噛みつかれてしまった。

…やべえ、噛まれた腕が麻痺してきやがった。

どうやら毒を入られたようだった。

「くそっ！調子に乗るなっ！」

俺は腕から魔物を引き離した。

くっ、噛まれたところがうずく。

俺は耐えられず地面にうずくまってしまった。

…意識が朦朧とする中、剣で切り裂く音が聞こえてくる。

…グレンたちが魔物と戦っているのだろう。

「ヤス！大丈夫?!」

サラの声が聞こえる。

大丈夫…じゃないかもしれない。

と、その時、サラが俺に治癒術を使ったのが体を通して分かった。

優しい温もりを感じる。

まるで女神が俺を優しく包み込んでくれるような…。

「大丈夫か?!」

戦闘を終えたようで、グレンたちが駆け寄ってきた。

「あ、ああ、皆のおかげで…大丈夫そうだ」

ピリピリした空気から安堵の空気変わった。

正直どうなるかと焦ったけどな。早期治療でどうにかなりそうだが、その空気はすぐに壊れた。

「こ、この揺れは?!」

いきなり地震が起きたのだ。

とうかこの揺れ……まさか!

俺はすぐさま壁を見た。

すると、予想は的中。

壁が動き出していた。

「何々?何がどうしたっていうのよ」

カエデが楽しんでいるのかびっくりしてるのか分からない状態になっていた。

その時、俺はあることに気がついた。

「女神……サラの治療術……」

「え?」

驚いているサラを横に俺はそう呟いた。

すると、グレンが俺の言葉に対し、

「そうか!壁画の三色の鳥に気を取られていたけど、女神か!」

と、俺の言ったことの意味を理解したみたいだな。

「治療術は聖。女神との関係は十分ね」

持っていた刀を鞘にしまいながらそう言うセツナ。
セツナも理解したようだ。

まあ気づいていないやつがまだ居るが…。

「ん？何よ？」

いえいえ、なんでもございませんよ、カエデさん。

「はい、終わりだよ」

俺は地震が起きたせいで治療が途中だったので、サラに再度かけ直してもらっていた。

にしても、よくまあ開いたな。

魔物に襲われたのも無駄じゃなかったってことが。

「治療終わった？じゃあ行くわよ！」

出た、最近お馴染みカエデの仁王立ち。

はあ、このカエデのテンションはやっぱり調子狂うな…。

でも、この仕掛けが本当に最後だろう。

さてと、この奥に目的の奴等は居るのだろうか。てか、ここまで来たんだ、居てもらわなくちゃ困るぜ。

俺は立ち上がり、開いた壁の向こうをじっと見つめた。

31・畏怖なる黒髪

神殿の廃墟。

前に調査が行われて、特に何もなかったという結果で終わっていたらしいのだが…。

私たちは今こうして調査の手が行き届かなかったところまで足を踏み入れている…、とセツナは言う。

しかし踏み入れなくて正解だったんじゃないか？

分からないけど、とりあえず奥は嫌な予感がする。

あ、だからって、引き返したい訳ではない。

ここまで来たんだからな。

…しかし、嫌な予感がしてるのは俺だけなのだろうか？

サラはさつきよりは怖がらなくなったな……って、まあ良いとして、グレンとセツナはいつもと変わらない表情だし、カエデは……以下省略。

「どうした？」

落ち着いた表情で話しかけてきたグレン。

「いや何でもない。みんな、この先何があるか分からない。準備は大丈夫か？」

「あんだこそ、大丈夫なの？ちゃんとしてよね」

うっ、カエデに言われてしまった…。

あれはちよつと油断してただけで…、まあ仕方ないか。

…そうだな、俺がしっかりしなきゃな。

そして俺たちは最後の間があるだろうと思われるところへと向かった。

俺たちは大きなドアへとたどり着いた。

この奥が最後の間であろうと思わせる装飾のドアである。

「さあ、入るわよ」

カエデがドアに手を当てた。

母さん…、形見を持つてった奴等居るよな…。

俺は頭の中でそう願った。

そして、俺の緊張が高まり始めたところでカエデがおもいきりドアを開けた。

「……………」

ドアを開けるとこれまた神秘的な広い部屋があった。

しかも、真っ白な空間である。

何だか眩しいぜ。

そして、問題の奴等はだが……、

「居た」

男二人が部屋の真ん中に立っていた。

長い黒髪の男と執事と思われるじいさんである。

「ヤス」

ああ、分かってるよグレン。

物凄いオーラだ。

気持ち負けしそんくらいにな。

トレジャーハンターでは無いなこれは。

俺は気持ちを整えて一歩前に出た。

「あの」

俺はその男たちに話しかけた。

「ここではないか。いや、それとも何か足りない…」

「あの…すみません」

「最初から根本的に何かが間違っていた。いや、それこそあり得ない」

「おい！」

俺はつい黒髪長髪男に怒鳴ってしまった。

すると、そいつは俺の目を睨み付けてきた。

……体が石化したように動かない…。

それだけ、俺がビビってるってことだ。

情けないけどこいつはマジでヤバそうだ。

「何だお前たち？邪魔だ、早く立ち去れ」

やっと、俺の言葉に反応したか。

「すまない、あんたはグラティアでダバスからネックレスを持って

「った人だよな？」

「ネックレス？ああ、鎖か。が、そんなもんは持ってない」

「はあ？」

「何だこいつ、鎖だつて分かってるくせに持ってないってどういづ。…」

「ほら、今ではただの指輪だ」

黒髪長髪男は鎖と指輪を俺に別々に見せた。

「…って、ただ分けただけじゃねえか。」

「ウケでも狙ってんのかこいつ？」

「じゃあ、その指輪。実は俺の大切な物なんだ。だから、返してくれないか？」

「お前の物？……なるほど君が……」

「ん？何だ？」

「そうか、では用が済んだら返してやるっ」

「そうか……ってそれどういう事だよ！」

「聞こえなかったか？用が済んだら返してやるっと言っている」

「用って一体何だ？」

「てか何で指輪が必要なんだよ。」

「一体どれくらいかかるんだ？」

「分からない」

「はぁ?!」

駄目だ、こんな意味わかんない奴に渡したままで良いわけない。

「仕方ない、出直すぞ」

「はい、ジン様」

その時、黒髪長髪男たちは部屋から出ようとした。

「おい待てよ?!」

「だから邪魔をするな」

その時だった。

「体が…動かない…」

今度はビビリでもなんでもなく、普通に体が動かさなくなってしまった。

こいつ!何した?!

「大丈夫だ、すぐ動けるようになる」

なんなんだ!

そして黒髪長髪男は出ていった。

が、執事はドアのところで止まった。

「そうそう、動けるようになったらすぐ逃げることをおすすすめしますぞ」

そしてその言葉を言い残し去っていった。

そして、二二分後。

「はぁ……」

やっと体が動かせるようになった。

「みんな、大丈夫か？」

「…凄かったね、あの人」

サラは緊張の糸が切れたのか、地面に座り込んでしまっている。しかし、あのやろう俺の母さんの形見をどうしようってんだ。

「そういえば、あの執事が言っていたこと一体どういことなんだらうか」

俺が形見のことを考えていた時、グレンがそう言った。確かに早く逃げた方が良かったって一体…。と、その時だ。

「何だ?!」

ドアがいきなり閉まったのだ。
そして、

「地響き……いや、これは……」

何か近づいてくる感じがしたのだ。

くそっ、次から次へとなんだ!!

そして、その正体が思わぬところから現れた。

32・最悪の事態

床には魔方陣が描かれている最後の間。
そこにいきなり閉じ込められた俺たち。
そして……、

「何だこれは……」

壁から謎の物体が現れた。

何だこのロボットみたいなの…。

「これはゴーレムか」

ゴーレム？

グレンがそう言った。

「警備用か何かか？」

「警備用？何だそれ？」

「とりあえず、侵入者や邪魔者を排除するためのゴーレムかも知れないってことだ」

侵入者って……マジかよ？！

執事の早く逃げた方が良くってこういうことか。

しかし、何故だ、何故さつきは出てこなかったんだ？

「あのジンっていう人がこの部屋のシステムを制御してたのかもね」

ジン……黒髪長髪男……。
セツナの言う通りかもしれないな。
あいつならやりかねない。

「考えるのは後！今はこいつをどうにかしないと！」

カエデが戦闘モードに入っていた。
確かに、こいつにやられたら意味ないからな。
に、してもこれまたでかいな……。

ドラゴン程では無いけど……まあ三メートルぐらいか？
と、その時だ。

「な、何だ?!」

ゴーレムは部屋の真ん中に移動していきなり地面を叩き始めた。
何してんだ、こいつ？

「もしかして、地下ごと壊して私たちを生き埋めにするとか?!」

サラがそう言った。

まさか……な、……有り得るかも。

ゴーレムにより地面にはひびが入り始めていた。
これは止めないとまずいな。

「とりあえず、こいつを止めるぞ！」

俺の言葉により、皆戦闘モードに入った。

「俺が前が出る！サラ、援護を頼む！」

「分かった！」

そして、

「行くぞ！」

俺はゴーレムに向かって走った。

ゴーレムは未だに地面を叩いている。

……今だ！

「はあっ！」

俺はゴーレムの足に斬りかかったが、

「何?!」

剣を弾かれた。

ゴーレムの周りには目には見えないバリアーが張られていたのだ。すると、ゴーレムは地面を叩くのを止め、俺に目標を変えてきた。

「来たか、こつちだ！」

ゴーレムは腕を降り上げ、俺に対して降り下ろす。それを俺はバックステップでかわす。

その頃、セツナは魔術、カエデは忍術、グレンは剣で応戦してくれ

ている、が、やはりバリアーで防がれて効果がないみたいだ。
しかし、何か良い案は無いか？
このまま逃げてるわけにもいかないし。

とその時だった。

「うわっ?!」

しまった!

俺はゴーレムが地面を叩いて出来たひび割れに足が引っ掛かり転んでしまった。

やばい、このままだとゴーレムに!

しかし、その時にはもうゴーレムは俺の前で腕を上げて降り下ろそうとしていた。

…くそっ、こんなところで…。

そして、ゴーレムは腕を降り下ろした。

俺は目を閉じた。

……………あれ?何も起きない?

俺は目を開けた。

すると、

「だ、大丈夫?ヤス!」

「サラ!」

サラが俺の前に立ち、プロテクションの魔術を発動させ、ゴーレムの攻撃を受け止めていた。
しかし、負けている。

地面がかなりミシミシ言ってる。

「くっ！」

サラが苦しそうだ。

俺は一体どうすれば?!

「ううあっ！」

サラは力を振り絞りプロテクションの威力を強めた。
と、その瞬間だった。

『グウオオオオ』

ゴーレムが苦しそうに声をあげた。

何だ?何が起こったんだ?

そして次の瞬間だった。

なんとゴーレムが機能停止して俺とサラの方に倒れてきたのだ。

「やばい！」

俺とサラは走った。

が、ゴーレムが地面に倒れ込んだその時だった。

「うわっ?!」

倒れた振動と共にゴーレムは爆発した。

すると大変な事が起きた。

ゴーレムによりひびだらけになっていた床が割れて落ちたのだ。

…そう要するに、

「「うわあああああ！」」

俺とサラは巻き込まれ、下に落ちてしまった。

「ヤス！！サラー！！！！」

グレンたちの声が地下に響き渡った…。

33・二人

真っ白な世界…。

しかし、小鳥のさえずりとなだらかな川の流れる音が聴こえる…。

身体はふんわり浮き、空を飛んでいるかのように気持ちが良い…。

……俺は今どうしてこんなところにいるのだろう…。

俺は何を…してたんだっけか？

……確か…廃墟…そう…神殿の地下…で…。

……地下？

……！！！！

「はっ」

俺は目を開けた。

うっ、日差しが眩しい…。

「俺は一体……」

そこは河原だった。

俺はゆっくり寝ていた体を起こし、考えた。

……そうか、確か神殿の地下で床が落ちて……、その下に川が通っていたのか……。

「……！サラは?!」

確か一緒に落ちたはず!

急いで辺りを見回した。

すると、

「サラ!」

少し離れたところにサラは倒れていた。

俺は急いで駆け寄った。

「大丈夫か?!サラ!サラッ!」

「…ん?……ヤス?」

良かった……。

サラが目を開け、俺は安心した。
見た感じ怪我は無さそうだった。

「……ここは?」

「……わからない」

俺は周りを再度確認してから言った。

まあ、外に一度も出たことなかった俺だし、何と言っても俺の住んでる大陸じゃないからな。

とりあえず、周りは森で囲まれている。

神殿の近くなのだろうか、それとも結構流されてしまったのか……。

「少し休んだら探索しよう」

もう朝だ。

休まないと体が持たないぜ。

しかし、俺たちよく生きてたな……。

少し休んだ俺とサラは森の中に入った。

とりあえず、二人つてこともあり慎重に進んでいた。

こんなところで魔物に襲われたらやられてしまうかもしれないからな。

「みんな…大丈夫かな？」

「大丈夫だよ、あいつらは強いからな」

セツナがいるからな、それにグレンも冷静に判断できるし。

で、カエデは省略。

とまあ、あいつらは良いとして俺たちだな。

冗談抜きで今の状態じゃ辛い。

でも、もしもの事が起きたらサラだけでも守る覚悟はある。

何としてもね。

「あ！ヤス！」

その時、サラが何かを見つけ指を差していた。
俺が指差す方を見るとそこには…。

「道だな」

人が通るように整備された道があった。

「この道を辿っていけばどっか街に行けるかもしれないよ！」

サラの言う通りそうかもな。

とりあえず、森の中で迷わなくて良かった。

と、その時、俺は何かに気づいた。

こちらに何か近づいてくるような…。

「うわあ！どうしたのヤス?!」

「しっ！静かに…！」

俺はサラを引っ張り、咄嗟に草むらに隠れた。

すると、柄の悪い男と女の軍団が歩いてきたのだ。

何だ？盗賊団か何か？

「…あ、あれ？あの人どっかで見たことあったような…」

と、サラが隣で考えていた。

ん？もしかして記憶が？！

「あ、違うの。無くしてからで、見たことあるような気がしたの」
「そうか…。」

でも俺はピンとは来ないな。

悪者って感じにしか見えない。

そして、その軍団は通り過ぎていった。

「しかし、何だったんだろうなあの軍団は…」

何だか気になるが、そんなこと気にしてる場合でも無いか…。
とりあえず、まずはみんなと合流することを考えなきゃ。
と、考えてたその時だった。

「うわ〜ん！みんな〜待ってってばあ！」

今度は何だ？

盗賊軍団（？）の次は泣き声を発した女が走ってきた。

「はあ、はあ。全くもうお〜！」

その女は俺たちが隠れている草むらの前で止まって息を整えて始めた。

えっと、どうしよう？

てか、さっきの団体の仲間なのか？

「何者なのかな？」

さあな。

と、次の瞬間。

「うわっ?!」

女が叫んだ。

「……魔物だ!」

確認すると女の前には三体の魔物が現れていた。

「ヤス!」

ああ、分かってるよ!

俺たちは外に飛び出した。

「何々?!今度は何?!」

「大丈夫!魔物は任せて!」

サラがビククリしてる女に声をかけた。

「サラ!行くぜ!」

「うん!」

そして俺は剣を抜いた。

34・陽気な年上少女

「堅強の防壁、彼の者を護り給え！ープロテクション！」

「よし、くらえっ！」

魔物に襲われそうになった少女を助ける為、魔物と戦っている俺とサラ。

俺は攻撃されても大丈夫なようにサラに補助をかけてもらった後、鋭く、そして流れるように魔物を斬っていく。

「これで、最後だ！」

そして三体居た魔物も最後の一匹となり、俺はそいつを斬り裂き、魔物を全滅させた。

「ふっ、つまらぬものを斬ってしまったぜ……」

決まった……。

俺は華麗に剣を鞘にしまった。

「大丈夫だった？」

と、サラは少女に話し掛けていた。

すると、少女はサラをじろじろ見始めた。

「あれ？あなたリマーニに居たね！」

「え？」

少女の言葉に驚くサラ。

「どうやらサラには何のことだか分からないようだ。

…まさか、記憶を失う前に出会ってた重要人物だったりするのか?!」

「そういえば、あなたも彼女と一緒に居たね」

「え?俺?」

「ということとは違うか。」

「てか俺もか?」

「俺、あんたなんかと会った記憶ないぞ?」

「お客さんの顔を覚えるのは当然の事だからね」

「お客さん?」

「一体何のことやら…。」

「とその時、」

「ボス〜!何処ですか?!」

「と、ひ弱そうな声が遠くから聞こえた。

「声がかもってるな。」

「これは体型丸いな?」

「お!来たなあ〜 パシリ君」

「と、少女は手を振りながら言った。

「パシリ?」

「いやその前に、ちょっと待て、ボスって一体?!」

「あ！あれ！腿上げ！」

待て、混乱してきた。

今度は何？腿上げ？

サラ、何を言ってる……。

……………あ……。

俺は走ってきた男の顔を見て思い出した。

リマーニで芸が知らないが腿上げをしていたビバッチ似の男を……。
そう、その男が走ってきたのだ。

「そっか！さっき何か見たことあるなと思ったら腿上げの人か！」

サラはモヤモヤが晴れたのか、スッキリした表情をしていた。

しかし、俺は違う。

俺のモヤモヤは晴れない。

「なあ、ボスってる？」

俺は少女に聞いてみた。

すると、少女は笑みを浮かべながら、

「ボスはボスだよ この子達のリーダーさ」

と楽しそうに言った。

って、また待ってくれ、いろんな意味で幼く見えるあんたがボスだ
って?!

あんた一体何歳だよ?!

「いろんな意味ってどういうことよ。えっとね、私はぴっぴちの19歳だよ」

え?!19歳でボスとか何があった?!

……てか俺たちより年上だったのか…。

どんな答えにしる驚くしかないじゃないか。

「で?君たちはここで何をしてたのかな?」

年上の少女はニコニコしながら興味津々に聞いてきた。

「ん?あ、ああ、実は仲間とはぐれちゃって…」

「今はヤスと二人で仲間を捜していたところなんです」

年上と分かり、丁寧な口調に変わったサラと共に説明した。
すると、

「じゃあ!私たちについてきなさい」

と、何を思ったのか年上の少女は速攻に答えた。

「私たちは今次の街に向かっているのだから、一緒に行きましょう!お仲間さんも居るかもよ? そうね、それが良いわ!」

え?ちよ、ちよつと?!

「というわけで気を取り直して行くわよ」

そう言くと、年上の少女は一人先に歩き始めた。

てか、俺たちの意見は……。

俺はいつの間にか一緒にポツンと立っていたビバッチ似の腿上げ野郎に顔を向けた。

「え、えつと……。じゃあこっちです、行きましょう」

あんたもか……。

まあ良いけどよ。

いろんな意味で悪者には見えないし、それに街に行けるんならな。

そして俺とサラは、名前も何をやってるのかも詳しく知らない謎の団体様にお世話になることになった。

「ところで、ビバッチ、あんたの名前は？」

「ぼ、僕の事ですか?!……ヒロです」

なるほど……。素直でよろしい。

35・ルミナ!

俺とサラは今、年上少女曰くパシリ君であるヒロに仲間のもとに案内されているところである。

「なあ?」

「ん?なあに?」

俺は前でランランと歩いている年上少女に話し掛けた。

「自己紹介がまだだったな。俺はヤスだ」

「あつ、私はサラです」

いきなりではあるが、俺に続き、気づいたサラも自己紹介をした。するタイミングが分かんなかったしな。

「おお〜!私もすっかり忘れてたよ〜 私はルミナ!よろしくね」
後ろにいる俺たちにくるつと体を回してそう答えた。

「なるほど、ヤスっちとサラっちかあ よろしくね」

ん?...ヤスっち.....だと?

「サラっち.....」

ルミナの言葉にサラもきょんとしていた。

まあ俺も少し抵抗が……。

「うん！よろしくね！」

……………気に入ったんかい。
するとヒロ、いやパシリ君でいつか。

「あ、皆さん、もう皆のところに着きますよ。皆は先に休んでます」と言った。

「じゃあそこで昼食にしますか　パシリ君！よろしくう〜」

「はい！ボス！」

ルミナの命令に嬉しそうに従うパシリ君。
なんだろう、何か引つ掛かる……。
気のせいかな。

そして俺とサラは思った通り、さっき通っていった柄の悪い団体の
もとに着いた。

昼食を食べさせてもらい、今は休んでいる俺。
そついや、柄の悪い団体と言ったが実際喋ってみると人当たりが
良かった。

良くも悪くも外見だけで判断しちゃいけないってこういうことだな。
そして、さっきから謎だったこの団体。

聞いてみると、どうやら芸や演劇などの見せ物をいろんな街に回って公演する、簡単に言えば劇団みたいなもんらしい。それでルミナがそのボス。なるほどな、腿上げのところしか見たことなかったからお笑いかと思っただぜ。

「パシリ君はお笑い担当！間違っちゃいないよ」

「うわっ?!」

いきなり後ろからルミナに話し掛けられて俺はびっくりしてしまっただ。てかお笑い担当って言い切ってるよ…。

「ヒロ君の持つ唯一の腿上げは誰にも負けないわ!」

あいつ腿上げしかないのかよ?!
よくまあそれだけでやっていけるなあ。

「まあ、そんなことは置いといて!さっきは助けてくれてありがとうね!」

ルミナは俺の後ろから前に移動し、そう言った。

「良いよ、そんな礼なんて」

とその時、近くに座っていた劇団の一人の男が話し掛けてきた。

「あんた、ボスを助けたのか?そりゃあご苦労なこった!でも今度から一緒にいる時は助けなくても大丈夫だぞ!なんてっただってボス

は一人で魔物十匹をかすり傷のみで倒したぐらいだからな！」

と、酒を片手にゲラゲラ笑いながらそう言った。

てか魔物十匹を一人で？！

「こらこら、おだてても何も出ないぞ〜」

それに対してルミナが頭を掻きながら嬉しそうに答えた。
今さらだけどルミナってどんな人なのか難しいな…。

「まっ！今度から私も何かあったら一緒に戦うからよろしくね」

「お、おう。よろしくな」

俺はそう返事をする、ルミナは他の劇団員の中へと消えていった。

そういえば、ルミナは年上だけど、さん付けの方が良いのかな？

どうしても外見は俺より年下に見えるからタメ口になっちゃうんだよな。

「ヤスって年上の人でも大体タメ口じゃん」

「うわっ?!」

またまた驚いてしまった。

後ろを振り向くとサラが立っていた。

ってか、何で思ってることが?!ルミナの時も…。

「口に出てたよ?」

あつ、そういえば俺って独り言が多いってよく言われたっけか。

「そうか。じゃあ、タメ口で良いか」

「あらら、でもヤスらしいね」

サラは笑ってそう答えた。

サラもいつものグレンたちと同じ様に接しても大丈夫なんじゃないか？

「うん。まあ私は後で聞いてみるよ！」

そうか。

まああの性格だ、大丈夫だろうと俺は思うぞ。
と、サラと話していた時、

「おーい！そろそろ準備して〜！出発するよ〜」

とルミナの声が聞こえた。

そして俺たちは準備を済ませ、街へと進みだしたのだった。

35・ルミナ！（後書き）

今後、投稿がペースダウンしそうなのでご了承ください。
よろしく願います。

36・発見

時間帯は昼を過ぎているくらい。
俺たちは街に向けて出発した。

劇団員は大合唱をしながら歩いてとても賑やかである。

そんなうるさくしてたら魔物が来るんではとか思ってたんだけど意外と来ない。

人数多いし柄悪いから魔除け効果でも働いてんのかとか考えたりしてる俺。

あ、そういうえば、今向かっている街は『ラルス』というところらしい。

ルミナ曰く、街の人は皆、珍しい人たちだという…。

珍しいというのがどういふのを指すのか知らないが、言っちゃえば俺にはルミナも珍しい分類に入るんだがな。

「ん？何か言った？ヤスつち？」

んや、何も〜。

そう言うと、ルミナは追求はせず、いつも通りの口笛&スキップに戻った。こういう人って本当にいるんだな、アニメや漫画の中だけかと思ってたぜ。

と、その時、皆の足が止まった。

何だ？急にみんな止まって…。

「…誰か来るみたいです」

パシリ君がそう言った。

「……………誰か？」

「何やってんのヤスつち！隠れるよ！」

「お、おう」

俺はルミナの声に反応し草影に隠れた。

そして俺は顔を半分出した。

すると、すぐ目の前には分かれ道が見えた。

しかし、人影は見えない。

「おい、本当に来るのか？」

「あと五秒、四、三………」

三以降は頭の中で数えた俺たち。
するとどうだろう。

「あ、あれは！」

大勢の人たちが歩いてきた。

マジかよ、パシリすげえな。

「ビバッチだからね 警戒心が強いんだよ」

と、ルミナが小声で楽しそうに言った。

てかパシリ、人間として見られてくないか？

って、今はそんな事言ってる場合じゃないか。

団体が近づいてきたところで俺はその団体を確認した。
するとそいつらは、

「グロリア騎士団……」

そう、グロリア騎士団の御一行だ。

グロリア騎士団は列になって、もう一方の道に歩いていった。

「あれは、ラルスからグラティアに向かってるみたいだね」

ルミナがそう言った。

グラティアか……みんなは何処にいるのだろうか。

ラルスつてところかもしれないがグラティアに戻っててくれれば合流出来るかもしれないんだが。

騎士団を傍目に俺はそう思っていたのだがその時、俺は騎士団の中に明らか騎士では無い人たちが目に入った。

「……………え?!ま、まさか?!」

「ヤス!声がでかいよ。どうしたの?」

隣にいるサラの小声のお説教と同時に、俺はその人たちの特定が完了された。

騎士団の中に居たその人たちはなんと……、

「グレンたちだ……」

「え?何?グレンたちが居たの??」

俺の言葉に対し、サラは何処と言わんばかりに辺りを見回し始めた。

「騎士団の中に……、グレンたちが騎士団に捕まっている……」

俺はグレンたちを探すサラの横で呟いた。
それを聞いたサラの動きはピタツと止まった。
そして、騎士団に顔を向けたサラ。

「え……、嘘?!」

騎士団の中に一人の男に二人の女。
それは間違いなくグレン、カエデ、セツナであった。

「何々?あれがお仲間さん?何で捕まってるの?」

それはこっちが聞きたいよ、ルミナ。
あいつら何したんだ?

「早く助けないと!」

「ダメだよ、サラっち!今出てつてもあの人数の騎士には勝てないよ」

今にも飛び出しそうなサラを止めるルミナ。

そして、騎士団が完全に通過して俺は草影から出た。

「よし……、俺たちもグラティアに行こう」

「そうだね!みんなを助けなきゃ!」

そう言うサラも草影から出てきた。

「じゃあ、私もお供するよん」

「「え？」」

俺とサラはルミナの言葉に驚いた。

「ラルスに行かなくても良いのか？」

「良いの良いの！パシリ君がいるしね」

俺はパシリ君を見た。

柄悪のごつい大男に肩を抱かれていた。

そして顔は青ざめ、首を横にブンブン振っている。

………大丈夫か？

「大丈夫大丈夫 それに、私は困ってる人を助けずにはいられないから」

それ自分で言うのか？！

まあルミナらしいが…。

「…分かった、じゃあよろしくな」

「うんにゃ」

そして、ルミナは仲間たちを集め、軽くミーティングをした後、

「よし！それじゃあ騎士を追いかけるわよ！」

と、ルミナはやる気に満ちていた。

そしてパシリ君が率いることになった劇団とは別れ、俺たちはルミナを加えグラティアに向かった。

37・先ずは冷静に

グレンたちが騎士団に捕まっているのを見つけた俺。

そしてグラティアに向かつて進む俺たち。

いや、今は騎士団についていっていると云った方が良いだろう。

そう、俺たちの目の前には騎士団の最後尾が見えているからだ。

気づかれずにこのままついていってチャンスがあれば助け出すというのも俺は考えていたのだが、

「ヤスつち、無理は禁物だよ！」

と、ルミナに釘も打たれている。

まあ、確かに俺たちまで捕まったらもともこもないからな。

追跡を始めて結構経ったが何の変化も一向に見せず、ひたすらグラティア方面に進む騎士団。

これじゃあ手を出すことは出来ない。

そしてもうすぐグラティアだ。

「グレンたち大丈夫かな……………」

サラの心配がガンガンに伝わってくる。

そのグレンたちだが、両腕を縛られて一列に並ばされて歩かされている。

しかし、あれだな。

俺だったら大暴れものだな。

てか、グレンとセツナは分かるがカエデが静かなのが俺には考えられない。

……まあ、こんな状況で騒いでる方がおかしいか。

「お、グラティアが見えてきたよ〜」

ルミナが小声で言った。

そしてとうとうグラティアまで来てしまった。

俺たちはグラティアに騎士団が入っていくのを少し離れたところから見届けた後、続いて入った。

するとルミナは街の中を見回した後、

「ありやりや、街の人たちちよつと驚いちゃってるねえ〜」

そりゃそうだろ。

そう、ルミナの言う通り、グラティアは緊張感でいっぱいであった。なんとたつて大勢の騎士がいきなり入ってきたんだ。

それに、グラティアはグロリア騎士団に占拠されると言ってもカエデの話が正しければ過言じゃない。

まあ、住民の扱いや騎士団との関係が今どのようなものになっているのか知らないがな。

とりあえず、誰だつて驚くぞ。

そして俺たちはそのまま騎士団の後をつける。

と、やはり思った通りだ。

「城の中に入つてつたね」

「そうだな……」

サラの言葉にそう返事をした俺。

これまた立派な城の前で俺たちは止まった。

しかし一体どうしたら城に招待されんだ？俺も招待されて豪華なディナーをご馳走になりたいもんだぜ……。

とまあ、冗談はさておき……。

「はてさて、これからどうするかだ……」

グレンたちは城の中に連れていかれた。

だからといって、正面から入ろうとしても追い返されるだけ、もしくは俺たちまで捕まってしまうだろう。

とまあ、先ずはやっぱり……。

「裏口とか無いのかな？」

おっと。

その時、サラがそう言った。

「どうだろうね？探してみよっか」

するとサラとルミナは早速行動に移したのだ。

おいおい、勝手に動くなよな……。

そして探してみた結果。

「無いね」

いや、実際にはあったっちゃあったのだが、結構騎士が居て今すぐには入れそうになかったのだ。

「やっぱり無理しちゃう?」

おいおい、さっき無理するなって言ったのは何処のどいつだよ……。

「やっぱり私の柄に合わないや。無茶もしないとね」

何と言うか、ルミナは良い性格してるな、本当に。でも何故か許せてしまっただよな。

「んでどうするんだ?てか、無茶するって言っても正面から突っ込むのは嫌だぞ」

俺がそう言つと、「え?そんな正面から突っ込んだりなんかしないよ」
と、声のトーンをぶらしながら言い、その後、腕を組み考え始めたルミナ。

……こりゃ凶星だな、全く。

「あのさあ、私思っただけど……」

その時、サラが手を挙げた。

「私とヤスは神殿から流されたじゃん?だからそのことから思ったんだけど、地下水路を思い付いたの。城の下にも絶対地下水路はあるよね?」

「……そうか!地下水路!」

どっかから地下水路に入って城に侵入か……、良いかもしれないな。

「良いねそれ！じゃあ早速入り口を探そうよ」

ルミナは面白がっていた。

遊びじゃないんだからな。

「まあ、その方法は良いと思う。が、流れが流れて言いそびれてたが、先ずはどうして捕まったか聞かないか？」

すると、俺の言葉を聞いたサラとルミナは少し静かになった。熱くなっていたのが少し冷め、冷静を取り戻したのだ。

「つい熱くなっちゃった」

やれやれ。

そして騎士に話を聞いてみることにした俺たちであった。

38・機密事項？

「男一人に女二人の連中は何で捕まったのかって？」

「ああ、ちよつと興味があつてな」

城の正門に立っていた騎士にグレンたちの事を聞く俺は、こういう場合は面倒事になりそうということで、一応他人という設定で質問をしている。

そう、先ずは何故捕まったのかを聞いとかなないと後でいろいろ大変だからな。

『仲間を助けるため』だけだと理由にならないしね。

「で、何でなんだ？」

「駄目だ駄目だ。そんなことよそ者に教えると思うか？」

あつさり断られてしまった。

つたく、ケチだな。

「こつという内容は一応機密事項なんだよ、どんなにくだらなくてもな」

くだらないだと……、グレンたちはくだらない理由で捕まったってことか？

「なあ、くだらないってどついつ事だよ?!」

俺は思わず騎士に楯突いていた。

「ったく、まいったな〜……」

それに対して頭をかく騎士。

とその時、門の側に居たもう一人の騎士がいきなり、

「門を開ける」

と言った。

すると俺たちの目の前の鉄格子状の門が開いた。

「何々〜？もしかしてお城にご招待」

「そんなわけないだろ。ほら、退いてくれ」

一人ではしゃいでいるルミナに騎士が突っ込んだ。

そして俺たちは騎士の言われるままに門から退いた。

すると、

「おお〜 立派な馬だねえ〜 特に毛並みが……」

「突っ込むとこ違うだろ」

そう、俺たちの前には馬車が通り、そして城の中に入っていった。

それもこれまた立派な馬車だ。

一目でさぞや立派なお偉いさんがお乗りであろうと思っくらいにね。

「もうそんな時間か……。ほらもう帰った帰った、子どもの相手をしてるほど俺たちは暇じゃないんだ」

この騎士、今度は俺たちをガキ扱いかよ。

「じゃあ、お子ちゃま二人は置いといて、そろそろ成人を迎えるこの私に教えてよお」

すると、今度はルミナが騎士に対しありもしない色気を出そうとしながらそう言った。

てか、ルミナは俺とサラをお子ちゃま扱いか…。

ルミナだって人の事言えないぐらい…、てか俺たちより見た目は幼い方だろ！

「あのさあ？さっきからお前たち、大人をからかってんのか？そろそろ俺も怒るぞ」

すると、騎士は怒るぞと言いながらもう怒っていた。

あゝあ、ルミナのせいだ。

「むむ！それは聞き捨てならぬぞヤスつち！」

「えっと、二人とも落ち着いて…！」

俺とルミナの間に入るサラ。

その時、俺たちの前にいる騎士が怒りでイライラしていたことは言うまでもない。

「おい、どうしたんだ、何さっきから騒いでいる」

すると、先程門を開けると命令していた騎士が近づいてきた。

「まったく、このガキたちがさっき連行してきた連中のことについて聞いてきてちよつとな」

騎士が騎士に愚痴っていた。

「ああ、あれだろ？川の近くで不審な行動をしていたから捕まえた連中だろ？何か仲間を捜してるとか言ってたらしいけどな、どうなんだかな」

「「「「「……………「「「「」

愚痴った騎士も含め俺たちの時間は一瞬止まった。
今度はあっさり言っちゃったよ。

「ん？どうした？」

『機密事項』を話してしまったことにより出来たこの空気に理解が出来ない騎士。

いやいや、ごちそうさまです。

そうか、グレンたちは俺とサラを捜していてくれたのか…………。

これは助けられないわけにはいかないな。

話せば…………分からないか。

話も聞かないで捕まえてしまう騎士団だもんな。

やっぱり地下水路か…………。

「…………もう良い。持ち場に戻ろう。騎士団長様もいらっしやっただし」

「…………はあ?!今何て?!」

……皆の視線が一気に俺に集まった。

そう、俺はある言葉に対し反応し、大声を出してしまったからだ。

それは……、

「騎士団長だと……」

39・城の中へ

「ヤス？」

サラが心配そうに俺を見ているのが分かった。
が、今はそんなことに対応する余裕は無かった。

「そうか、騎士団長が……ね。……なるほど、丁度良い」

俺は心の中である決意をした。

いずれにせよ、やらなくてはいけないと考えていたことだ。

まあ、まずはグレンたちを助けて、それからチャンスがあれば
どな……。。

しかし今ここに来てるんだ、この機会を逃すわけにもいかない。

「よし、行こう」

「あ、待ってヤス！」

「何々？ 何かあるの？」

俺は城を背に歩き出した。

それに続きサラとルミナがついてくる。

「何処に行くの？ヤス？」

それはもちろん、

「地下水路の入り口を探すんだよ」

地下水路。

入り口を探すといってもそれは簡単なことだ。

グラティアの外に出て、使った水などが排水されるところが広ければ、そこから入ることも可能だし。

まあ、何と言っても、一番確実なのはやっぱりここだろ。

「はい！ここで問題　マンホールの蓋は何で丸いか知ってる？」

「まあ、一般的な答えだと正四角形は一辺に比べ、対角線の方が長いから斜めになると落ちる。正三角形でも同じで、底辺と高さでは底辺の方が長い。だからどこを測っても同じ長さの円が使われた、だろ？」

「まあ……正解だね　流石ヤスつち！」

まあ、って何だよ……。

結構上手く説明したつもりだったんだけどまだ何か足りなかったのか？

まあ、そんなことは今良いとして……、そう、俺たちは今グラティアの人气が少ない場所にあるマンホールの前に立っている。

言わなくても分かるだろうが……、

「ここから城に入り込むぞ」

俺はマンホールの蓋を外しながらそう言った。

地下水路にはマンホールを降りていくという方法を選んだのだ。

「何か緊張するね」

「何で？」

「えっ?!だ、だって城に入り込むなんて初めてだし……」

サラはルミナにそう答えた、が、俺は何か他にも理由があるような言い方をしている感じがした。

……あ。

分かった気がする……。

『れい』の件だな絶対。

てか、自分で提案しといて……。

……仕方ないな。

「じゃあ、俺から行くから次にサラ、ルミナと順についてこいよな」

「あ、えっと、分かった」

「ヤスつち、降りるとき上見ないでよね？」

はあ……はいはい。

マンホールを降りた俺たちは早速城の真下と思われる場所を想定して進み始めた。

因みには人が通るには十分過ぎるくらい広かった。ただ薄暗いっただけあって……、

「きゃあ?!」

サラは突然飛び出すコウモリに驚いていた。

「何々?サラっちはコウモリが苦手なの?」

違う。違うんだルミナ。

ただここで言うとならサラがはつき……。

「だ、大丈夫だから二人とも……。行こう」

あ、ああ、そうだな。

「んにゃ???」

ルミナは頭の上でつかい『?』を浮かばせていた。

まあ、明るいところに出たらちゃんと説明するから我慢してるよな。

とまあ、涙目で頑張るサラが可愛……。じゃなくて可哀想だから、早く入れそうな場所を探さないとな。

なるべくコウモリが反応しないように迅速かつ慎重に進む俺たちであつた。

そして、地下水路を探索すること約10分。

ガラ、ガラ、ガラ

「よいしょっと……」

俺は手をかけ、そしてマンホールから外へ出た。

「ここは……なるほどな」

そして、サラとルミナも上がってきて、俺はマンホールの蓋を閉めた。

「ここは倉庫かな？」

「いや、ガラクタ置き場だよ」

「まあそんなことはどうでも良いだろ」

とまあ、俺たちは武器などが置かれている部屋に出てきた。とりあえず、城の中で間違いなさそうだ。

「よし、上手く入り込めたな」

「それじゃあ！お仲間さんを助けにレッツラゴー」

「ル、ルミナ?!静かにしないと!」

そして、そんなこんなで城の中に連行されたグレンたちを探し始めたのだった。

40・騎士の代わりに

「さてと……」

とりあえず、俺はドアに耳を当てた。

外に誰か居るかどうかの一つの確認手段としてである。

グレンたちを助けるためにグロリアに刃向かう俺。

何だか面白くなってきたぜ。

そして、グロリアの行動の真実を暴いてみせる。

そう、さらっと言ったが、それが俺のもう一つの目的なのだ。

「……………」

とまあここら辺にしていると……、よく耳をすましドアの向こうを聞く俺、……なのだが。

「どうしたの？ヤス？」

「静かすぎる……。誰もいないのか？」

ドアの向こうは無空間が広がっているのかと思つくらい何も聞こえなかった。

騎士たちは居ないのだろうか？

「だったら出て確認してみようよ」

そう言ったルミナはドアを開けようとドアノブに手をかけていた。

「お、おい?!」

そして、何も言える間もなくルミナはドアを開けてしまった。仕方ない、何かあったら暴れるか……。

とか思いながら、俺は剣を手に取り部屋の外に出た。

「……………やっぱりな」

思った通り、騎士たちの人影が全く見当たらなかった。

「誰も居ないね?」

まあ、こつちにとつては好都合だけだな。

しかし、何故居ないかは気になるな。

……………もしかして、罠?!

「騎士団長が来てるんでしょ? だったらあれじゃない? 騎士とか城の中の人を全員を呼んで、秘密の集会が行われてたりして?」

秘密の集会って……………。

しかし、その様なことはあるのだろうか。

「まあ考えていても仕方ない。慎重に騒がず行くぞ」

「お〜!」

「……………お前のことだよ、ルミナ」

城の中の探索だが、やはり人は誰も居らずすっからかんだ。
何か調子狂うな……。

「やっぱりルミナの言う通り、大広間とかで秘密の集会が行われているのかな？」

……何か俺もそんな感じがしてきたぞ。

しかし、騎士団がここまで警備を無くすなんて……、一体どうなってるんだ？

それともやっぱり見えない何かの設備があるのか？

でもそれだったらもう騎士が駆けつけてきても良いはずだしな……
……？

「待て。何かが近づいてくる……」

「え？それって騎士?!」

俺の言葉に驚くサラ。

「いや、人ではない。足音……いや、これは……」

ウィーン。

「ウィーン?」

何だこの音……と、その時だ。

「……ロボット?」

ピカツと輝く真っ白なボディー。

なんと、俺たちの前にいきなり車輪走行のロボットが現れたのだ。

「何これ？ こんなロボット私初めて見たよ」

「ルミナ！ 静かについて言ってるだろ！」

ルミナがはしゃぎ出したのを小声必死に止めようとする俺。

ルミナはニコニコしながら舌を出し、手を合わせ謝る。

何度言ったら分かるのやら……。

……てか、城の中にこんなロボットが居るんだな、正直驚いたぜ。

とそんなことを思っていると、ロボットに動きが見られた。

それは……。

「何この戦闘モード……」

目の前のロボットは変形をし始め、体内からなんと刃物が出てきたのだ。

そして更に、こんなことまで言い出したのだ。

『シンニューシャハツケン！ ホカクセヨ！』

……………。

なるほど、騎士が居なくても良いわけだ。

つか、刃物出しとして『ホカクセヨ』ってどういう冗談だよ。

「どうしようヤス！ 見つかったよ?!」

サラは慌てながら俺にそう言った。
確かに見つかってしまったな……、でも、そうなら選択肢は一つ。

それは、

「面倒にならないうちにぶっ壊す」

俺は剣を抜いた。

「だよ〜 私もそう思ってたよ」

すると、ルミナはどこからか柄の部分が伸び縮みするハンマーを取り出した。

「ちょ、ちょっとヤス?! ルミナ?!」

慌てるサラ。

そして、

「行くぞ!」

「オツケー」

俺とルミナはロボットに襲いかかるのであった。

41・豪華な出迎え

「あちゃ〜、ちょっとやり過ぎちゃったかな？」

白いボディーから黒い煙が舞い、視界が悪い。

「俺の出番は無しかよ……」

俺は剣を鞘に仕舞い、そして肩を落とした。

何故なら……。

「だって、思ってたより弱いんだもん」

ルミナが一撃でぶっ壊してしまったからだ。

その壊れたロボットだが、見るも無惨に粉々だ。

はは、高かっただろうなこのロボット。

今の時代、ロボットなんか貴族でも簡単に買えないからな。国でやっと買えるぐらいだろ、普通に考えて。

「ねえ、ヤス？」

後ろに居たサラが話しかけてきた。

「ロボットって高いんだよね……」

ああ、その通りだ。

グロリアの街でさえ、ロボットなんか見ることは出来ない。俺は壊れたロボットの破片を見ながら言った。

「そんなロボットがたくさん居るこのお城って凄いお金持ちなんだね……」

そつだな、ロボットがたくさん居るってことは相当金……持……ち……。

……。

「はあ?!」

俺は後ろを振り返った。

そこにはサラ、そしてその奥には……。

「物凄い数だね……」

ルミナがぶつ壊したロボットと同じ形の奴が何台も居たのだ。

「おつ まだまだ居るじゃん 良かったねヤス！」

「良くねえよ！」

俺は声を張り上げた。

まてまて、高価なロボットがこんなにたくさんだと?!

いや、分かってる、この状況が結構面倒になっているってのは。

でも、ロボットが見ただけで十体以上だと?!

国、いや、グロリアと言うべきか?

どんだけの金が? いやいや、待て、これは権力の問題かもしれない。

「ちよつとヤス?!」

おっと。

俺はサラによって現実に呼び戻された。

そっだ、考えるのは後にして、今はこの状況をどう乗りきるかだ。

「どうする、ヤス……」

脆い機体とはいえロボットは十体以上。
柄じゃないが、ここはやっぱり。

「一旦、逃げた方が良さそうだな」

「え？でも、片付けないとロボットたちが騒いで騎士にバレちゃうかもよ？」

「もうバレてるだろ。そこまで騎士もバカではない」

ルミナに対して俺はそう言った。
まったく、本当スムーズに事が進まないぜ。

「サラ！ルミナ！逃げるぞ！」

そして俺たちは走り出した。

「ハアハア……」

『ホカクセヨ！ホカクセヨ。ホカク……』

「……………はあ」

俺は深呼吸をして息を落ち着かせていた。
そう、

「何とか撒いたな」

俺たちは何も考えず咄嗟に見つけた部屋に入ってロボットから逃れたのだった。

しかし、こんなことしてたらグレンたちを助け出す前に騎士たちに見つかって何もかもパーになってしまふな。
何としても……………。

「ヤス！」

「な、何だ?!」

その時、サラが大声で俺の名前を呼んだ。

「見て！」

俺はサラの指摘したところを見た。

……………?!

俺は早歩きでその場所である部屋の奥に向かった。
するとそこには……………。

「階段だ……………」

今俺たちが居るのは一階、地上だ。
そして、この階段。
要するに、

「もしかしたら、グレンたちはこの下じゃないか?!」

まず、捕まった奴らが入るのは牢屋、そして牢屋があるとすればだいたい地下であると俺は考えたからだ。

「おお 何か珍しくスムーズに事が進んじやったって感じかな？」

……はは、ルミナに凶星を突かれるとはな。

でも、まだ牢屋であって、グレンたちが居るって決まった訳ではない。

降りて確かめてみなくてはな。

「よし、降りてみるぞ」

そして俺たちは階段を降りていく。

下に降りるにつれ、一段一段の階段を降り響き渡る音が大きくなっていく。

そして、階段を降りきった俺たちの前には扉の登場だ。

「……………」

俺は無言でドアノブに手をかけた。
そして。

ガチャ。

俺は扉を開いたのだった。

42・再開

「……………」

地下に牢屋、これは結構定番であろう。

前に読んだことのあるファンタジーの小説に出てきた城の地下にも牢屋があったからな。

まあ、そんなことはどうでも良いか。

とりあえず、扉を開け中を見た結果だ。

「こりやまた、静かだねえ」

ルミナの声が響き渡る。

「ビンゴだな」

そこは地下牢であった。

滴る水滴の音が響き渡り、肌寒い。

俺たちは地下牢がある部屋に入り、扉を閉めた。

「グレンたち何処だろうね……………」

サラが辺りを見渡す。

地下牢は奥まで続いていて、結構広かった。
と、その時だ。

「ねえ！早く出しなさいよ！私たちにはやることがあんのよ…！」

奥の方から女の声がした。
つて、この声は……！

「カエデ！」

サラはそう言って奥に走り出した。

「お 見つかったのかな？」

そして、ルミナもサラを追って走り出した。
間違いなさそうだ、この声はカエデ。
何とか見つけることが出来たな。
そして、俺も二人を追って奥へ進んだ。

「こらっ！居るなら返事なさいよ！」

「はいはい、何でしょうか？盗賊女様」

「なっ？！盗賊女ですってえ？！こらっ！そのあだ名で呼ぶ……なっ……て……」

「それはそれは申し訳ありませんでした、盗賊女様」

「「「！……！」「」」

俺はとある檻の前にすっと出た。

檻の中にいる三人の表情は皆一緒に、驚いていた。
まあ、そりゃそうか。

「「ヤス!!!」」

こちら、騎士たちにバレちまうだろ。
そんな声出すなよ、グレン、セツナ。

「あ〜ん〜た〜！何処行つてたのよっ！私たち三人がどれだけ……」
……どれだけ？

「あぁ〜っ！もうめんどくさい！」

「何なんだいったい……」

カエデはそっぽ向いてしまった。
とまあ、檻の中にグレンたちが居るのを見つけた。
しかし、三人とも疲れぎみかな。
そこまでして俺たちを探してくれていたのか。

「でもいつたい、どうしてこんなところにヤスたちは居るんだ？ど
うやって入ったんだ？」

「んなことは後だ。とりあえず、早くここを脱出するぞ」

そう、今頃ロボットたちが地上で騒ぎ回り、それに気づいた騎士た
ちもそろそろ動き出すはずだからな。

「んじゃここは私が」

すると、ルミナが武器を構えた。

「ちょ、ちょっと?!」

前に居たカエデがそれを見て急いで後ろに下がった。

そして……。

「……容赦無いな」

「へへへん」

ルミナの一撃により檻に穴が開いた。
小柄のくせしてその力は侮れないな。

「おやおや? 誉めても何も出ないぞヤスっち」

はは、そうか、それは残念だ。

「ちょ、ちょっと! 危ないじゃない! てか誰?!」

つたく、相変わらずうるさいな。

「自己紹介も後だ。早くしないと騎士たちが……」

ガチャ。

その時、俺はビクツとした。
扉の方から音がしたのだ。

「…………まさか？」

俺はその方に顔を向けた。
すると…………、

「おい！お前たち！そこで何をしている！」

…………はは、やっぱりスムーズに事が進まないな。
騎士様のご登場だ。

「何よ！上手く忍び込んだんじゃないの?!」

「うるさいな…、仕方ないだろ！」

「ヤス！カエデ！今は喧嘩してる場合じゃないでしょ?!」

セツナが俺とカエデの間に入った。

「つたく、で、こういう場合はどうすんだ？」

「やっぱり戦うのか？」

「当然 気絶させてさっさと逃げよ」

ルミナ、ヤル気満々だな。

「えっと、あのさヤス…………」

グレンが申し訳なさそうに話しかけてきた。
しかし、俺は何を言いたいのか分かってきた。

「武器だろ？良いって、俺たちだけで十分だ」

そう、グレンたちは当然のことながら武器を取られている。でも、それ以前に。

「三人とも、身体がぼろぼろじゃないか。今日くらい休んどけ。魔術だって集中できないだろ。探してくれたお礼だ」

見る限り休まず探してくれてたみたいだしな。

そして、そんなことを話しているうちに騎士は一人から二人、そして知らない間に五人にまで増えていた。

「へへ！上等じゃねえか！」

俺は剣を構えた。

「暴れるぞ！」

そして、俺は騎士たちに向かって走り出した。

43・騎士団長

「はあっ！」

「ぐはあ?!」

まず一人。

「えいつ」

「んがつ?!」

地面に叩きつけられる騎士。

「二人目完了」

「やるな、ルミナ」

騎士に見つかってしまった俺たち。

グレンたちを見つければ、城から脱出しようとした時だ。

俺たちは騎士と戦っていた。

しかし、弱いなこいつら……。

俺とルミナで騎士二人を早々撃沈。

そして、これを見た残りの騎士は一步後ろに下がった。

なんだなんだ？

グロリア騎士はこんなもんなのか？

笑ってしまうな。

「ええい！怯むな！侵入者を捕獲だ！」

すると、三人のうち二人が襲いかかってきた。ふん、逃げなかったのは誉めてやる、だが……。

「隙がありすぎだ！」

俺は騎士の攻撃を容易くかわし、

「うぐっ?!」

首の後ろを剣の鞘で殴り気絶させた。そして、もう一人の騎士だが……。

「甘い甘い」

ルミナは倒れた騎士の背中に片足を乗せて勝利のポーズを決めていた。

劇団員の言う通り、やっぱり団長さんは強いな。

……ちとと、

「さあ、あとはあんなだけだ」

俺は残った騎士に剣を向けた。

「おのれ！ここは城の中だぞ?!そんな余裕の態度をとってられるのも今のうちだ！」

騎士は震えた腕で剣を構え、そう言った。

………何かみっともないな。

まあ、騎士の言う通り、気持ちの立場逆転してる感じするな。しかし、

「……ここは通らせてもらうぞー！」

そう、こんなところで捕まってるられない。

そして、俺は騎士に斬りかかった。

と、その時だ。

「?!」

地下牢に金属音が響き渡った。

それは目の前に居た騎士の剣、ましてや鎧兜を擦れた音ではない。

俺の剣とまた違う他人の剣が交えた時に発した音だった。

俺はその剣の持ち手を見た。

「この騒ぎはいつたい何なんだ……」

「?!」

俺は驚きの余りに声が出なかった。

……へへ、まさかこんなところで……。

俺はそう思いながら大きく二三歩後ろに下がった。

何故かと言つと、そこには……。

「き、騎士団長様?!」

そう、騎士の言葉通り、そこには正真正銘グロリア騎士団の団長が居たのだった。

「やれやれ、酷いやられようだな」

「申し訳ありません……騎士団長様……」

そう騎士に言った騎士団長は剣を鞘に戻し、俺たちに顔を向けた。

「……………」

しかし、視線だけは俺だけに向いているというのは分かっていた。そして、騎士団長は口を開けた。

「ヤス！」

物凄い声量であった。

俺は久しぶりに聞いた声にビクツと身体を震わせた。

「…………あれ？何でヤスの名前を？」

後ろに居るサラがぼそつとそう言ったのを俺は聞こえていた。そして俺は一步前に出てこう言ったのだった。

「久しぶりだな……父さん」

その場が、凍りついた。

「おう、久しぶりだな」

俺の言葉に返事をする騎士団長。
その後、驚きの声が沸き上がったことは言うまでもない。

グレンたちを含めた俺たちは、騎士団長に案内され、とある一室に連れてこられた。

そこはとても豪華な部屋だった。
ベットもあるし客間か何かかな？
すると、

「初めまして、グロリア騎士団団長のジークだ。兼ねてヤスの父でもある」

騎士団長はそう皆に挨拶をして、

「いや、すまなかった！うちの騎士が迷惑かけたな」

と、騎士団長はそう言ってグレンたちに頭を下げた。
ふん、父さんも頭下げんだな。

「い、いえ。気にしないでください」

おい、遠慮しなくていいぞグレン。
お前は被害者なんだからな。
俺はグレンにそうテレパシーで伝えた。
届くはずはないけどな。

「お前たちは解放する。まあ今日はここでゆっくり休んでいってくれ。ヤスの面倒を見てくれたお礼も兼ねてな」

「おい、なんだよそれ」

父さんの言葉に反応する俺。

「まったく、ガキ扱いすんなよな。」

と、その時、一人の騎士がやってきて、騎士団長に何か用件を伝えていた。
すると、

「すまん、ちょっと用事が出来たんで行ってくるわ」

と言って部屋を出ようとした。

「あ、父さん！」

「あ、そうそう」

反射的に言った俺と父さんの声が重なった。
顔が合った俺は、先にどうぞと父さんに譲った。

「ヤス、あとで団長室まで来てくれ。話がある」

父さんは真面目な表情でそう言った。

俺は「分かった」と言い、そのまま俺は話をせず父さんを行かせた。

理由は簡単だ。

俺も同じ用件だったからな。

父さんが出ていった後、俺は深い溜め息をつきながら、部屋のソファに腰を掛けた。

44・思い返す

俺は今、城の廊下に居る。

そんな俺は、少し落ち着かなく、城の真ん中にある中庭を見ながら歩いていた。

見てるだけで心が安らぐそんな感じがする。

そうだ。

さっき部屋であったことを軽く思い返してみよう。

俺は何故かぱつとそんなことを思った。

そして、なんの理由もなく思い返すのだった。

騎士団長…、父さんが部屋を出ていった後、とりあえず俺たちは俺たちの、グレンたちはグレンたちの神殿で離ればなれになってしまった後のことについて話していた。

とまあ、俺たちのことは良いとしてグレンたちのことだ。

ゴーレムによって神殿から俺とサラが落ちた後、そのゴーレムはバラバラになり閉まっていたドアが開いたらしい。

何故ゴーレムがいきなり機能停止したかはグレンたちも分からないみたいだ。

偶然なのか、それとも知らないうちに弱点をついていたのか……。とまあその後、グレンたちは俺とサラが川に落ちたのを確認して、すぐさま神殿を出て川の流れに沿って、一晩休まずに 捜してくれていたみたいだ。

ドラゴンとの戦闘後で休みなしだったってのに、本当に感謝だ。

そして、俺たちを捜していた時に、偶然通りかかった騎士たちに不審者として捕まってしまった訳か。
つたく、理不尽にも程があるよな。
父さんは騎士たちをちゃんと指導してんのか？

「……………」

俺は未だに中庭を眺めながら歩いていた。

「騎士たちの指導か……………」

そう思った俺。

しかし、そこから俺はもっと重要な事を考えていた。

それは、グロリア騎士団は何を目的に世界各地であんな奴隷のように街や村の住人たちを扱っているのかだ？

いや、まだ世界各地とは決まったわけではない。

しかし、少なくともグレンの村であるアペリエであったこと。

そしてカエデから聞いたグラティアのこと。

そう、今俺が居るこの城がグラティアではなくグロリア出身の奴がトップに居ること。

極めつけは、帝都グロリアではそのようなことが行われているという情報は隠され、グロリアのお陰で世界は豊かになっていると教えられていたこと。

「……………」

これは、何としても父さん…、いや、騎士団長に聞き確かめなくてはならないとアペリエの事件の時から考えていた。
そして、それが今。
その時が来たのだ。

「……よし！」

俺は気合いを入れ直した。
そして、俺は城の廊下を進む。

……のだが、

「……………」

すぐ俺は立ち止まってしまった。
何故かというところ……、

「騎士団長の部屋って……何処だ？」

肝心なところを聞き忘れていた。
どうしよう、とりあえず誰かに聞くか……。
と、考えていたその時だ。

「？」

俺の後ろに誰かが来たのを感じた。
そして、

「ちょっと待って」

と誰かが俺を呼び止めたのだった。
俺はその正体を確かめるべく振り返った。

すると、そこには一人の女騎士が膝に手をついて立っていた。
どうやら、走って来たみたいだ。

「えっと何だ？」

「ヤス……だよね？」

すると、女騎士はそう言った。

「そう…だけど？」

俺はそう答えた。
てか誰だ？

こんな可愛い娘が知り合いだったら分かるはずなんだけどな。
もしかして、父さんが俺のことを言いふらしているのか？

「え？もしかして私のこと覚えてないの?!」

と、女騎士は血相を変えてそう言った。

……覚えてないのって言われてもなあ…。

俺は記憶の中を一生懸命思い返すが、やっぱり覚えていなかった。

「そうか……。まあ仕方ないか」

「えっと……？」

女騎士は肩を落としていた。

「小さいときに一回一緒に遊んだじゃん？」

そう女騎士言った。

えっと…、やっぱり思い出せない……。

「まあ小さかったからね……。そうか、忘れちゃったか……。」

……何だろう。

俺は変な感覚に陥っていた。

と、その時、

「しかし、まさかヤスが騎士団長様の息子だったとはね、聞いた時は耳を疑ったよ！」

と、女騎士は驚いていた。

えっと、一人で盛り上がってる中悪いんだけど……。

「ああ、ごめんごめん、覚えてないんだもんね……。」

その時、俺は女騎士の表情がとても寂しそうな表情をしていたのをじっと見ていた。

そう、何か大切な約束を友人に忘れられてしまった時の様な表情を……ね。

45・やるべきこと

俺は今、アーシャに騎士団長の執務室に案内されているところである。

父さんに呼ばれたは良いが、場所が分からなかったので、そのことを伝えたら快く案内してくれたのである。

あ、アーシャってのは突然現れた女騎士の名前だ。

しかし、名前を聞いても記憶に無い。

まあいろんな奴と遊んでたからな。

しかも、アーシャとは一回遊んだだけっていうし、申し訳ないけど覚えてなくて当然かも。

しかし、あんな表情をされてしまうと何か責任感じちゃうな……。

まあ今はそんな表情はどっかにすっ飛んでいるがな。

でも何故だろう。

知らないはずなのに実は、一目見た時から懐かしいという感じがしていたのだった。

あの変な感覚は一体……。

「ん？何か言った？」

「あ、いや、別に」

因みに、アーシャは俺と同じ年みたいだ。

ってか、同じ年で騎士やってるとか驚きだ。

何だか俺も負けられないな。

「あ、そういえばさあ」

「何だ？」

そう聞くとアーシャは、

「何でこんなところに居るの？グロリアに居たんじゃないの？」

と、そう聞いてきた。

俺は苦笑し一回溜め息を吐いていた。

それを聞いてきたかあ……。

「ああ……えつと、話せば長くなるぞ？」

「じゃあ簡潔にお願いね」

「……………」

ニコツと微笑むアーシャに何も言えない俺。

そして俺はどうにか上手くまとめながら簡単に説明をしようとするのだった。

「なるほど……………」

俺は何とか上手く説明を終えていた。

ふう、我ながら上出来だ。

伝えた内容は母さんの形見のこと、そしてサラの記憶のことが主だ。

因みに、グロリア騎士団がらみの内容はなるべく避けて説明をしていた。

するとアーシャは、

「何だかどつかの物語の内容を聞かされてるみたいだったよ。物凄い体験談だね」

と、言った。

はは、そりゃどうも。

しかし、アーシャの言う通りだ。

俺は物凄い体験をしてきたんだな。
改めてそう思ったよ。

「まあ、お互いに頑張ろっ！ヤスはヤスのやるべきことを。そして、私も私のやるべきことをね」

アーシャはガッツポーズを見せていた。

「ん？アーシャは何を頑張るんだ？」

「私？」

するとアーシャは腕を組み考え出した。って今考えるのかよ。

「……えっと、私はとりあえず、精神的そして肉体的にも強くなることを……かな？」

強くなる……かあ。まあ騎士だし大事なことだよな。

「そして……」

ん？そして？

するとアーシャは立ち止まり中庭に顔を向けながら、

「自分が正しいと思った道を進んでいけるくらい強くなること、かな？」

と、さつきまでの元気な声から一変、気持ち小さな声でそう言った。自分が正しいと思った道……。

アーシャは中庭を向いたまま動かないでいる。

俺はそんなアーシャを心配し声をかけようとしたが、その瞬間、

「あ、何か格好つけすぎかな？」

と言い、少し微笑んですぐにまた歩きだした。

あのアーシャの表情。

見ると、これまた訳ありそうだな、と、俺は思ったが追求は何となくしなかった。

そして、なんだかんだで騎士団長の執務室前に到着した。

何かここまで来るまで長かったな……。

と、その時、アーシャはドアをノックし、

「アーシャです。騎士団長様、ヤス様をお連れしました」

と、先程のアーシャとは別人の様な対応をした。ちゃんと騎士らしいところもあるんだな。俺がそう感心していると、執務室の中から、

「入っつていいぞ」

と、父さんからの返事が返ってきた。うわ、やっぱり緊張してきた。

「大丈夫？」

緊張してる俺に気づいたアーシャが声をかけてきた。

それに対し俺は笑顔を作り、答えた。

「つたく、俺は何緊張してんだか。」

これじゃあアーシャとの『自分のやるべきことを頑張る』という約束を破ってしまうじゃないか。

と、俺は自分にそう言い聞かせた。そして、

「失礼します」

と、俺はそう言い、ドアノブをひねりドアを開け、中に入るのだった。

46・執務室にて

カチ、カチ、カチ。

振り子時計の音が執務室に響き渡る。

とても重い空気だ。

俺の目の前には父さんが机の椅子に座っている。

因みにアーシヤは部屋には居ない。

俺と父さん一対一って訳だ。

そしてそのせいか、父さんだがサラたち仲間と一緒に居た時、そう、さっきまでの父さんとは雰囲気が違う。さっきまでの父さんとは無表情でじっと俺を見ている。

要するにあれだ、これは怒っているみたいだな……。そして、父さんとの話が始まる。

という訳で、まず父さんから怒っている要因その一だ。

「ヤス、何故帝都の外に出た。話によると試験をすっぱかしてのとみたいじゃないか」

帝都無断外出ってか？

小さい時から言われてきた父さんとの約束である。

しかし、これにはれっきとした理由がある。

形見を目の前で奪われたんだ、黙ってみてるなんてそんなこと出来ないだろ。

と、俺はその事を父さんに説明をした。

もちろん、勝手に出ていったことも謝りはした。

「そうか、そんなことがあったのか」

そうなんだよ、まさか盗まれるとは思ってなかったしな。
分かってくれたのか？

「それで、ちゃんと形見……指輪は取り返せたのか？」

「う……、それは……」

俺は、父さんのその問いに黙ってしまった。
すると、

「まさか……、まだ他所の者の手の中なのか?!」

と、父さんはいきなり机をバン！と叩き、体を机から前に乗り出し
ながら大声でそう言った。

そして、我に帰った父さんは、驚いた俺の表情が目に入ったのか、
一回咳をして元の状態に戻った。

形見は今、ジンとかいう男の手に渡ってしまっている。
俺はその事も父さんに伝えた。
すると父さんは目を丸くして、

「……………?!」

と、何か知ってるんじゃないかと思わせる様な表情をした。

「父さん知ってるのか?!」

俺はすかさずジンのことを聞いた。

「いや、知らないんだが、ちょっとな」

父さんは、はぐらかす様な口振りだった。
まだ何か父さんは知ってるのではないか？
そう思った俺はさらに追求しようとした。
しかし、ワンテンポ遅れた。

「ヤス、もう指輪のことは気にするな。俺と騎士たちで何とかしておくから」

と、言われてしまった。

「いや、形見は俺がちゃんと……」

「ヤス！」

父さんの声が響く。

そして再び、振り子時計だけが部屋の中で音を奏で始めた。そしてその音を味わう暇なく、

「ヤス、お前はもう帝都に戻っていつもの生活に戻るんだ」

と、振り子時計の音に割り込むかのように父さんはそう言った。
てかまで、帝都に戻れだと……。

「何だよ……その冗談……」

俺は堪えきれず声を漏らした。

「お前は騎士になるんだろ？ だったら戻って道場で修行を積むんだ」

.....。
そう、俺はグロリア騎士団に入りたいと思っていたのだった。
しかし、今では…。

「今の騎士団には入りたいとは思わない…」

この時、俺は父さんに反抗の目をしていただろう。

「父さん、グロリア騎士団は今、何をしているんだ」

俺は流れるにその話を持ち出した。
すると父さんは、

「何を言っているんだ？」

と、しらを切った。

「俺は帝都の外に出て産まれて初めて他の村や街を見た。しかし、
そこでは帝都では知ることの無かった光景を見て、知った。なあ、
騎士団は何の目的で動いてるんだ?!」

俺は父さん、いや、騎士団長にそう問うた。

すると、騎士団長は溜め息をして、

「そうか、見てしまったか」

と、言ったのだった。

すると騎士団長は席を立って、窓際に移動し、外を見だした。

「あれは仕方なかったのだ」

騎士団長はそのまま外を見ながらそう言った。

47・夕日に染まる城

「この世界『アレテイヤ』は大不況から力を合わせ、豊かな世界を手にいれた。そして、その後グロリアを中心に安定を築き上げているのは事実だ」

窓から入ってきた夕日の光が、騎士団長を照らしている。

「でも、あれが騎士のやるべき行為なのか？…っつか、世界の安定とか言ってるけど、アペリエの村は相当生活が厳しそうだったぜ」

「豊かさを手に入れるのに犠牲は不可欠だ」

「へっ、豊かさとか言ってる、本当は違う目的なんだろう？」

すると、騎士団長は窓の外から俺に目を向ける方向を変えた。そして、溜め息。

「どつやら話にならないようだな」

そう騎士団長は言った後、椅子に座った。

その台詞、父さんじゃなかったらこつちから言ってたぜ。すると、

「ヤス、もう疲れただろ。城の無断侵入の件もあったが、これはもう良い。だから、今日は休んで俺と一緒に帝都に戻ろう」

と、騎士団長はそう言った。

グロリア騎士団の目的、どうしても教えてはもらえなさそうだ。
父さん、一体あんたは何がしたいんだ。
帝都で捏造をしてまで何がやりたいんだ。

……頭が痛くなってきた。
俺は……、

「俺は戻らない、いや、戻れない」

騎士団長、いや、今度は父さんにそう言った。

「どうしてだ、ヤス」

「俺にはやらなければいけないことがあるんだ。サラとの約束がね」

「……ん？サラだと？」

すると、父さんはサラという言葉に反応した。
今度は何なんだ？

「いや……、知り合いの名前だったからついな」

……本当にそれだけなのだろうか。

「それで、お前はその約束を果たさない限り帝都には戻らないというのか？」

「ああ、サラの記憶を回復させるっていう旅がまだ途中なんだ」

「………何?!記憶喪失?!」

父さんはサラが記憶喪失と知り、こっちがびっくりするぐらい物凄く驚いていた。

……何だか、今日の父さん変だな……。

と、その父さんだが、何か考えているのが分かった。

そして、少し間が空いた後、父さんは何を思ったのか、

「それじゃあ、その少女も連れて帰ると良い。俺が帝都で良い医者を紹介しよう」

と、言ったのだった。

医者かあ……。

確かに帝都には最高の腕を持った医者が居ると聞いたな。まあ俺には縁の無い話だったけど。

……。

「……いや、それでも俺は帰らない」

「……お前」

俺は断った。

「まあ、もう部屋に戻れ。明日の朝返事を聞こうではないか。……
良い返事を期待してるぞ、ヤス」

俺はその言葉に一礼をし、騎士団長の執務室から出た。

「……」

皆が待つ部屋に戻る俺。

その時、俺は歩きながら何故父さんの最後の提案を断ったのか考えていた。

いや、何故だか分かっていたのだ。

それは、嫌な予感がしたからだ。

しかし、何故嫌な予感がしたのだろうと気持ちが悪かったのだ。

「……………疲れてるせいかな……………」

と、その時、

「あ、アーシャ……………」

俺の目の前にアーシャが立っていた。

「ヤス？どうかした？顔色悪いよ？」

ああ、気持ちが悪いだよ……………。

俺は耐えきれず、サラとの約束のこと、しかし帝都に帰れと言われたことをアーシャに聞いてもらった。

「……………そうか、それだと無理矢理にも帝都に帰らされそうな感じだね」

そうなんだよな、一体どうすれば……………。

「……よし、分かった！」

……何だ？

アーシャはいきなり、俺の側で何かを思い付いたかのような表情をしてそう言った。

「ヤス、今日は明日に備えてゆっくり休んで！」

「何だよ、急に」

すると、アーシャ笑顔を見せ、俺の耳元で、

「そうだなあ。じゃあ夜中の二時、要するに明日の午前二時にヤスたちの部屋に行くから、それまでのお楽しみ」

と、ささやく様にそう言った。

……何で隠して言うんだよ。

俺はアーシャに詳しく聞こうとしたが、

「……………居ない」

さっきまで側に居たアーシャがもう居なかった。

あいつ、いつの間にな……。

「はあ、ゆっくり休めか」

そして俺は、考えることを止め、仲間が居る部屋へと再び戻るのがた。

中庭の木に集まってきていると思われる、小鳥たちの騒がしい鳴き
声を聞きながらね。

48・今後の計画

「えっと……」

父さんとの話を終え、仲間が居る部屋に戻った俺だが、

「寝ちゃったのか」

「うん、相当疲れてたみたいだね」

俺の言葉に微笑んで答えたサラ。

そう、グレンたちは各自ソファやベッドで眠っていたのだった。

「サラは大丈夫なのか？」

俺はそうサラに聞いた。

するとサラは、声にはせず頷いて答えたのだった。
しかしまあ、

「グレンたち三人はともかく、ルミナもぐっすり眠りすぎだろ……」

「まあ、ルミナにも私たちと会う前にいろいろあったかもしれないよ?。」

まあ、ルミナとは昼にあったからな。

しかし、本当にぐっすり眠っている。

「…ヤスも少し休んだら?夕食までまだ時間あるし」

サラは、俺の状態を察知したのか、休むことを勧めてきた。それと、サラの話によると、俺が居ない間に城の人が夕食の時間等を報告に来たそうだ。

なるほど、まだ時間があるとはそういうことか。

「そうか……、じゃあ俺も少し休ませてもらおうかな」

「うん。じゃあ、時間になったら起こすからね」

そして俺は、サラの言葉に甘え、ベッドで横になった。

嫌なことや悲しいこと等があった時、寝ると結構和らぐのは俺だけではないだろう。

俺はそれを期待して、目を閉じて眠りにつくのであった。

その後だが、俺たちはサラに起こされ、生活に不可欠な食事、その後は風呂などを済まし、今は部屋でまったりしているところだった。因みに気分は少しは楽になっていた。

「それにしても食事は豪華だったねえ」

ルミナが椅子に座り、足をぶらぶらさせながらそう言っていた。

「そしてあの大浴場！私あんなでっかいお風呂初めてだよ」

「確かに、私もあんなお風呂初めてで驚いたわ」

「でしょでしょ？」

ルミナの言葉に対してセツナが反応した。

「ねえねえ そう思うでしょ？お嬢さん？」

「……………つて、私?!」

すると、ルミナはカエデにいきなり話をふった。

しかしカエデは、「そうかもね」と明らかめんどくさそうに返答して、気持ちが入ってないのが感じられた。

「こら〜 何だその返事は、少女よ!」

「少女つて、私にはカエデ……………つて、こら!やめなさいよ!」

カエデはルミナに抱きつかれていて、無理矢理引き離そうとしていた。

「……………なるほど」

「ん?どうしたのヤス？」

「サラ、これが『ガールズトーク』というものが」

「……………。う〜ん……………確かに『ガールズトーク』だけど、何かが少し違うと思う……………」

「そうなのか？」

まあなんとなく思っただけで、実際はどうでもいいんだけどな……………

……っつて、

「あ

「……あ？」

いきなりの俺の言葉に対してサラが反応した。

「忘れてた」

そう、俺はとても大切なことを言い忘れていた。
それは、

「午前二時……」

アーシャに楽しみにしててねと言われた謎の計画だ。

俺は思考を回転させ、執務室しつであったこと、アーシャのことと、午前二時計画（仮）のことを、盛り上がっているところすまないが皆を集め、話した。

「なるほど、このままだとヤスは帝都に帰らなければいけないがね」

グレンは冷静にそう言った。

「ああ、でも俺は帰るわけにはいかない。サラの記憶のことがあるからな」

まあ、騎士団のこともまだあるけど。

と、その時、部屋の中が異様な雰囲気になっていたのを感じた。

「ねえ、サラの記憶って何？」

すると、カエデがそう質問した。

因みにセツナとルミナもカエデと同じで俺を見ていた。

「そうか、言っただけだったな」

「待つてヤス、……私が自分で説明する」

そして、サラはカエデたちに自分の記憶喪失について説明をした。

「そうなんだ……、そんな大変なことに……」

カエデ、セツナ、ルミナは初めて聞いたサラの事情に驚いていた。

「ごめんなさい、みんなに心配かけたくなくて言わなかったの……」

サラはカエデたちに謝っていた。

「……それで、ヤスはサラの記憶を戻す旅を続けるため、帝都には帰れないと」

セツナは俺の言いたいことを上手くまとめていた。

「ああ、そしてそこでだ」

「アーシャって言う騎士が、午前二時に部屋に来るって言うやつか……」

「ああ、どうやら何か考えがあるらしいんだ」

俺はグレンの言葉に対してそう答えた。

あの話の流れからすると、俺が帰らなくて済む作戦が思い付いたみたいだったからな。

「とりあえずアーシャを信じて、準備万端で午前二時を迎えてくれないか」

すると、皆は頷いてくれた。

そして、どんな作戦かは分からないがアーシャの考えに賭け、俺たちは午前二時に向けて準備をするのだった。

49・隠し通路

トントン。

ドアをノックする音が真夜中の部屋に響き渡る。

ソファアールから腰を上げた俺は、ドアを開けた。

「どうも〜こんばんは。とりあえず中に入れてもらっね」

小声でもよく聞こえる。

そう、ただいまの時間午前二時。

約束通り、アーシャが部屋にやって来たのだった。

部屋に入り、皆に軽く自己紹介をしたアーシャ。

そして、

「早速だけど、話は聞いてるよね？」

「ああそれなら、全く内容が分からない謎の計画を俺がちゃんと伝えたぜ？」

「う、ごめんごめん」

アーシャは頭を掻きながら謝った。

そして、一回咳払いをして、

「それじゃあ、簡単にちゃんと説明するね」

と言った。

アーシャの思い付いた計画。
それは、

「隠し通路を通って城から脱出してもらいます！」

「隠し通路？」

アーシャはどや顔をしていた。

…えっと、確かに簡単に説明したな。
んで、隠し通路だって？

この城にはそんなものがあるのか。

「隠し通路だけあって、上の人たちは知らない通路なんだ」

へえー。

…って、それだったら、俺たちが侵入するために使った地下水路
を使って脱出しても良いんじゃないのか？

「あゝ、ダメダメ。実はあそこも侵入者対策がされてるの。そこだと
すぐバレちゃうよ」

「マジか？あゝ、だから警備ロボットがあんなに集まってきたのか」

「……ってそこから入ってきたの?!」

驚くアーシャ。

因みに俺たちが侵入した時は、やはり騎士団長の演説中だったみたいだ。

とまあ、今そんなこと考えてる時じゃないか。

「今この静まり返った城だったら警備は薄い。だからこの時間帯ってわけだな」

「そついうこと！」

「だったら早くその隠し通路を使って、城の外へ出ようぜ」

「準備は良いみたいだね。じゃあ周りに感づかれないように、静かに私についてきて！」

というわけで、午前二時計画開始だ。

アーシャに案内され、真夜中の城の廊下を出来るだけ物音を立てずに進む俺たち。

目的の隠し通路に向かって一直線だ。

その隠し通路だが、アーシャを含む一部の騎士たちで勝手に作ったもので、お偉いさんにバレないように城の外へ出る為だそうだ。

城の外には自由に出入りができないのが現状らしく、それを突破する隠し通路。

因みに、外へ何しに行くのかと聞くと「いろいろあるのよ」とはぐらかされた。

説明がめんどくさかったのか、それとも人には言えないことでもしてるのか。

とまあそんなこと考えてるうちに目的の隠し通路に到着したようだ。城の端のいかにも人があまり行き来しなさそうな場所。

俺たちの目の前には壁が広がっている。

「さてと、ここをこうしてっ……」

到着して早速、アーシャは壁を触り始めた。
するとどうだろう。

「ここだよ」

壁が動いて、奥には人が一人歩けるぐらいの幅の道が現れた。

「ここを通っていけばグラティアの街の門付近に出れるよ」

しかし、こんな道よく作れたな。

「ああ、そこら辺はスルーね。いろいろと大変だから」

いろいろ……と？

……まあ良いけど。

「というわけで、一番貰った」

すると、いきなりルミナが隠し通路を走って行ってしまった。

おいおい、勝手に動くなよ……。

「ったく。じゃあ私も先に行くわね」

そして、そう言ったカエデが後に続いた。

その後は何も言わずアーシャに一礼をしたセツナとグレンが順に進み始めた。

「じゃあヤス、私も先に行くね」

そしてサラも皆の後を追っていった。

残りは俺だけ。

そして俺は進む前に、アーシャに聞くのだった。

「何で俺たちの為にここまでしてくれたんだ？」

すると、アーシャは少し間を開けて、

「……ヤスにはヤスの信念を貫き通してもらいたかったから」

と言った。

信念……、自分が正しいと思ったことが……。

「そして、今の私の行為も正しいと思った行為」

「……アーシャ」

「……って、こんなことしてる場合じゃないよ！ほら、早く行かないと脱出出来なくなっちゃうかもよ？」

そう言ったアーシャは俺を隠し通路へと肩を押した。

俺は振り返り、

「ありがとつな、アーシャ。いつか時間がある時にでもこのお礼はちゃんとするから」

と感謝の意を表した。

「うん！その時までには何か考えとくよ！そうだなあ、私には手が出せない物とか……」

「おいおい」

満面の笑みを浮かべるアーシャ。

その笑みに俺も笑う。

そして、俺は「じゃあな」と別れの挨拶をし、手を振るアーシャを背に皆を追い、隠し通路を走って進みだした。

何だか最後までアーシャにはすまなかった。

アーシャか……。

「さっきの言葉……冗談だよな……」

とまあ、そんなこんなで城から脱出するのだった。

50・謎の生物

「よいしょっ…」

城の外に到着つと。

出てきた所はアーシャの言った通り、グラティアの門付近の壁であった。

俺は最後ということ、バレないように壁を閉める。

しかしまあ、見ただけじゃあ本当分らないな、この隠し通路。

「遅かったね、ヤス 待ちくたびれたよ」

「脱出したいと言つてた張本人のくせに、本当呑気ね」

ルミナはそう言った後、カエデが俺に対して愚痴っていた。

俺は軽く謝って、その場を軽く流した。

俺たちは門に近付き、辺りを見やる。

……門番は居ないみたいだな。

「これもアーシャの狙いだったりしてね」

グレンはそう言った。

本当、その通りかもな。

そして、ためらうことなくグラティアから俺たちは出ていった。

少し離れたリマーニ方面の街道。

全力疾走で逃げてきただけあって、俺たちは一息入れることにした。

さてと、とりあえず、この後どうするか……。

「別の大陸に行くのはどうかしら？」

すると、セツナがそう提案した。

てかセツナ、グラティアに残らなくて大丈夫なのか？

道場とかあるのに……。

「ああ、修行の一環と考えれば大丈夫よ。それに……」

そう言ったセツナの視線は微かにサラに向いていたのが俺には分かった。

「まあ、そういうことだから、気にしないで」

察したのか、セツナは微笑みながら俺にそう言ったのだった。

まあ良いなら良いけどな。

とまあ、話を戻して……。

確かに、この大陸に居たら捜しに来るかもしれない騎士たちに見つかって、城に戻されてしまつかもしれないからな。

「でも、今は夜中。大陸を渡ると言っても船はこの時間は出てないし……」

そこに、グレンの正論が唱えられた。

そうだよな、定期便に夜中の便は無いもんなあ。

「しかし、だからと言って、朝まで待つてると言っても騎士に捕まってしまうかもしれないし……、難しいね」

グレンも俺と同じことを思っていた。
船かぁ………って、ちょっと待て。

「じいさんから貰った船があるじゃないか!」「ゲンさんから借りた船はどう?!」

っと……、俺とサラの発言が重なった。
すると、カエデは俺たちの言葉に反応した。

「何々?あなたたち船持つてるの?」

「ん?ああ、誰かさんが船を盗んでいってくれたお陰でな」

俺は、カエデの言葉に突っ掛かり、カエデの表情をムツとさせた。
てか、カエデが盗んだ船はどうしたんだよ?

「船?ああ、陸地に降りた後、行方は分からないわ。多分、どっか海に流されちゃったんじゃない?」

おいおい、流されちゃったんじゃない………って。
リマーニの船乗りたち、同情するよ………。

「しかしまあ、船があつて良かったじゃない。じゃあ早速………」
「まあ、船は壊れてるんだけどな」

「………はあ?!」

カエデの言葉の途中に割って入った俺はそう言った。
そう、この大陸に来たとき、魔物に襲われて着陸に失敗し、浜に突
っ込んでしまった時のあれだ。

「でも、船は壊れてても、隠れるには良いかも」
なるほど、そうかもな。

その後、サラの言葉にそう思った俺は、すかさず、船のところに行
こうと皆に提案した。
そして、行く宛もない俺たちは反対する人も居なくヒドラの洞窟を
通って向かうことにした。

そして、洞窟の入り口に到着した時だ。

「なあ……、何だあれ？」

「さ、さあ……」

俺とサラ以外の仲間も分からない。
宙に浮かぶ謎の物体、いや、生き物……か？

「気持ち悪いな……」

俺たちの前には謎の生物が洞窟の入り口を塞いでいたのだった。おいおい、これじゃあ先に進めないじゃないか。

「何言ってるのよ。こんな奴、追っ払えば良いで…しよっ！」

すると、カエデは謎の生物に対してくなくいを投げた。

まったく、無理矢理だな。

とまあカエデ、早くやっちゃってくれ。

「……あれ？」

ん？どうした？早く追っ払ってくれよ。

「当たらなかった」

「…何が？」

「くなくい」

見ると、くなくいは謎の生物の奥の岩壁に刺さっていた。

謎の生物は、未だにふわふわと宙を浮いていたのだった。

51・消滅

何がどうなっている？

くないがすり抜けただと……。

あり得ない、カエデの投げたくないは的を外さずど真ん中に行ったはず。

「今のはたまたま避けられただけよ！……よし、もういっちょっ！」

カエデはそう言うと、今度は両手にくないを持ち、謎の生物に向かって投げた。

「……………」

真夜中の林道に鈍い音がした。

「何だよ?!」

またしても、くないは岩壁に刺さっていた。

そう、それは謎の生物には物理的ダメージは与えられないということとを知らせていた。

と、いうことで……。

「分かってるわ」

そう言うセツナは魔術の詠唱に入った。

「吹き荒れる、風魔の暴君　トルネード！」

トルネード。

名前の通り、竜巻を発生させる魔術だ。

その魔術だが、謎の生物の下から風が吹き荒れ、竜巻が発生した。流石セツナ、凄い威力だ。

普通の敵なら一撃だろう。

「でもこいつは……」

「効いてないわね」

謎の生物は何事もなかったかのように、ふわふわ宙に浮いていた。

「一体どうなっているんだ？」

グレンも驚きを隠せないみたいだ。

「ねえ？攻撃しても何もしてこないなら、通っちゃっても大丈夫なんじゃないかな？」

サラがそう言った。

まあ確かに、ここまで攻撃を加えて食らってないにしろ、何もしてこないしな。

「多分大丈夫だよ」

そう言ったサラは一歩前に出た。

と、その時だった。

「きゃあつ?!」

「サラ?!」

サラは宙に浮いていた。

いや、浮いていたんじゃない、

「こいつ!」

とうとう本性を表しやがったか。

サラは謎の生物に捕まってしまったのだ。

「サラ!今助けるぞ!」

俺は剣を抜いた。

他のみんなも戦闘体制に入った。

そして、効かないと分かっているけど謎の生物に俺が突っ込んだ時だ。

「なっ?!何?!」

俺たちは立ち止まった、……いやこれまた違う。

「体が……動かない?!」

俺、いや、他のみんなも金縛りにあったかのように動けなくなったのだ。

くそっ!何なんだよ?!

「こいつ?!」

サラの声が漏れる。
締め付けられる痛みに耐えている。

「サラ！」

俺はサラの名前を叫ぶ。

「くうっ！」

くそ……。

「うああ?!！」

くそ!くそっ!

「っああ!!!！」

動けよ!俺の体っ!

そして。

「動けえええ!!!！」

そう俺が叫んだ瞬間、俺の体は自由を取り戻していた。
しかしその俺だが……。

「ヤス?!その光は一体?!！」

グレンの声がうつすら聞こえる。

そう、俺は自分の全身が光に包まれているのを心の中で感じていた。しかし、今の俺は俺でない気がしていた。そして……、

「一撃で仕留める」

そう言った瞬間、俺はもう謎の生物の後ろで剣を振り切っていた。それはまさに光の如く。

「グウオオオウ?!」

悲鳴を上げる謎の生物。

そして、サラだが、束縛から解放され、謎の生物から逃げていた。

319

物理、そして魔術が効かなかった謎の生物に光をまとった俺の攻撃は明らかにダメージを与えていた。

そんな俺は、剣を鞘にしまう。

すると、同時に俺に帯びていた光、そして謎の生物も声を上げて消えてしまった。

その瞬間。

「ヤス?!」

皆が俺の名を叫んだ。

「……さっきのは一体……」

俺はその場に膝をついていた。

頭の中が真っ白になった俺はかろづじて、俺に近付いてくる仲間の足音に耳を傾けていた。

51・消滅（後書き）

これで第一部終了です。
次回から第二部に入ります。

《第二部》 52 ポジティブ

「もうすぐ船だな」

船を求め、洞窟の中を歩く俺たち。

因みに俺は、戦闘により意識が朦朧として、一回は地面に膝を付いたものの、今は正常を取り戻していた。

そして考えるのだ、さっきの俺の体にまとった光は何だったのかと。

『一撃で仕留める』

これは、俺が言っていた言葉だ。

そう、言っていたのだ。

自分の意思ではなかった。

そして、謎の生物を倒した技。

『光華迅捷斬』

光の如く、相手を斬り裂く技。

こんな技、俺は一度も使ったことはないし、知らない。ただ、今では知っている。

なぜ俺は知っているのか？

光をまとった時……。

全てはあの時だ。

俺はどうしてしまったのだろうか……。

「ヤス？」

とその時、サラが俺の顔を覗いていた。
因みにサラは謎の生物に攻撃を受けていたのだが、軽傷で済んだみたいだ。
大事に至らなくて良かった。

「ごめんね……私のせいで……」

「大丈夫、サラのせいじゃないよ」

とりあえず、光の事を考えるのは辞めよう。
てか、強くなつたと思えば良いのか。

……まあ、そんなことより今は船の状態や今後の事を考えなくちや
な。

「お、見えてきた」

グレンがそう言った。
そう、洞窟の出口だ。

……この大陸での初めての場所。

海岸に戻ってきた。

潮風が気持ちいい。

まあ中には、『ベタバタするから嫌』とか言つやつが居るけどな。
誰とは言わないけど。

「お あれがヤスつちたちの船だね」

そう言ったルミナが船の元に走って行く。

「乗り上げただけで、ほとんど壊れてはなさそうね」

まあ、セツナの言う通りだ。

船の中などは大丈夫そうだし。

問題は船の底の状態、そして……。

「てか、どうやって海まで移動させるのよ」

そう、今カエデが言ったように船の移動だ。

俺たちは全員で6人。

その内女性が4人。

男性6人でも普通に考えて大変過ぎる。

隠れたとしてもそんなに時間は無い。

……もしかして、港に行った方が良かったか？

「今さら何言ってるのよ、まったく」

カエデはそう言った。

まあ、自分たちの船があった方がいるんなところに行けるからな。

ポジティブに考えよう。

と、その時だ。

「ヤスつち大変だよ！船の中に人が倒れてる！」

「……………はあ?!」

ルミナが船の上から俺たちに向かってそう叫んできた。

「人が倒れてるってどうということだよ?!」

俺たちは急いで船に向かった。

そして、船の中に入る。

すると……。

「……………」

一室の中に男性が一人、背を向けて倒れていた。

「ねえ……………もしかして……………」

サラが俺の腕を掴んでそう言う。

てかサラ、冗談はよせよな。

「よし、俺が確かめてくる」

俺は、腕にくつつくサラを離し、ゆっくり男性の元へ近づく。

……………まさか、本当に……………。

そう思いながら一步踏み出した次の瞬間。

「うわっ?!」

背を向けて倒れていた男性が、いきなりこちらに体を返したのだった。

……ん？体を返した？

俺はよく耳を済ました、すると……。

「……おいおい」

俺は男性に近づき体を揺さぶった。

「ヤ、ヤス?!」

「ん？ああ、大丈夫だよ」

怖がるサラにそう答える、そして俺は倒れてる男性に指を指し……。

「寝てる」

と苦笑いをして言うのだった。

どこかで見たことあるような……。

俺はそんなことを思いながら、その場で立ち尽くすのであった。

53・目覚めた男

「……えっと」

戸惑う俺。

今、俺たちは眠っていた男と話をしている。

そう、彼は起きたのだった。

「この船を直していたんですよ」

彼はそう言った。

何だか突然だな。

あ、そういえば……。

「前に洞窟で会いましたよね？」

俺は彼にそう聞いた。

すると彼はすぐさま、

「ヒドラの時ですね」

と、答えた。

何処かで見たとあるなと思っていた。

そう、ヒドラに襲われた時に助けてくれた男だったのだ。

セツナの魔術を越えていると断言出来る程の威力を持った魔術を扱う男。

一体どの様な人なのかと頭の中で考えるが、とりあえず、そろそろ聞いときますか。

「ロゴスです」

彼はそう言った。

ここまで来たら聞くしかない。

そう、名前だ。

そして、とりあえず俺たちも自己紹介をする。

定番、いつもの流れだな。

「それで、船を直していたっていうのは？」

グレンがロゴスに聞いた。

「ああ、船の底が傷付いていたものですから。それでは船が出せな
いでしょう？」

「それって」

ロゴスの言葉に俺は疑問を問い掛けた。

「実はですね、いろいろあって帰りの船賃が無くなってしまっ
て。そしたらこんなところに船があつて……」

あつて……？

「これで地元まで帰ろうと思ったんですよ」

やっぱりそう来たか。

「あ〜」

すると、サラが口を開いた。

「この船、私たちが借りているものなんです」

サラは申し訳なさそうに言った。

それに対してロゴスは、

「あなた方の船だとは知っています」

と言った後、

「大体予想はつきます。こんなところに船、ましてや人なんてそう
そう来ませんからね」

と微笑みながらそう答えた。

………って、ちょっと待て。

それを知ってて俺たちの船に乗っていきこうとしたのか？

「それは違います。私は待っていたのです」

………え〜と。

それは………一体？

「私は船の操縦が出来ません。ということは船を直すことが出来て
も海に出ることは出来ない。そして、この船はあなた方の船」

「………、だから？」

「私が船を直す代わりに、あなた方に乗せてもらおうと思ったので
すよ」

「はあ?!」

思わず声を上げる俺。

俺たちに乗せてもらう……。――

俺たちがここに帰ってくるかどうか定かではないのに待っていたというのか。

「いや、あなた方が帰ってくるって分かっていましたよ」

真面目な表情でロゴスは言った。

……まさか、超能力者か何かか?!

「何言ってるのよ」

カエデが俺に突っ込んできた。

……そんな真面目に突っ込むなよ。

「まあそんなことは良いじゃないですか。こうしてあなた方は来たんですから」

真面目な表情から再び微笑みの表情に変わったロゴス。

何だかな、まあ良いけど。

それで、簡単にまとめると、船は直したからロゴスの目的の場所へと連れていけと。

「そうです」

ロゴスは首を縦に振った後、そう言った。

まあ、ちよつど良いか。

俺たちも逃げるところだったし、船も直してもらったみたいだし…、それに。

「ヒドラの時に助けてもらったしな」

「その様子だと、良いみたいですね」

「ああ、お礼も兼ねてだ」

他の皆も異論は無かった。

となると早速、船を海まで運ばなくてはな。

「それなら、私にお任せください」

するとロゴスは、危ないからと俺たち全員外に出るようと言った。

そして、ロゴスも一緒に外に出てきた。

ロゴスは何をするんだろうか？

「こうするんです」

するとロゴスは、何やら詠唱を唱え始めた。

と、次の瞬間、船が宙に浮いたのだった。

俺たちはもちろん驚いていた。

そして、あっという間に船は海に移動したのだった。

凄い、どんな魔術だよ。

「ただ物を持ち上げて動かしただけですよ。何の実用性の無いただ疲れるだけの魔術です」

そういうロゴスは疲れてる風には見えないけどな。

「そうですね?」

まあ、良いけどな。

とまあ、これで何とか騎士から逃れることは出来そうだな。

そして、これも何かの縁だ。

俺たちはロゴスを加え、ロゴスが指定したまた新しい大陸に移動をすることになったのだった。

54 次の大陸へ

空が少しずつ明るくなっていく……。

「日の出か……」

……眩しい。

俺は手をかざして見ている。

真っ赤な太陽がちよつとずつ水平線から顔を出す。

何だか新鮮だな。

とまあ、夜中から船で出てもう朝。

あともう少してロゴスが住む大陸へ到着だ。

「ん」

少し離れたところでサラが背伸びをしていた。

因みにグレンの船操縦以外は皆、各自のんびりだ。

グレンには悪いがな。

「もう着きますよ」

すると、ロゴスが話しかけてきた。

そんなことは見ればわかるよ。

「そうですか」

きっちり地図まで見せられてかかる時間等説明されれば、なんとなく
くだけど分かるさ。

「賢いですね」

……そんなの普通だろ。

もしかして、からかってんのか？

「とんでもないです」

そう言うと、ロゴスはどっかに行ってしまった。
何だか、何考えてるのか分かんない奴だな……。

「どづしたの？」

すると、今度はサラが話しかけてきた。

まあ、ちよつとな。

「そついえば、さっきロゴスさんと何話してたの？」

「もうすぐ着くなって話してたんだよ」

「えっ！もうそんなところまで来てたんだ！」

……。

まあ、そんなもんか。

サラらしいな。

「ん？どづしたの？」

いや、ちよつとな。

太陽が全部顔を出した頃、俺たちを乗せた船は船着き場に止まった。

「着きました。セラピアです」

カラツとし、じわじわ暑い……。

「一気に気候が変わったね」

「暑い……、死ぬ……」

グレン、そしてカエデがそう言った。

セラピア……、この街は砂漠への入り口となる場所。

「砂漠……」

暑いのも無理はない。

「今はまだ良い方です。今後、もっと暑くなりますよ」

マジかよ……。

俺はロゴスの言葉に肩を落とした。

まだ午前中だというのに30度は軽く越えているだろうという暑さ。午後は一体どうなってしまうのだろうか。

……ははは、考えるだけで死ぬ。

「ああ、それと皆さん、ここまで送ってくださってありがとうございます」

すると、ロゴスがそう言った。
俺たちが頼まれた事は、ロゴスを地元まで送ること。
何事も無くて良かったぜ。

「だけど、ロゴスさんの地元は本当暑いですね。私はちょっと耐えられないかも」

サラが汗をぬぐいながら言った。

「すぐ慣れますよ。それに私の地元はここよりもっと寒いです」

「……………、へ？」

思わず声を出した俺。
寒い？砂漠なのに？
ああ、夜のことか？

「言ってませんでしたけど、私の地元はこの砂漠を越えて更に橋を渡った後の大陸にある村です」

「えっと、そこが寒いのか？」

「はい、雪山です」

……………雪山。

何だかここら辺の大陸は厳しそうだな。

「良いところですよ。優秀な学者、そして医者が住む村なんです」

へえー、……………って。

待て、今優秀な医者がどうのこうのって……。

「はい、居ますけど……？」

……これは、ラッキーだな。

もしかしたら、サラの記憶が何とかなるかもしれない。
行ってみる価値は大だな。

「みんな」

俺は仲間たちに話し掛けた。

すると、サラ以外皆笑っていた。

「分かってるよ、ヤスの言いたいことは」

グレンがそう言った。

「良い医者が居ると良いわね」

「何だかワクワクしてきたよ」

「まあ、何処でも行ってやるうじゃないの」

セツナ、ルミナ、カエデもそう言った。

考えてることは皆同じか。

「ありがとう、みんな」

すると、皆の言葉を聞いたサラは、素直にお礼を言ったのだった。
よし、皆の意見もまとまり次の目的地は決まったな。

あとはつと、

「ロゴス、頼みがある。俺たちをロゴスの住む村に案内してくれないか？」

俺は代表してロゴスにそう頼んだ。

初めて来た大陸、しかも砂漠、そして雪山と来たもんだ。

案内が居ないととても厳しいからな。

すると、ロゴスは表情一つ変えず、

「何だかよく分からないですけど、私は良いですよ。大歓迎です」

と、最後は微笑み、すんなり快く引き受けてくれた。

というわけで、俺たちはロゴスに案内してもらったことになった。

砂漠を越えて、橋で大陸を渡り、そして雪山。

俺たちは今居るセラピアで入念に準備をし、この先厳しいであろう旅に備えるのであった。

55・最も暑い街

「暑い」

.....。

「暑い」

.....つるさい。

「暑い」

「ああ〜！言うな！」

俺は怒鳴った。

ヤバい、体力を奪われる.....。

因みに暑い暑い言っているのはもちろん予想はつくだろう。

「暑い」

そう、カエデだ。

ロゴスの後に続き、砂漠を進んでいる俺たち。

目的地である村に行く途中の最初の難関だ。

暑い、そんなのは分かっている。

しかし、言うなよ、もっと暑くなる。

「皆さん、大丈夫ですか？」

清々しい顔で俺たちにそう聞くロゴス。
「つてか、暑くないのかよ。」

「暑いですよ。でも慣れてますから」

「だよな……、そうだよな。」

「因みにロゴス以外全員バテバテだ。」

「汗も滝のように流れていく。」

「……まあ、まだ汗が出るだけましか。」

「これで汗が出なくなったら……。」

「……よそう、考えるのは。」

「ロゴス、どっか砂漠に休憩するところは無いのか？」

俺は声を振り絞り、聞いた。

するとロゴスは、

「オアシスがあります」

と、言った。

「……つて、オ、オアシス?!」

「行こう!すぐに行こう!」

「でも行きません」

「何で?!」

と、俺が言う前にカエデがロゴスにそう言った。

すると、

「遠回りだからです」

と、ロゴスは答えた。

遠回りって……、少し位良いじゃないか。

「オアシスに向かうより、シュキオンの方が近いです」

「……シュキオン？何だそれ？」

俺は問った。

「砂漠にある街です」

「街?! 街があるのか?!」

「はい」

すると、ロゴスは微笑みながら肯定した。

おいおい、だったら遠回しな言い方するなよ!

「すみません。ただオアシスもあるって言うておきたかったのです」

……………。

そうか、分かった、もう良い、行こう、シュキオンへ。

とまあ、少し気持ちが楽になったぜ……。

「まあ、ここよりも熱いところですけどね」

……え？

微笑むロゴスが謎の言葉を発した。

そして、シユキオンとやらに向かって歩いていくと、

「見えてきました」

ロゴスの言葉通り、俺たちの目の前にでっかい建物が見えてきた。
あれは何だ？

「あの建物は闘技場です」

なるほど、闘技場かあ……。

「闘技場?!」

俺は驚いた。

闘技場ってあの闘技場か?!

「はい。人や魔物と戦う闘技場です」

マジかよ、こんなところに闘技場があったなんて!

「ヤス?」

「何だか急に元気になったわね……」

俺は、サラとカエデのことを気にせず一人で盛り上がっていた。闘技場……、噂でしか聞いたことがなかったが、夢に見ていた場所だ。

各地のいろんな奴らと戦う、それは俺も挑戦したいと思っていた。そんな場所が今、俺の目の前にあるのだ。興奮せずにいられるかって話だ。

「とりあえず、あそこで休憩しましょう」

もちろんだ、早く行こう。

そして、そんなこんなで俺たちはシュキオンに着くのだった。

「何だかお祭りみたいだね！」

シュキオンはサラの言う通り、人で賑わっていた。

何だかりマーニを思い出すな。

まあ、また違う雰囲気だけど。

「ああ、暑苦しいわね。早く宿屋に行きましょう」

駄々をこねるカエデ。

まあ、宿屋に行くのは賛成だ。

にして、いろんな人が居るな。

そして何と言っても……。

「ここに居る人は皆強そうだね」

「そうね、見た目、そして雰囲気は凄いわ」

グレンとセツナがそう言った。

さすが闘技場があるだけある。

「闘技場だけではありません。ここは砂漠の中の街。そんなところに来る人たちですからね」

なるほどな。

俺はロゴスの言葉に頷いていた。

暑さを忘れてしまうほど興奮してしまっている俺。

しかし、闘技場は一先ず置いて、俺たちは真っ先に宿屋に向かうのだった。

56・闘技場へ

「ああ、生き返るわね」

冷えた飲み物を飲みながら、とても幸せそうに言うカエデ。
涼しい宿屋の室内で休憩を取っている俺たち。

ここまで砂漠を進んできて、ロゴス曰く半分は越えたみたいだ。
そして、あと半分で 今俺たちが居る大陸と目的の村がある大陸を
結ぶ橋に到着するらしい。

とまあ、今はそんなことどうでも良いと思っている俺が居た。

「あのさあ、後で少し闘技場を覗いても良いか？」

俺は堪えきれず、皆にそう聞いた。

「何々？ ヤスっちってああいうのに興味あったんだ」

「まあな」

だって、世界中から強い奴らが集まって戦うんだぜ？
燃えるじゃないか！

俺は、ルミナに、いや、皆に対して熱心に自分の気持ちを伝えてい
た。
すると、

「実は、俺も興味があるから観に行きたいな」

「そうね。こつこつのも面白そうだわ」

お、グレンもセツナも興味があるみたいだな。

「もちろん私も サラも行くよね？」

「うん！私も観てみたいなあ」

ルミナ、そしてサラも興味津々のようだ。
しかしなんか、サラに悪いかな。
村に行かなくてはいけないのは分かっているんだけど……。

「コラッ！ヤス！」

突然、そして意外だったことによりびっくり。
俺はサラに怒鳴られた。

「私も観たいんだよ？それに私の旅は、世界のいろんなものを見たり、体験したりして記憶を思い出そうってというのが1つの目的」
サラは俺の気持ちを読み取ったのか、説教を始めた。

「だから、これもその内、ね？」

そうか……、そういえばそうだったな。
この旅自体がサラの治療の旅だもんな。

「そうそう！だから、慌てずゆっくり行こう？私は一緒に来てくれるだけで嬉しいんだから。今の時を楽しまなくちゃ！」

天使のような笑顔でサラはそう言った。
慌てずゆっくりか……、そうだな。

でも、サラには早く良くなってほしいからな。

その気持ちは忘れないようにしよう。

しかし、サラの言葉がいきなり過ぎて本当びっくりしたぜ。俺ってそんなに急いでる風に見えてたのか？

自分では分からないな……。

とまあ、話を戻そう。

あとはカエデか……、どうすんだ？

「ん？あ、私はパスね。あんただけで行ってちょうだい。私はこの涼しい部屋で休んでるわ」

カエデは机に伏せながらそう言った。

……カエデの奴、ノリ悪すぎだろ。

せっかく来たんだから観てみれば良いのに。

「そういえば、今まさに闘技大会が行われているはずですよ。確か、飛び入り参加も可能な大会だったはずですよ」

「マジか?!」

すると、俺の言葉にロゴスは頷いた。

てかちょっと待て、何だか出たくなってきたぞ。

「そして、優勝した人には豪華賞品があるとか」

「豪華賞品?!」

すると、カエデが机から頭を上げ、その声を上げた。どうした、突然。

「行こう、闘技場へ」

……へ？

……って、もしかしてカエデ……。

「豪華賞品」

やっぱり……。

予想通り、カエデの食いつくと言ったらそこしかないからな。さすが、盗賊だけある。

「ん？何か言った？」

おっと、いけないいけない、思ってたことが口に……。

とまあ、俺たちは全員一致で闘技場に向かうことにした。

『ワアア　　アア！』

『キヤーキヤー！』

『ウオオーオー！……！』

沸き上がる歓声。

それは、身も心も震え上がらせるものであった。思った以上の物凄い迫力。

そう、今俺たちは闘技場の中に居る。

「す、凄い」

サラが目を丸くしていた。

「相変わらず盛り上がってますね」

ロゴスは地元だけあって慣れているな。
楽しそうだった。

「お、これはこれは」

つて……、ルミナが試合を観ながらぴよんぴよん跳ねてる。
俺はどうしたんだと言わんばかりに近づいた。

「男一人に三人がかりで挑んでるよ」

「……本当だ」

試合を覗いてみると、ルミナの言う通りの状態だった。
ロゴス、こついうのも有りなのか？

「この大会では良いみたいですな」

なるほどな。

とまあ、普通に考えたら男一人の方が不利だよな。

『うわぁっ?!』

だけど……。

『おおっつと！一気に三人を蹴散らしたっ!!!』

これぞ闘技場って感じだな。

男、いや、大男は闘技場の中心で勝利のポーズを決めていた。

57・初出場

今大会のルール。

それは、飛び入り可能な勝ち抜き方式である。

詳しいルールは省略。

要するに、勝って勝って、勝ち進めばいいのだ。

「ルールは簡単です」

ああ、そうだな。

てか、ロゴスはこういう大会には出たことはあるのか？

「実は出たことないのです。自信がありませんので」

……おい、それは嫌みか？

「何の事ですか？」

笑って言っているところが怪しいが、まあスルーしてやる。

とまあ、俺とロゴスは今、受付の前まで来ていた。

そう、俺は大会に参加しようとしていた。

因みに、優勝賞品に引かれてやって来たカエデだが……、

「ああ……、やっぱり私は良いや」

とか、何を思ったかいきなり言い出し、

「よくよく考えてみると、私こういうの向いてないわ」

と、一気に気持ち冷めており、

「よし！ヤス！頑張ってください！」

と、最終的に俺に押し付けたのであった。

まったく……、調子良すぎだろ。

まあ、このまま一緒に出たら、カエデとも戦うことになるかもしれないなかったからな。

それはそれで面白そうだけど。

「それではヤス、頑張ってください。私は皆さんのところへ戻ります」

すると、ロゴスはそう言って、サラたちが居るであろう観客席に戻っていった。

「よし！」

俺は気合いを入れた。

そして、受付に向かうのであった。

『さあ！今大会も大詰めに差し掛かりました！！！！』

『ワアアアア！！！！』

『もう優勝は決まってしまうのか？！いやいや、そんな訳無いのが今大会！！！！そう！！！！ここで挑戦者の登場だあっ！！！！』

『ワアアアア！！！！』
『キヤーキヤー！！！！』

『さあ！登場してもらおう！何の因果か知らねえが、遠く離れた地からたまたま偶然やって来た旅をする青年、初出場のヤスだ！！！！』

場内アナウンス、やっぱり熱いな。

とまあ、張り切っていきますか！

俺は闘技場に出た。

すると、一気に歓声が上がった。

『ガンバレー』や『行けー』等から、『死ぬなよー』までいろんな声が聞こえる。

そして俺はぐるっと観客席を見回した。

「ヤスー！！」

お、いたいた。

何を言っているのかよく分からなかったが、サラたちが居るのを確認した。

こりゃあ、カッコ悪いところは見せられないな。

『飛び入り参加のヤスにより今大会の流れが変わるのか？！対するのは前大会の王者、バルディールだっ！！！！』

鍛えぬかれた筋肉を露出した大男が声援に対し両手を上につき出していた。

そして、ニヤリと俺を見た。

「初出場で俺に齒向かうとはいいい度胸だな、小僧。それとも、わざわざ俺の引き立て役をしてくれるのか？」

へっ、前大会王者か何だか知らねえが、俺だって出たからには負けらんねえぜ。

「調子に乗るなよ、小僧。力、いや、経験の差を見せてやる」

経験の差……、確かに俺は浅すぎる。

しかし、俺はそこを潜り抜けてきた。

……それを見せてやる。

『行き着く先は天国？それとも地獄？さあ、準備は良いかあ？！』

もちろん、良いっての！

そして、俺は剣を抜く。

『それではいってみよう！レディ〜、ファイト！……！』

今までで一番の歓声が上がリ、試合が始まった。

58・反則だろ！

さてと、どう攻めていくか……。

相手は俺よりはるかに大きい大男。

力では確実に負けるだろう。

ということはやっぱりスピードか？

「どうした坊主？かかってこないのかあ？」

でかいだけあって鈍そうだしな。

それしかないだろう。

「今行つてやるよ！」

— 先ず速攻だ。

『おつとヤスが動いた！バルディールの正面に向かってダッシュだ
！！』

「正面からか、そんなんじゃ俺には勝てないぞ！」

来たっ！

先ずはこいつの攻撃を避けてつと。

そして、こうだっ！

『そして、ヤスの攻撃がヒットだ！！』

バルディールのパンチ攻撃は地面を割った。そしてその隙に俺は、その腕を踏み台として利用し、頭を飛び越え、奴の後ろを一回転し

ながら剣で斬る。

ダメージも与え、魅せることも出来た。
俺にしては上出来じゃね？

「なるほど、こんなあまつちよろい攻撃じゃ、流石に避けるか……」

っておいおい、斬られてもダメージ全然食らってないのかよ。

……筋肉は鋼鉄か何か？

まあ、流石前大会王者だけはあるってか？

「おいおい、逃げんたって」

ああごめんごめん、近距離だとあなたの筋肉が眩しくて目が開けられなくてな。

(剣で斬っても微動だにしないなんて……、こいつ人間か?!)

「そりゃあどうも、お礼に今度はこっちから行かせてもらっぜ!」

おっと、これは不味いか？

どんな攻撃が来るんだ？

すると、バルディールは走ってこっちに向かってきた。

って、お前も正面からじゃないか!

しかも思った通り、足は速くない。

……よし、ここはとりあえず。

俺は剣を構え、そして相手に向かって振る。

『おっと?!ヤスの剣から衝撃波が飛び出したぞ!そして命中だあ
あ!いや、しかし?!』

って、マジかよ?!
ヤベエ!

ズサー!

「ふん、耐えたか。しかし、衝撃波が出せるなんて、なかなかやるじゃねえか」

『斬光波』、神彩流の剣技なんだが……。当たったにも関わらず、やはり全く効いていないのか、減速することなく俺まで近づき……。

「今のは驚いたぜ……。まさかそんな速くパンチを繰り出せるとはな」

バルディールの奴、パンチがさつきより何倍も速くなりやがった。そう、俺はパンチ攻撃を受けて、後ろへ押されていた。今のは何とか剣で最小限に防いだけど、正直危なかつたぜ……。しかしなんだろう、今の……。バルディールの動きに少し違和感があったような……。

「坊主、考え事か？」

な……なにっ?!

「よそ見しちゃあ、いけないぞっと!」

ぐはっ?!

『なんとバルディール! 目にも止まらない速さでヤスの後ろに回り、壁へ叩き飛ばした!!』

……はは、何だよ今の、反則だろ。

一瞬のうちに俺の背後へ移動だと?

こんなばかでかい奴が瞬間移動……、魔術か何かか?
でも、詠唱をしているとは思えない……。

ああ! もう!

やっぱりこいつ人間じゃ……。

「だ〜か〜ら〜」

………!

ヤバイと思ったその瞬間、もう俺は壁へと叩き飛ばされていた。

……くそっ! またか?!

「試合に集中しなきゃ」

攻撃を華麗に決めたバルディールの笑い声、そして観客の歓声がか
化した。

そしてそれを聞きながら壁にもたれ座る俺。

ああ、今の俺の体勢、他人から見たらまるで糸の切れた操り人形だ
な……、カッコ悪い。

………。

待てよ……、もしかしてそんなことあっちゃったりする……？

俺は、とある事をふと思い出した。

……やってみる価値はありそうだな。

『おっと！ヤスが立ち上がったぞ！！ダメージは大丈夫なのか?!』

そんな実況を尻目に盛り上がる闘技場の中で俺は、意識を集中し始めたのだった。

59・人形疑惑

精神統一。

集中し、フィールドだけに意識を向ける。
風の流れ、足音、地面の揺れを五感をフルに使い、体全体で感じ取る。

そして……、

「そこだっ！」

「何?!」

相手を捕まえる。

『ここでヤスが、瞬間移動したバルディールの腕に掴まった!!!』

腕、いや、重要なのはそこではない!

ここだっ!

「邪魔だあ!」

「おつと?!」

すると、バルディールは腕を振り回す。
そして俺は腕から離されてしまった。

「へへ、危ねえ」

俺は頭を掻いた。

とまあそんな俺は、バルディールに視線を向けるわけだ。すると、

「俺の動きを捕まえるなんて、お前が初めてだ。褒めてやるぜ」

と、不気味な笑みを浮かべながらそう言った。

……誉めてやる、ね。

「だったら、もっと誉めてもらおうか」

「はあ？」

今の俺の行動の意味、ここで教えてやるう。

「率直に言ってやる。お前、人間じゃないな」

闘技場が静まり返った。

「坊主、お前何言ってんだ？頭打ってネジでも緩んだか？」

「おいおい、自分のことすら分からないとは。お前こそネジが取れちまったんじゃないか？」

すると、俺の言葉にバルディールは少し動揺を見せた。

「お前、何を言って……」

「あんたのその体。それは『人形』だ」

静まり返っていた闘技場からざわざわと声が出始めた。

「前にどっかで聞いたことあってな、もしかしたらと思って調べさせてもらったぜ。そう、お前は人形だ！そして、それを動かしている奴がこの闘技場内に居るはずだ」

闘技場のざわめきが最大のものとなる。

「第一、何で俺が人形だなんて分かるんだよ！そんな分かりやすい作り話なんか……」

「分かるさ、脈が無かったしな。それにさっき俺に打ったパンチ。あの時、人間とは思えない腕の動きをしていたからな、それが確信に繋がったのさ」

脈……、そう、だから俺は奴の腕に掴まった。

そして上手く手首を調べ、無いのを確認し確信したのだ。

まあその前に、肉体の固さの違和感で人間じゃないってのが大体予想はついてたけど。

とまあそう俺が言った瞬間、観客が一齐に辺りを見回すなど、いろんな動きが始まった。

そして、サラたちもそうだった。

『これは、私も驚きました！バルディールの人形疑惑だ！！！』

人形疑惑だつてさ、なんか可愛いな。

吹いてしまった俺は物凄い表情で睨み付けるバルディールを確認していた。

そう、今にも殴りかかってくるような……。

『おっと?!バルディールがヤスに向かって攻撃を始めた!』
やっばりな。

「このやるう!潰してやる!」

そう言うバルディールだが、攻撃、スピードは速いものの、先程とは違い、攻撃が荒くなっていた。
そう、むきになっていたのだ。そのお陰で、攻撃の出どころが分かりやすく、俺は全部かわしていた。

しかし、どうしよう。

この後のことを考えるの忘れてたぜ……。

「コノ!コノ!コノオツ!」

バルディールは狂って何回も攻撃を繰り返す。
くそっ、いい加減避けるのもやめて、どうにかして倒さなくてはと、その時だ。

「うががっ?!」

バルディールの動きが止まった。
一体どうしたのだろうか。
と次の瞬間、バルディールはまるで操り人形の糸が全て切れてしまったかのように地面に倒れてしまった。

『おっと?!ここでバルディールがダウンだあっ!?!ヤスが何か仕掛けたのか?!』

いやいや、俺は何もしてないんだけど……。
と、その時俺は、聞こえはしなかったが、何となく呼ばれたかのよ
うな気がしてサラたちのところを見た。

サラたちは先程と変わらずその場に居た。

ただ、ロゴスだけは席を立って、観客席の出入口付近の壁に寄り掛
かっていたのだった。

60・闘技大会終了

「どうでしたか？初の闘技大会は？」

ああ、世界にはいろんな奴がいるんだなと、改めて思った。しかし、驚いたな。

まさか、ロゴスがバルディール本人を捕まえてたなんてな。

「いえいえ。まあ私は最初見たときから分かっていたんですけど」

言ってくれるな、まったく。

闘技大会が終わり、闘技場内の選手待合室でロゴスと話している俺。因みに闘技大会は俺が優勝となった。

俺が倒した訳では無いんだけど。

だから、素直に喜べない自分が居るのだ。

「優勝したんですよ。もっと喜びましょうよ」

「からかってんのか？」

すると、俺の言葉に対しロゴスは笑って過ごした。

まあ、そうだよな。

ロゴスは嬉しいだろうな。

トイレの個室に隠れていたバルディール本人を見つけて、魔術で半殺しにした後、警備に引き渡したんだもんな。

「大袈裟です。遊んであげただけです」

遊んであげた、ね。

噂によると、意識が飛んでいて、体からは煙が上がっていたと聞いたんだけどな。

「そうなんですか？」

白をきるロゴス。

……もう良い、ロゴスには勝てない。
とりあえず、今は疲れた、休みたい。

「そうですね。じゃあ、また後で。受付前で待ってます」

そう言っつてロゴスは待合室を出ていく。

そして俺は、ロゴスが待合室から出ていくのを見送り、その後ソファに座った。

そして待つのだ。

「何だろうな」

そう、優勝賞品をね。

「あーヤス〜！」

お、みんな集まってるな。
手を振るサラに俺は手を振り返した。

「おめでとう、ヤス！良い試合だったよ」

サラがそう言ってくれた。

まあ、やられてばっかだったけどな。

「良い動きしてたわ」

「ああ、ヤスらしい戦い方だったよ」

「そうだね かつこよかったよ、ヤスつち」

セツナ、グレン、ルミナと、俺にそう言った。
てか俺らしい戦い方って……、どんなだ？

「ねえ！」

すると、カエデが大きな声で俺を呼んだ。

……なんだよ。

「優勝賞品！どうだった？！」

……やっぱりな、聞いてくると思った。

「金目の物？！それとも賞金？！」

おいおい……。

とまあ、隠す事や勿体振る事でもない。

見せましょう、優勝賞品はこれです！

「……………これは？」

「チケット？」

そう、サラの言う通り、『年間無料入場券』だ。

「何よ、金じゃない！」

……………カエデ、さっきからお前はそれしか考えられないのか。

「ねえ、入場って？」

「確かに、何処で使うんだろうか」

「ああこれは、ここの娯楽施設等で使えるんだってさ」

俺はサラとグレンの疑問にそう答えた。

「何？その娯楽施設って？」

すると、セツナの疑問が上がった。

娯楽施設、それはここ闘技場内に設置されるもので、大浴場からプールまで充実した施設であるらしい。

普通だったらかなりの高額料金を取られるところを、この券でタダというわけだ。

まあ、お得な券だな。

しかし、一つ疑問があった。

それは、娯楽施設『等』だ。

他に何処で使えるのか詳細が書かれていないのだ。
一体他に何に使えるのか……。

「まあ、そんなことどうでもいいじゃありませんか」

「そうだよ、ヤスうち 早速行こうよ、ね？」

ロゴスは微笑みながら、ルミナは目を輝かせながらそう言った。

……まあ、今はどうでもいいか。

それに丁度よい。

この施設を使つて、疲れた体を休ませるとしますか……。

そして、俺たちは今後に備え、皆で施設を使うことにした。

まあ、みんな喜んでるみたいだし、なんだかんだ優勝出来て良かったな。

「ゴニョゴニョ……」

ん？この声は……。

その時、俺の近くでぼそぼそと声が聞こえた。

そして俺は声がある方をちらっと振り向いた。

すると、カエデが何かぼそぼそ喋っていた。

何だろうか？

俺は、意識して聞いてみた。

すると……。

「これを売ればお金になるんじゃない……」

……。

ああ……、これは……。

聞かなかったことにしよう……。

61・再び砂漠へ

娯楽施設の中は、前に言った通り大浴場やプールの他に、マッサージや飲食店、宿泊所等があり、とても有意義な時間を過ごせた。そして、みんなも好きなように時間を過ごし、満足のようだった。しかしまあ、こんな良いところにこれから一年間無料で入れるなんて、改めて良かったなと思うな。

「楽しかったね」

「そうだね！」

ルミナとサラが話している。

因みに俺たちは今、宿泊所のロビーに集まっている。

「ヤス選手じゃありませんか?! 試合観てましたよ！」

すると俺は受付の人にそう言われた。

俺も今じゃあ有名な人?なんてな。

というわけで、今日はここで夜を明かす。

そして、豪華に一人一室、計七部屋を借りた。いつもはしないらしいが、俺が優勝したということとで今日だけサービスらしい。

何だか、ここまでされると申し訳ない感があったり無かったり……。

「何言ってるのよ。きっちり使わせてもらっわ」

カエデ……、これは俺の優勝のおかげでだなあ……。

まあ……、俺もきっちり使わせてもらいますけどね。

そして俺たちは、自分たちの部屋に入る前に、明日の事をいつもの様に話し合う。

そうした方が明日が早く動ける、普通の事だな。

そして、話し合いを終えた俺たちは、明日に備えて、借りた自分たちの部屋に入り、各自眠りに付くのだった。

そして、朝。

はてさて、娯楽施設で羽を伸ばした俺たちは、次の目的地である橋……、えっと。

「ベリタス橋です」

そうそうそれだ、ロゴス。

大陸と大陸を結ぶベリタス橋。

なんでも全長一キロメートルある橋らしい。

今から、そこに向けて出発ってわけだ。

「今回はシュキオンに来る時と違って、距離も短いですし楽だと思えますよ」

ロゴスがそう言った。

と言っても、進むのは砂漠。

行きで辛さを味わっているから、そんなこと言われてもなあ。

「でも短いつて言ってるじゃ」

ああ……えっと、あんまロゴスの言葉を鵜呑みにしない方が良さぞ、グレン。

「どうして?」

知りたきゃロゴスにどのくらいの距離か『詳しく』自分で聞いてみな。

すると、グレンはどういうことだろうという表情をし、俺に言われるがままロゴスに聞きに言った。
そして、帰ってきた。

「ヤスの言った意味が分かったよ」

やっぱりな。

グレンは眉を傾け微笑していた。
因みにどのくらいだったんだ?

「前の距離の4分の3です」

すると、聞こえていたのかロゴスがそう言った。

「ね?短いでしょう?」

ねっ………て言われてもなあ。

確かに短いの意味は間違っちゃいないが……。

「まあまあ、ヤス!張り切って行こう?!」

サラはやる気満々に言った。

まあ、そりゃ分かってんだけどな……。

そんな俺は、相変わらずの涼しい表情であるロゴスを一目見た後、ため息を吐いた。

そしてシュキオンを後に俺たちは砂漠を進み始めた。

「しかし、本当暑いわね……。プールが恋しい……」

おいおい、早いぞカエデ。

まだ少ししか進んでないのに。

「だって暑いもんは暑いんだから仕方ないじゃない！」

「カエデっち　そういう時は楽しいことを考えると、案外乗り越えられるものなのだよ？　！」

すると、うるさいカエデに対し、ルミナがアドバイスをした。

そっぴゃ、ルミナも暑そうにはしてるけど、皆程ではないよな。

「楽しいことを考えているおかげで、お姉さんは乗りきれているのだ」

楽しいことかあ……。何だろう？

……。闘技大会を越える楽しみはあるのだろうか。

「ああ、もう！何か楽しいことが起きないかしら?!」

カエデはムカムカしていた。

てか、楽しいことを考えるんだろう？

起きたら苦勞しない……。って、

「うわぁ?!」

「ヤス?!」

近くに居たサラが声を上げた。

何故か、それは……。

「イタタタ……」

俺は何かがぶつかって来たことよって倒されていたからだ。

一体何がぶつかって来たのか……。

俺は確かめるべく後ろを振り返った。

すると、そこには物凄く懐かしい生物が居たのだった。

「ジュ」

そうそう、そういつ鳴き声……って。

「え………?」

俺は目を疑っていたのだった。

62・後を追いかけて

あゝ、何だろう、この異様にムカつくこの顔は……。

「ビーン、ビツ、ビーン！」

どうしてしまったのだろうか、暑くて幻影でも見てるのか？
砂漠の中にビバッチ一匹。

そう、俺に当たってきたのは砂漠にいるはずのないビバッチだったのだ。

「うわあゝ！可愛い」

そう言ったサラがビバッチを抱き抱えた。
つてことは、幻ではないみたいだな。

「珍しいですね、ビバッチこんなところに居るなんて。いや、有り得ないと言った方が良いでしょう」

ロゴスがそう言った。

やっぱりな、ロゴス言うんだからな。

……つて、もしかして、俺をしつこく追いかけてきて、川に落ちて流されたビバッチだったりするのかな？……なんてね。

俺はそんな事をなんとなく考えていた。

「ビーン！」

その時、ビバッチは抱き抱えられるのに嫌がっていた。

何だか、昔と同じ光景だな……。

……でも何だろう。

俺はビバッチが自分に何かを伝えようとしているように見えたのだ
った。

「何だか、ヒロみたいでブサイクだね」

すると、ルミナはビバッチを指差し見て、腹を抱えて笑っていた。
はは、ルミナもやっぱりそう思うんだな。

「ええ〜。ヒロなんかと違って可愛いと思うけどなあ……」

……って、おいサラ。

今さりげなく酷いこと口から滑らしてたぞ。

「ん？どうしたの、ヤス？」

「い、いや。別に何でも……」

サラ……、思っても言っちゃいけないことがあるってのは頭に入れ
とこうな。

まあ、サラだから仕方ないけど……。

「ビュー！」

「あー！待って！」

すると、ビバッチはサラの腕から逃げ出した。

………なんとというか、気にするなよ。

「あれ……？あのビバッチ、逃げないでこっちを見ている？」

グレンが言った。

俺はグレンのその言葉を聞き、逃げたビバッチを見た。
するとどうだろう。

ビバッチは俺たちより少し前の所で立ち止まり、顔だけこちらに向けていたのだった。

「ついて……こい……」

……あれ？

俺は何故かビバッチがそう俺たちに語りかけてきた様な感じがして、それを口にしていた。

しかし、それは皆には聞こえてはなかったみたいだ。
すると次の瞬間。

「ビバッチが走っていったわ」

セツナの言葉通り、ビバッチは先に進み始めた。

「ちょっと?!ヤス、どうしたの?!」

突然サラが声を上げる。

何故かというと、

「よし……、追っぞー!」

その時俺は、ビバッチを追いかけていたからだ。

「追っつて……、まさかあんた?!」

そうさカエデ、ビバッチに決まってるだろ。
何故と理由を聞かれても答えは自分でもよくわからない。
だけど、追いかけてはいけないような気がしたんだ。
本当、なんとなくだけどな。

「まあ、ビバッチの進んでいる方向は、私たちが向かおうとしているベリタス橋と同じ方向です。とりあえず、行きましょう。でないと、ビバッチだけでなくヤスマで行ってしまいそうです」

ロゴスが皆にそう語りかけていた。

とまあ、そんなこんなで俺たちはビバッチを追いかけている。
ビバッチの進む方向は、未だベリタス橋の方向である。
果たして、このビバッチは俺たちをどうしたいのか。
そして、俺は何故ビバッチの声が聞こえたのだろう。
そんな事を考えながら、俺はビバッチの後を追っていた。

「皆さん、そろそろベリタス橋に着きますよ」

ロゴスが言った。

橋に着く……、俺たちとビバッチの最初の目的の場所は一緒っばいな。

そして、とうとう俺たちはビバッチを追いかけると共にベリタス橋に着いたのだった。

「ビー」

すると、ビバッチは止まり、こちらを向いて鳴いていた。

「……………」

その時俺は、ビバッチに『橋を渡れ』と言われていたような気がしていた。

しかし、今回は俺の勝手な想像だ。

声なんてもんは聞こえはしなかったのだった。

63・ペリタス橋到着

宿屋とよろず屋、そして関所。

これらはペリタス橋の手前にある施設だ。

滅多に人は通らないらしく、余計な物は何一つ無いって感じた。

そう、殺風景な所だ。

「でも、それが良いんじゃないありませんか」

「そうね。私も好きだわ、こういうところ」

ロゴス、セツナが言う。

まあ、殺風景とは言ったが、静かで精神修行とか邪魔されずに出来
そうで良いけどな。

あと、一人になりたい時とかね。

「ビー」

因みに、ビバッチは今サラの腕の中だ。

そう、ここに着いた時からビバッチは、俺たちから逃げようとはし
なかつたのだ。

逆に俺たちについてくるようになった。

……ペリタス橋に来させたかったのか？

「そういえば」

俺の隣に居るサラが言った。

「夢中になってビバッチを追いかけてたおかげで、暑さに負けるこ」

となくここまで来れたね」

まあ、そういえばそうだな。

特に俺なんかは考え事をしてて暑さなんて感じる余裕無かったし。

「でも、疲れは皆さんあるでしょう。ベリタス橋を渡るのは、少し宿屋で休んでからにしましょう」

ロゴスが言った。

まあ、そうだな、そうした方が良さだろう。

何ていったって、次に向かう所は雪が降り積もる銀世界だ。万全の状態が望ましい。

「おっとつと！どうしたの、ビバッチ？！」

と、その時、サラが声を上げた。

その声を聞いた俺は、サラへ顔を向けた。

すると、サラの腕に抱えられてるビバッチが暴れていた。

「ビッ！ビッ！」

今度はどうしたんだ？

また、抱き抱えられているのを嫌がっているのか？

「ビッ！」

その時、俺とビバッチは目があった。

.....。

えつと、なんとなくだけど、橋に反応している風に見える様な見え
ない様な……。

「ビツ?!」

あ、ビバッチが……。

「もううつさいわね!サラ!こんなブサイクなの置いて早く宿屋に
行くわよ!」

「ちょ、ちょっとカエデ?!可哀想だよ殴ったら!」

カエデはビービー鳴いてたビバッチを殴った。

そしてサラの言葉にそっぽ向き、一人で宿屋に入ってしまった。

「ヒロ大丈夫?」

ルミナがビバッチを撫でていた。

つて、ヒロなのか?!ヒロになっちゃうのか?!

「とまあ、私たちも宿屋に行きましょう」

……………、そうだなロゴス。

なんか展開が急で忙しいな……。

「まあ、良いんじゃない?こついうのも」

何を根拠にそんなことを言ってるんだグレン。

ぐだぐだじゃねえか。

とまあ、俺たちは宿屋に入った。

またまた言うが、次に向かう所は雪が降り積もる銀世界だ。ここで、暑さから寒さに堪えるために切り替えをしなくては。

「すみません、部屋を貸してください」

「はい。えっと、人数は七人……と？」

ん？どうしたんだ？

宿屋の人の視線はサラに向いていた。

……まさか？

「すみません、ペットは入室禁止です」

「ビッ？！」

あ、あゝあ……。

『ビッ！ビッ！ビー！』

昼食を済ませ、部屋で準備をしてる俺たち。

「ビバッチちゃん、もう少し待っててね」

サラが窓の外に向かってそう言った。

そう、結局ビバッチは部屋に入れなかったのだった。

よって、外に放した。

すると、窓の外で待っていたというね。

まだ俺たちに用があるのか、それとも……なついたとか？

「無い……よな」

「ん？何か言った？」

「いや、何でもないよ、グレン」

まあ、今ビバッチはどうでもいいか。

気持ちを切り替えないと……。

俺は自分の顔を軽く叩き、気合いを入れた。

よし！準備万端だ！

「それじゃあ、みんな。ベリタス橋を渡りますか」

そして俺たちは宿屋を出た。

後に俺は橋の向こうを見た。

白銀の世界はすぐそこだ。

そして俺たちは調達したマントを羽織り、ベリタス橋の関所へと向かった。

64・心境

波の音が気持ちいいくらいに聴こえる。

気温も暑すぎず寒すぎず、丁度良い感じだ。

そう、俺たちは今ベリタス橋を渡っている。

最初は暑かったマントもそろそろ重宝される頃か。

大体中間辺りまで進んできたところだ。

「何だか嫌でもいろんな事を考えさせられる様な場所だな」

もちろん、良い意味でも悪い意味でも。

何て言うのだろうか、こう胸の奥が真っ白になるというか、そして、あること無いこと考えたりとか。

まあ、俺だけかもしれないがな。

はてさて、次に向かうのはロゴスの故郷と言うのか、住んでいる村、アグライアだ。

おさらいしとくと、優秀な学者や医者や育ち、そして住んでいる村だとロゴスは言う。

そこで、その優秀な医者によって、サラの記憶喪失に何らかの進展があるのではないかと思っただ俺たちはロゴスに案内してもらっているというところだ。

「やっと戻ってきた感が出てきました」

微笑みながら俺に向かってロゴスは言ってきた。

戻ってきた感ね。

そういえば、帰りの金は何で無くなったんだろうか、というか何しにあの大陸に来てたんだか。

まあ、どうでもいい事なのだが、気になってきたぞ。
これも、この橋の力なのか？　なんてね。

「アグライア……、一体どんなところなんだろうね」

期待に胸を膨らませているのである。

サラがそう話し掛けていた。

そして、その相手だが……。

「ビー」

そう、最近俺たちの仲間になりつつあるビバッチだ。

因みに、今は嫌がってはいないが、宿屋から出発する時サラが抱き抱えた時は物凄く嫌がっていた。

もう何が何だか、どっちかにしろって話だ。

まあ、これはどうでもいいな。

つまりだ、俺が何を言いたいのかと言うと、この旅はもう終盤に入ったのだろうということだ。

いや、もちろん終わらない可能性もある。

この旅、言えば『サラの記憶を取り戻す旅』はアグライアで大体結果が出るはずだと考えていた。

良くても悪くてもな。

そうになると、なんだかんだで集まったこのメンバーも解散するだろう。

それをなんとなく寂しいというか、残念というか、もったいないと
いうか……。

とまあ、そんなことを思っていたのだ。

我ながら、可笑しな考えだ。

でも、俺の旅がまだ終わってはいないのは忘れてはいない。

グロリア騎士団の動きについてだ。

ここまで旅をしてきて、まだ広範囲には動いては無いみたいだが、グラティアの事がある。

そう、騎士団長が来たということだ。

もしかしたら、何かまた新しい動きを見せるのではないかと見ている。

世界の安定とかその様な事を言っていたが、俺はグレンの故郷アペリエの出来事を直に見ているからそんな風には思えない。

だから、自分の目で確かめようと思った訳だ。

そして、それが俺の旅だ。

俺一人がどうにか出来る問題では無いのは十分分かってる。

だけど、知る必要がある、いや、知らなくてはいけないような気がしたから。

騎士団長の息子として……ね。

「ヤス、どうしたの？」

すると、サラが俺の顔を覗いていた。

いけないいけない。

いろいろ考えすぎてしまった。

これも、このベリタス橋のせいだな。

俺は「なんでもないよ」と答え、歩く方に専念した。

とりあえず、まずはアグライアに無事に着けるよう、頑張らなければ。

俺にとって初の雪積もる世界。

物凄く危険な場所だというのは俺も知っている。

まあ慣れているロゴスが居るのは幸いだな。

しかし、自分の身は自分で守らなくちゃいけないからな。

気を抜かずに行かなくてはね。

そして、俺たちはベリタス橋を順調に渡っていき、アグライアに向かうために通る雪原が鮮明に見え始めた。気温もどんどん下がってきているのが分かる。

それにより、俺たちはマントを深く羽織り、アグライアを目指し進むのであった。

65・雪原を抜けて

地面が光の反射でキラキラ光っている。
まるで一面が宝石のようで綺麗だ。

「天気が良くて良かったです。吹雪なんて吹いていたら、たまったもんじゃありませんからね」

地面にしゃがみ、雪を手に取りながらロゴスは言った。

吹雪か、体験したことないからよく分からないが……、ただでさえ寒いんだ。

こんなところで雪が物凄い勢いで吹いたら相当寒いんだろうな。

「寒いだけじゃありません。前は見ずらくなりますし、ここの吹雪は結構痛いです」

「痛い……のか？」

ロゴスは俺の問いに微笑みながら頷いた。

周り一面が雪景色。

そう、俺たちはベリタス橋を渡りきり、雪原へ進んでいた。

真っ白な世界に俺は心を奪われ感動したが、それより何と言っても……。

「ちとちとさ、寒いい〜」

カエデ、ナイスタイミング。

そう、さつきも言ったが寒い。

めちゃくちゃ寒いのだ。

例を上げるとあれだな。

バナナで釘が打てるだとか、濡れたTシャツを振り回すとカチンコチンに凍ってしまいうぐらい寒いのだ……って。

「イテツ！何すんだよ」

俺の後頭部は雪まみれになっていた。

すかさず振り向くと、ロゴスがニツコリ立っていた。

……お前だな。

「雪合戦です」

はあ？いきなり何なんだ？

「ここに住む子供たちの遊びの一つです」

雪合戦……、雪をぶつけ合う遊び。

てか、そんなのはどうでもいい。

「雪合戦は良いから早くアグライアに行こうぜ」

「そうですね、残念です」

おいおい、やるつもりだったのか？

今こんなところでやっても、慣れない俺たちは楽しめないぞ、きつと。

寒さに堪えるのだけでも精一杯だからな。

「じゃあ、アグライアに行きましょう。付いてきてください」

ロゴスは言った。

そうそう、早いところアグライアに行つて暖まりたいぜ。

その後、魔物との戦いを交えながら、順調に雪原を進んでいく俺たち。

途中、カエデの忍術やロゴスの火の魔術で暖まるなどして休憩を取るという方法は画期的であった。

おかげで、かじかんでいて上手く剣を握れなかった手もなんとか大丈夫だった。

そして今だが、俺たちは雪原を抜けて、一本道を歩いている。

この先に左右の分かれ道があり、右に行つて少し進めばアグライアに到着するらしい。

「あともう少しの辛抱です。皆さん頑張ってください」

ほらね。

とりあえず、魔物と雪と寒さに体力も結構やられたぜ。

休みはちよこちよこ取っていたが、やっぱりちゃんとした場所で休みたい。

それが、今の望みかな。

それにそろそろ夕方だ。

日が落ちる前に着きそうで良かったな。

暗い中、雪に囲まれてちゃあ、たまつたもんじゃねえしな。

とまあ、いろいろ言ってるうちに分かれ道が見えてきた。
ああ、本当何事も無くて良かったぜ。

「皆さん右です。行きましょう」

そして、俺たちはロゴスに続いた。
と、その時だ。

「ビー！ビー！」

「ビバッチちゃん？！」

サラとビバッチがじゃれあっていた。

「じゃれてるんじゃないよ！」

冗談だよ、サラ。

見ると、サラに抱き抱えられているビバッチが分かれ道の左に反応
をしていた。

もう何も驚かない。

またいつもの駄々だろ？

早く静めてアグライアに行こうぜ。

「でもいつもと少し反応が違うような」

サラが言った。

そうか？……どれどれ。

「ビー！ビー！ビー！」

……いつもと変わらず『ビー』だけじゃないか。
気のせいだ、サラ。

「そうかな……？」

はあ、仕方ない……、ほれ。

バシッ！

「ビツ?!」

「これで良いの？」

ああ、良かったぜカエデ。

俺はカエデにビバッチを軽くどつかせた。
とまあビバッチ、静かになっただな。

「てか、何であんたの言うこと聞かなくちゃいけないのよ、まった
く」

まあまあ、たまには良いじゃねえか。

これで、アグライアに行けるっつてもんだ。

「終わりましたか?じゃあ行きましょう」

ロゴスが言った。

お願いします、ロゴス。

「うう、ビバッチがかわいそう……」

サラ……。

とまあ、というわけでその後、俺たちはアグライアに着くのであった。

66・診察

「着きました」

そろそろ日が暮れて夕方になりそうな頃、俺たちはモコモコのジャンパーを羽織って元気にはしゃぎ回る子供たちを尻目に、普通の家から雪で出来たドーム状の建物に目をやっていった。

「ねえ？あの雪で出来たのって何？」

「ああ、あれはかまくらです」

サラがロゴスに質問をした。

そして、かまくらという返事が返されていた。

……かまくら、ね。

何であんなのがあるんだ？

「あの大きさ、そして出来から見て、子供たちが作ったのでしょ」

子供たちがか？

それは凄いな。

「しかし、職人の作るかまくらは私たち全員が入れて、なおかつ丈夫。そして、中で温かいものを食べるとなると、それはそれは良いですよ」

わざわざ、寒い中温かいものを食べるのか？

俺には考えられないな。

ロゴスの住む村アグライア。
雪原を抜けて、俺たちは到着した。
現在は雪が降っていて寒いが、その寒さを忘れさせてくれるような
温かい各家の光がとても綺麗だ。
絶景ってやつだな。

「こんなところで立ち話もなんです。私の家に行きましょう」

「賛成。早く行きましょ」

カエデが死にそうな声で言った。
そして移動し、平凡な一軒家に着いた。
中に入ってもこれまた平凡。

「奥の部屋は本だらけですけどね」

困った様な表情をしてロゴスは言った。
まあ、どうでも良いんだけどな。

「とりあえず、好きなところに座ってください」

そして、俺たちは各自座った。

「で、どうするの？」

セツナが口を開いた。

「今日は休むわよね？」

「ああ。そして明日はサラを医者の方に連れていく」

俺は速答した。

その為にここに来たんだからな。

そして他の皆も了解の意を示していた。

……明日か。

「サラ、良くなれば良いね」

「うん」

サラの記憶戻れば良いな。

次の日になり、俺たちはロゴスの紹介で、サラをアグライアで一番優秀な医者に見てもらえることになった。

顔が広いロゴスに感心しつつ、俺はサラが早速診察をするというところで、診察室に入っていくのを見送った。

頼むぜ医者、そして神様。

俺は今までにない祈りを捧げていた。

これは他の皆も俺とおなじ気持ちであろう。

記憶喪失、時には忘れていた方が良かったというパターンもあるっちゃあるが、治った方が絶対に良い。

だから、何らかの進展を見せてくれ。

そして時間が経ち、

「終わりました」

診察室から医者が出てきた。

俺たちは一斉に医者に向を向け、そして聞くのだ。

「サラは……、サラの記憶はどうなんですか?!」

すると、医者は表情一つ変えずに、

「分かりません」

と答えたのだった。

……分かりませんか、どういうことだ?

そして、俺たちは医者に説明を受ける。

記憶を失っていると聞き、脳に傷害があるかどうか調べたが、特に変わったところは無いと言う。

そして、他にも彼の知識の中でいろいろ調べたが、異常は無い。

よって、原因は記憶が無くなる前に何か辛い場面の体験によるショックなどではないかと。

そこまでだったら、長期に渡り、いろいろ治療法はあると言う。

しかし、『分かりません』と言った理由はこうだった。

「脳の周りにうつすらと霧がかかっている風に見えた」

これは一体どういう事かと聞いても、医者は初めてらしく分からない。

だから、『分かりません』と言ったのだ。

彼の知識の中には無い脳の周りに漂う霧。

いや、霧なのかも分からないらしい。

とにかく、記憶喪失の原因はそれかもしれないという予測もしているみたいだが、どうなのだけ。

とりあえず、治療を行うかどうかはサラの判断に任せるらしい。

そして、俺たちはサラと対面した。

「霧かもしれない」

サラの第一声がそうだった。

「ほら、私が初めて治療術を使った時。あの時、脳内に霧がかかっている様な気がして、それが少し晴れたような気がしたの」

ああ、確かにそんなことぽろっと言っていたっけ。

……もしかして、サラ自身にも自覚があるんだとしたら……。

霧、それは一体何なのか。

考える必要がありそうだな。

67・追行

雪がしんしん降る昼のアグライア。

サラの診察を終えて、一旦俺たちは外に出ていた。

さてと、どうするか。

皆も、考え込んでいた。

サラの脳にかかる霧。

優秀な医者が見たつて言うのだ。

あるのは事実なんだろう。

「ロゴスは霧つてのは分からないのかい？」

「すみません、私にも分かりません」

グレンとロゴスの会話。

まあ、分かってたら苦労しないよな。

とりあえず、ここには優秀な医者だけでなく学者もいるんだ。まずは、いろいろ聞いたり調べていくしかないかな。

「なら早速行きましょう。案内します」

本当ロゴスは顔が広いな、助かるぜ。

「みんな……」

すると、サラが口を開けた。

「いろいろ迷惑かけて……。ありがとう」

申し訳なさそうにしゃべるサラ。

「気にすんなよ」

俺はその一言をサラに言った。

皆も同じだったのだろう。

サラに笑って見せていた。

それを見たサラも表情が徐々に微笑みに変わる。

俺はその表情を見て、絶対に治してやりたいと決心をした。

今まで以上に絶対に、ね。

と、その時だった。

「ビッ！ビッ！！」

「?!！」

サラがびっくりする。

いや、皆もびっくりしていた。

今までおとなしかったピバッチが、急に態度一変、今までに無い鳴き声と共にサラの腕を払って逃げていったのだ。

啞然……………。

「一体どうしたのかしら」

セツナがサラに問った。

するとサラはポカーンとした表情から、

「分からない……、分からないけど」

と言った。

そして次の瞬間、

「ついて来いって……」

と言い、いきなりビバッチを追い始めたのだった。

「お、おい！サラ！」

俺はサラを追いかける。

もちろん後から皆もついてくる。

本当突然、ついて来い……だと？

そして、街を飛び出したビバッチとサラは、分かれ道に着く。

するとビバッチは迷い無く右に曲がった。

右とは、まだ行った事の無い方面だ。

そう、アグライアから見て、左が雪原、俺たちが歩いてきた道だ。
では右は？

「右には何も無いはずですが……」

ロゴスが言う。

そして、ビバッチに続き、サラ、俺たちと走っていく。

静かに降る雪に気にも止めず、ひたすら俺たちは追った。

そして……。

「ビバッチ……」

「え……？」

俺たちはサラに追い付いた。

サラはこれまたポカーンと口を開けて驚いていた。

何故か？

問うまでも無い、俺は分かっていた。

「あれえ？ビバッチは？こっちに逃げたはずなのに」

ルミナが辺りを見回す。

しかし、見回しても意味は無い。

なんたつて……。

「周りは岩壁ね」

そう、セツナも言った通り、俺たちは岩壁に囲まれた道の行き止まりに着いたのだ。

そして、ビバッチの姿が見当たらないのだ。

では逃げてきたビバッチは何処へ？

……皆はどうか知らないが俺は見えていた。

そしてサラも間近に見たであろう。

「サラ」

「……うん」

俺とサラは、行き止まりである岩壁に手を伸ばした。
すると……。

「……つな?!」

カエデがまるで怪奇現象を見たかのような表情で驚いた。

……てか、その通りそうなんだけどな。

「……壁にめり込んでる?!」

そう、グレンの言う通り、俺とサラの腕は岩壁をすり抜けていた。

「ヤス?!」

「ああ、奥に何かあるみたいだな」

俺は頭も壁に入れ、中を確認した。

そこにはまだ道が続いていた。

そう、ビバッチはここを進んでいったのだった。

何のためらいも無く普通にすり抜けていったビバッチ。

これは何かあるかもしれないな。

68・異空間の中で

何だろう、この道はなんか歪んでいる感じがする……。

そう俺が思った道は、アグライアから西に進んだ先の岩壁の奥に存在する、なんとも異空間な道だ。

道が岩壁によって隠されていたのか、はたまた岩壁の奥に道が出来たのか……。

分からない事だらけである。

そして、その分からない事の内の一つが、

「みんな、大丈夫かな……」

サラが言った。

一応言つとくと、サラが言うみんなとは、グレン、カエデ、セツナ、ロゴスである。

そう、今ここには俺とサラしか居ないのだ。

何故か？

それは分からない。

言えば、岩壁をすり抜けることが出来たのは、俺とサラしかいなかったのだ。

他の皆は、当たり前のように岩壁に当たる。

すり抜けることが出来なかった。

何故だ、何故俺とサラは通れて皆は通れなかったのか。

理由は考えても分からない。

分かるはずがない。

「大丈夫だよ。ロゴスが居るし」

サラの言葉に答える俺。

とまあ、ビバッチを追って、俺とサラは先に進む訳だ。
いかにも怪しい道だね。

道を進んでいくと、景色が徐々に変わり始める。

今までは冬景色だったが、所々神殿が分からないが、遺跡の一部の
様な物が見え始めていた。

そして、

「暖かくなってきたね……」

寒かったはずの気温が徐々に上がってきていたのも体を通して伝わ
っていた。

はてさて、そんな空間を進んでいくと、光輝く扉が俺たちの目の前
に現れた。

まるで俺たちを待っていたかのように。

そして、俺は何の迷いもなく、ドアノブに手を掛けた。

「……………」

無言のサラからドキドキしているのが伝わってくる。
そして俺はドアを開けた。

暖かな光を放つと共に開いたドア。
俺は奥を見やるとそこには螺旋階段が下へと続いているのが分かった。

「行くぞ」

俺はそう言い、サラと階段を降り始めた。
迷いなく進んだのには理由はちゃんとある。

『ビー！』

下から響いて聞こえるビバツチの鳴き声。

という訳で、降りていくと共に壁に付いているロウソクがタイミン
グ良く火が点るのに目をやりながら、とうとう俺たちは一番下に辿
り着いた。

古い本が散乱している通路の奥には大きな扉。
あれだな、フラグだな。

いかにも何かあるって感じだ。

「何かあったら守ってやるからな、サラ」

「ヤスこそ、何かあったら守ってあげるからね」

はは、頼もしくてありがたいね。

『ビー！』

ガチャ

……居た。

本棚に囲まれた広間の真ん中にビバッチ一匹、……そして。

「お爺さん？」

目は眉毛で隠れ、床にとぐろを巻いて置かれていたほど長い白い髭が印象強い、ローブを羽織っているじいさん。ビバッチの隣に椅子に座ってこちらに向いて居た。

「ビュー！ビュー！」

俺たちが入ってきた途端に、いつそう騒ぎだしたビバッチ。顔を俺たち、じいさんと交互に見ている。何がしたいんだ？

「まあまあ、そんな所に突っ立ってないで、こちらに来なさいな」
すると、じいさんが口を開けてそう言った。
俺はサラと顔を合わせていた。

「そんな警戒せんで良い。ほれ、このソファーに座りなさい」

そうじいさんは言うと、無かったはずのソファーと長机がじいさんの前に現れた。

おいおい、じいさんは魔法使いか何かか？

俺はそんなことを思いながらもサラと一緒に恐る恐るソファーに移動し座った。

ビバッチがあくびをしているのを尻目に、俺はじいさんを見ていた。分かりづらいが微かに微笑んでいるのが分かった。

逃げたビバッチを追いかけたらこんな所に辿り着くとか。

一体この空間といいビバッチ、そしてこのじいさんは何なんだ？

そして俺はじいさんに聞くのだった。

「ここは一体何なんだ」

……とね。

「ここは一体何なんだ」

俺の声が静かな部屋に響く。

隣に座るサラもじいさんを見ている。

「ワシの家じゃよ」

ゆったりとした口調でじいさんは答えた。

「家……ね」

こんな所に住んでいるとか、それはまたまた悪趣味なことだな。

こんな気味悪い所に好き好んで住んだら、俺だったら頭がどうにかなりそうだぜ。

「それとな」

すると、じいさんはそう言った後、間を置き、

「ワシが唯一存在出来る場所でもある」

と言った。

それはどういう意味だ？

一番最初に思うであろう、率直な疑問。

それは俺もサラも、顔にも出ていたであろう。存在出来る唯一の場所。

意味が分からない。

「ここでないと言えない、外じゃとワシは死んでしまうから
う」

笑い混じりにじいさんは言った。

「死んで……しまう？」

これまた分からない。

何かの病気持ちか？

それとも、寒くて凍え死んでしまつとか言つんじゃないだろうな……。

「それは、どういう事なんですか？」

すると、俺が聞く前に、サラがじいさんに問った。

すると、驚きの言葉が返ってきた。

じいさんは小さな事のようにこつこつ言ったのだ。

「ワシはこの時代の人間では無いから。言わば、過去の人間
じゃ」

ほっほっほつと、笑っているじいさん。

しかし、言っている内容は笑い事じゃない。

「紹介が遅れたのう。ワシは……そうじゃの、クレオスとでも言
つとこうかの」

……いい加減だな。

でも名前なんかどうでもいい。

「俺たちに分かるように説明してくれないか、そのビバッチの事もな」

こちらを向くビバッチ。

その目はいつもと違って、いる風に見えた気がした。

すると、俺の言葉を聞いたクレオスはビバッチを見て、何やら合図をしていた。

と、その時だ。

突然の発光、それはビバッチからだ。

俺とサラは目を眩ませていた。

そして、光が収まった時、俺たちの前には一人の金髪少女が立っていた。

「まったく、こんな姿で動き回されるとはな」

少女は長い金髪をサッと手で払い、愚痴を言っていた。

その光景にもちろん驚く俺たち。

魔物から人間に変わっただと?!

もう何が何だか……。

「この子はのう、ワシが作り出した光の結晶じゃ」

光の結晶……? ?

「まあ魔術で作り上げた存在と考えてよい」

となると、この少女は人間でも魔物でもないのか……。

「信じられないな……」

「そうじゃろうな。なんたってこの術を使えるのはワシ入れて二人だけだからのう」

もう一人居るのかよ。

……などと突っ込みはしないが、

「じゃあ、何でその光の結晶とやらは俺たちに関わってきたんだ」

「シャインだ」

腕を組んで少女が言った。

……じゃあ、シャインはどうして俺たちに関わってきたんだ。

「この世界の光を見つけたからだ」

「光って……私たちの事？」

「そうだ」

俺たちが光？

光って何だ？

「光はこの世界において重要な存在。誤った道を進んだ闇を抑える為の。そしてお前たち二人が捜していた光。受け継がれた存在」

……ん？受け継がれた？

それはどうということだ。

「過去にあった大異変、闇の暴走を食い止めた二人の男女から光を

受け継がれた存在がお前たちだ」

大異変って大不況の事か？

「違う。だが、関係はしている。あれは闇が暴走してしまった事による後遺症だ」

……えっと、何だ？

とりあえず、俺とサラが光で、光は闇を抑える為の存在で、それが俺たちに受け継がれ、クレオスとシャインが俺たちを捜し見つけ、最終的にはここに連れてきた……と。

いくらなんでも急展開すぎるだろ……って、ん？

「もしかして、あの力。あの変な宙に浮かぶ魔物を倒した時の力が光か」

「魔物？お前ら、ヴァジュラと戦ったのか?!」

シャインが驚いていた。

何だ？あの魔物はヴァジュラというのか？

「ヴァジュラ……、『決して壊れないもの』……まさか現れているのか」

すると、クレオスがそう言った。

そして、シャインと同じく驚いている様な口振りだった。

あのう……、まだまだ全然話にピンと来ないし、聞きたいことも沢山あるんだが……。

「……ん？おお、分かった。とりあえず、お主らの質問に答えるとするかのう……」

そう言ったクレオスの表情は少し焦りが見えたようにも見えた。

全然話が読めない中、とりあえず俺たちは質問もし始めたのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6370i/>

Tales of memories

2010年10月9日22時07分発行